

第5篇 上野国分二寺中間地域

第1章 発掘調査と整理の関係

昭和45年3月25日から同年5月2日に調査が実施され、昭和46年度に『上野国分寺周辺地域発掘調査報告—僧寺尼寺中間地域の考古学的検討—』(群馬県教育委員会)が刊行され、本文60頁、写真図版20頁にまとめられた。今回の整理は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている記録保存図、写真、遺物と合せ群馬県歴史博物館管理の遺物類を加えた。以降、発掘調査時点の調査方法を概報より引用し、今回の整理との整合について説明したい。

「上野国分寺は群馬郡群馬町東国分の地を中心に前橋市元絶社町の一部にかけて存在する。この僧寺と尼寺の位置的関係は、上野国分尼寺の調査(昭和44年、県教委)によって、僧寺の東方3町(約327m)を距てて尼寺の所在することが明らかとなった。このことにより、本調査は、特に僧寺と尼寺の中間地域である群馬町東国分寺前の地域を対象として行った。

調査は、その目的と性格にそって、でき得る限り、調査対象の全域にわたらせる必要上トレンチ方式で行った。尚、トレンチ及びその中のグリットの設定は概ね次のように行った。

① 尼寺調査の際に設定したベンチマークを、そのまま西方250mの地点に移動し、本調査のためのベンチマークとした。

② このベンチマークを起点として、東西南北各方向に軸線を設定した。但し、この軸線の北軸は磁北より東へ6度50分ぶれるものであった。

③ 各軸線は10m毎に区切り、各軸線によって挟まれた地域は、座標式に呼称することにした。

④ 即ち、N軸線10mとE軸線10mに挟まれた10m平方の地域は、その最大の座標点であるN10m、E10mをとって、N10-E10区と呼称した。

⑤ しかし、実際に発掘するに当っては、10m四方の地域を一単位としながらも、作業上の便宜を考慮して、その周囲を50cmづつとて、正味9m四方の地域をとり調査の対象とした。

⑥ よって、今回の各トレンチにおけるグリットは、原則的には9m四方の地域を井字状に分割して、3m四方の地域とし、これを1グリットとした。

⑦ 各グリットの呼称も、やはり座標式を採用し、例えば、N10-E10区の中央部分、即ち、N軸線の3.5mから6.5、E軸線の3.5mから6.5mのグリットは、その最大表示であるN6.5m、E6.5mをとって、N6.5-E6.5と呼称した。

⑧ トレンチは、合せて、南北方向に15列とほかに1個所設定したが、特に北半分の地域を重点的にとりあげ、各列は原則的に20m間隔とし、各トレンチ内のグリットは、原則的に一つ置きに設定した。

⑨ 尚、トレンチの呼称は、整理の段階で便宜上、北半分の地域に位置するものは東からA、B、C……とし、最も西に位置するものをJとした。又、南半分の地域に位置するものは西から漸次K、L……とし、最も東にあるものをOとし北半分の地域については南から北へ、北半分の地域については北から南へトレンチ毎に通し番号を付して、わかり易くした。

以上により、今回の調査において、最も東方に位置したAトレンチはE33.5(E方向B、Mより30m50cmから同じく33m50cm)の列で、これは推定される尼寺寺域の西の限界から西方へ約113mの位置に当る。他方、



第76図 上野国分寺中間地域調査図

最も西に位置するJトレンチは、W176.5(W方向へB、Mから173m50cmから176m50cm)の列で、これは推定される僧寺寺域の東限界から僅かに1m50cmの位置に当り、この東西間隔は約212mにわたった。尚、もっとも北方に位置するグリットは、EトレンチのN76.5(N方向へB、Mから73m50cmから76m50cm)であり、また最も南方に位置するものはMトレンチのS99.5(S方向へB、Mから96m50cmから99m50cm)であり、この南北間の距離は173mにわたった。よって、調査対象の地域は非常に広大であったが、東方部分の一部を除いて、発掘調査の可能な範囲においては、満足とは言えないまでも一おう全地域を網羅することができた。」とある。

以上のように発掘地の呼称はA～O列までのトレンチ名称と原点より方位軸を用いた座標名称との二種が用いられ、図面類は⑨の列名称が併用されているが、座標ポイントの記入は極めて少なく、第78図から第194図間の座標位置は、既作成の全体図を参考に、用いられた方眼紙の記入位置、および写真から推定したものであり、その信頼度は極めて低いことに注意されたい。記録保存図中や遺物類は座標名を記入した例が主体的であり、発掘区の四方のどれを呼称すべきなのか調査方針⑦の内容は撤底を欠く点がある。その結果、誤記入、未調査地を記入してしまうなどが行なわれ、その場合、図面は欠落の最近接調査区へ、遺物類は最近接調査区へ編入した。また③にある10m毎の方画を細分割する場合、⑤の50cmの内法をとり、正味9m⑥とする方法などさらに仔細な用法が加わり、極めて誤まりを生じやすい調査地呼称ならびに用法である。原図中の表現は訂正せずそのままにしてあるため、この報告と照合のうえ扱う必要性あり。

写真類はカラースライド6本分が残存するほか、ネガ類は一切見当らず現品不明となっている。本書中に使用の写真は、当時の記録カードに6cm判の密着焼が貼付されており、それを白黒複写して使用した。画像がやや不鮮明であるのはそのためである。記録カードには撮影場所の記入はなく、密着焼中にわずかではあったが座標名を記入した小ボードが写し込まれている外は、平面、土層断面図とを照合して撮影場所を判断した。しかし、最終の平面図化の状態と撮影された状態と大差がある場合もあり、どうも、撮影後に再び掘り下げが行なわれ、最終状態は未撮影となった場合も相当数あったようである。また写真清掃はきちんと実施され、その態度は現在もなお習るべき点である。

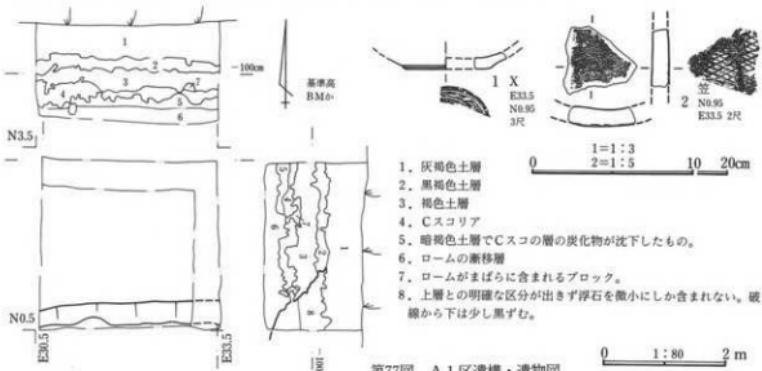
記録保存図は1:10を主に、少數ながら1:20図がある。前述のように、写真にありながら図化描写されていない時に補描を加えたが、基本的には描き起しである。主にかくれ線となった破線を除く破線と上端、下端線の入っていない落ちマークが、加筆個所である。土層断面と平面図の関係は、土層断面図の長さを変るなどの工作は行なっていないが、断面基部をトレンチ外部と同じ2点鎖線を用いて表現し、土層境と異なることを示した。水糸水準線は原点からの高さでと考えられるが、原点の標高水準値が明確でなく、地形上の等高線を見ると128～128.5mの間のようである。図中の水準位置、数値は変更してはいないので誤記入があればそのまま本書に記載されていることになる。

出土遺物は、昭和46年度の報告の際に手が加えられていたため、A・B・C列順に詰直して作業を始めた。遺物注記は複雑な座標名称が入り乱れ、その詰直しは難渋した。各調査区内から出土した遺物類のうち、当センターに保管されている個体については破片数を数え、歴史博物館に収納の平箱8箱の内訳けは数えていないが、大形土器片、複元個体、鏡、瓦などであり、それらの数量を含めなくとも遺物傾向は捉えうると考えられた。しかしながら歴史博物館の稀少種、總ての鏡、字瓦は実測し、本書中に掲載してある。本書中の当遺跡の遺物掲載量は土器類ほかが321点、瓦類が139点、計460点である。抽出の方法は、時代別、遺物種別、遺構の性格づけに寄与できるように總て実見し、撰査したつもりである。

第2章 調査された遺構と遺物

A 1区 (第77図、写真図版36)

概報の一覧に「A-1、E33.5・N3.5、東-西方向に走る大規模な溝を確認。その掘込み面はBスコリアより上面である。備考-大規模な溝」とある。Bスコリアとは浅間山B軽石を指し、降下は平安時代末期。整理所見-溝の掘込みは中世以降であり、遺物中に中世土師質土器皿1個がある。当センター収蔵遺物は、78点あり、瓦36、土師器17、須恵器18、灰釉陶器1、石5、中世土師質土器1。



第77図 A 1区 遺構・遺物図

A 2区 (第78図、写真図版36)

概報の一覧に「A-2、E33.5・N9.5、Cスコリア上面に褐色土層に覆われて、北西から南東方向にかけやや曲線的にロームのブロックが並列して認められた。備考-ロームブロックの配列」とある。

整理所見-前出Cスコリアは浅間山C軽石を混えた層のことであり、同層の噴出期は4世紀頃である。ロームのブロック配列は、1984年の関越道新潟線調査の上野国分僧寺・尼寺中間地域のおり、榛名山二ツ岳のFA火山灰層を主体とする細のさく跡理土であることが判明し、A 2区周辺に6世紀前半年頃の烟が存在することの左証となる。したがって烟跡の歯を除去し、残すべきところを逆に調査したことになる。なお類似のE 1区は編者自身も発掘に加わり、今にして思えば明らかに誤認であった。高さの表現が不明であるが3条ともに10cmほどの厚さである。

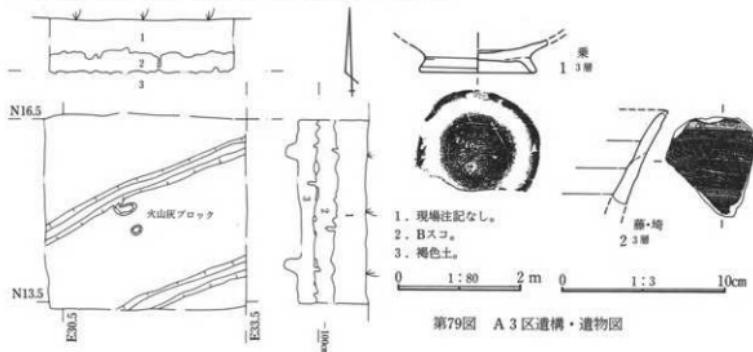


第78図 A 2区 遺構図

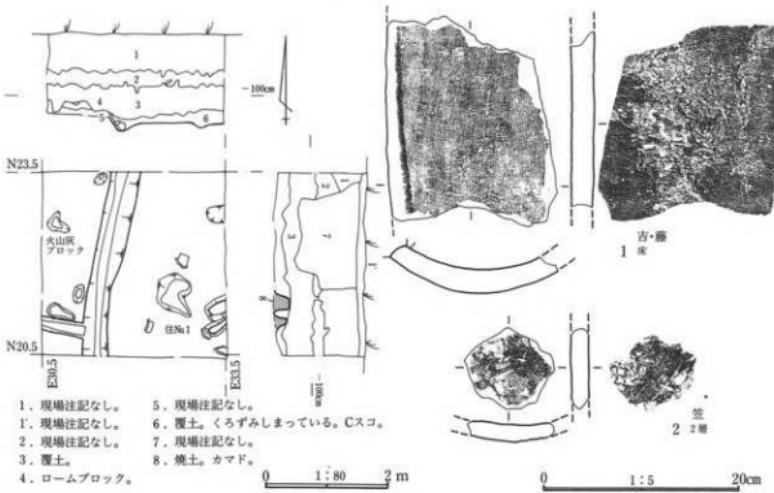
A 3区 (第70図、写真図版36)

概報の一覧に「A-3、E33.5-N16.5、細い溝状遺構が二本並行して、南西から北東方向にかけて認められた。この切込みは褐色土層中でCスコリア層を切っていた。備考—溝状の遺構」とある。さらに、溝状遺構一覧に「A種、走行-S66W(北東-南西)、長さ-3m30cm以上、幅-32cm、深さ-20cm、底部幅-10cm、切断面にみる形-ほぼU字形、備考-第III層から第IV層へ掘り込む二条平行する。」とある。

整理所見-溝A種とは横断面U字状の溝を指しており、A 3区溝の時期は土層断面より古墳時代中期から平安時代末期の間の時期である。図中の小塊はA 2区の烟跡の延長に相当の火山灰塊である。遺物は当センターに33点があり、瓦16、須恵器15、土師器1、石1であった。



第79図 A 3区 遺構・遺物図

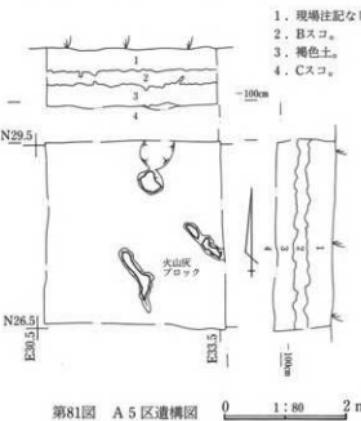


第80図 A 4区 遺構・遺物図

A4区 (第80図、写真図版36)

既報の一覧に、「A-4、E33.5+N23.5、壁溝をめぐらす竪穴住居跡確認。周囲の原地表面とみられるところにロームのブロックが2個所確認。備考—住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No.1、A-4、E33.5+N23.5、形状一方?、規模—P不明・H35cm、方位—N18°E、床面の状況—良好・同穴—不明、壁溝—上幅30cm、竪一有、位置不明、遺物一瓦」とある。

整理所見一前出のロームのブロックとはN21、N22.5の西壁よりの2個所で、第80図中の落込み表現は誤りである。住居跡については南東隅に土層断面図注記にカマドとあり、周溝と思われる南北の小溝が走る。



第81図 A 5区遺構図

両者を合せ、一棟の住居跡とすると異形になるので複数が重なっていると考えられる。土層断面からすると、古墳時代烟跡を切り住居跡の順となる。遺物は当センターに22点があり、瓦11、須恵器9、石2である。

A 5区 (第81図、写真図版36)

既報の一覧に「A-5、E33.5・N29.5、Cスコリア層の上面、褐色土層に覆われて、ロームのブロックが北西から南東方向にかけて並列して認められた。備考「ロームブロックの配列」とある。

整理所見一様名山ニツ岳FA主体層とここで云うローム層ブロックとは同じ形容を指すが、そのブロックの混入はA1区の北壁土層断面中にもあり、A2区へ。A3区は写真中に見えA4区、A5区、A6区にまで至って存在し、広域に6世紀頃の畠跡を認めることができる。A5区では2条が存在し、およそN40°Wで、A2区N35°Wよりやや西偏する。遺物は当センターに6点があり、須恵器5、土師器1と數は少ない。



1. 表土。比較的さらさらしている。やわらかい。
2. Bスコ。
3. 現場注記なし。
4. ロームのブロック。Cスコ。

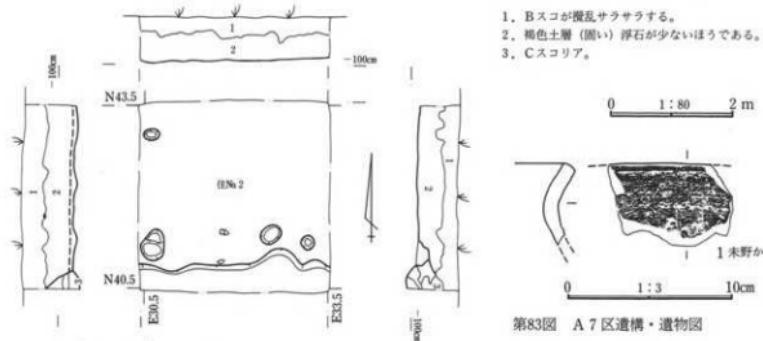
第82回 A 6区遭撲図 0 1:80 2 m

A 6区 (第82図、写真図版36)

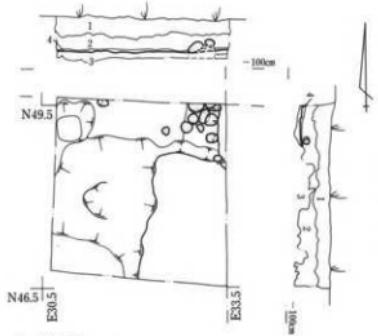
既報の一覧に「A-6、E33.5・N36.5、特に記すものなし」とある。

整理所見—土層断面の注4のロームのブロック、Cスコトは、浅間山C軽石を含む黒色土中にロームブロックが混るとの意味であろう。写真中の調査基底部は黒く写され左証の感あり。このことから榛名山二ツ岳FAを主体とする烟さく跡は統一していると考えられる。遺物は当センターに6点があり、須恵器5、中世陶器1で、生活感のやや薄い場所のように思える。中世陶器は散在的で各所にある。

第2章 調査された遺構と遺物



第83図 A 7区遺構・遺物図



第84図 A 8区遺構図

- 耕作土層。
- 黒褐色土。下の方へくるとロームもはじ。東壁の写真にはそのローム層との境の線が入るが、記録図面に記入はない。
- ローム層。さらさらしている。
- 黒褐色土。床面。焼土は極少量。炭化物は少量。遺物は土器片。灰は少量含む。

0 1:80 2 m

A 7区 (第83図、写真図版37)

既報の一覧に「A-7、E33.5・N43.5、かたい床面をもつ竪穴住居を確認、柱穴とみられるものも3個確認された。備考-住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No 2、A-7、E33.5・N43.5、形状一方?、規模-P不明・H40cm?、方位-N 0°E、床面の状況-良好・同穴-3個確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-土器」とある。

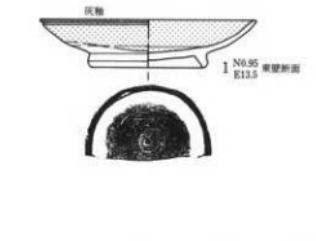
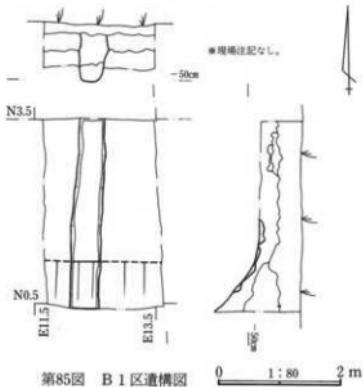
整理所見-土層断面注2を埋土とする住居跡と、それに先行すると思われる住居跡様の立上りが南壁沿いに東西軸にある。前出のNo 2とは住居跡2のことである。N41以北の広がりの床面を指すと考えられる。遺物は当センターに19点があり、須恵器6、土師器12、石1である。土師器量が多いのは9世紀を含む以前の地方傾向であり、第83図1は、10世紀末から11世紀前半頃の土師質窯である。

A 8区 (第84図、写真図版37)

既報の一覧に「A-8、E33.5・N49.5、住居跡の痕跡とみられる床状の部分を検出。しかし、地層が既に擾乱されているため実態は不明。備考-住居跡か」とある。竪穴住居跡一覧に「No 3、A-8、E33.5・N49.5、形状-不明、規模-不明、方位-不明、床面の状況-張床らしいものあり、同穴-らしきもの1個確認、壁溝-未確認、竈-未確認、備考-住居跡か」とある。

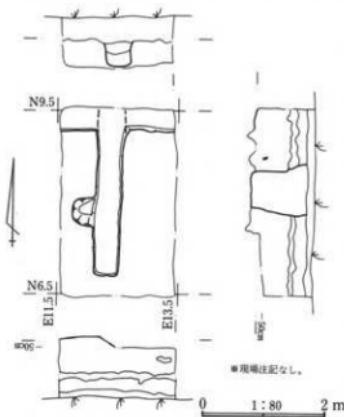
整理所見-土層断面の注4に床面と添記があり、No 3とはこの部分の住居跡名称か。全体的に複数で凹地があり、住居跡は重複しているらしい。北東隅の石材は竈材に見える。遺物は当センターに17点があり、瓦1、土師器16で、土師器が多いのは9世紀以前の地方傾向である。

第5篇 上野国分寺中間地域



第86図 B1区遺物図(歴博ほか)

B1区 (第85図、写真図版37)



第87図 B2区遺構図

器1があり、第86図は10世紀代の灰釉陶器で、土師器多用は9世紀以前の地方傾向とは異なるため、複数時期の生活域がこの周辺に重複存在しているらしい。

B2区 (第87図、写真図版37)

既報の一覧に「B-1、E13.5+N3.5、東-西方向に走る大規模な溝（A-1と同じもの）と、これに直交する形で細い溝状遺構確認。大規模な溝の埋没土中にも認められる。備考-溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走向-S-9W（南-北）、長さ-7m以上、幅-50cm、深さ-80cm、切断面にみる形U字形、備考-第I層下部から掘込む」とある。

整理所見-平面図と東壁土層断面の関係がおかしい。記入の誤りがあったとすれば近接区にちがいないが、はっきりしない。平面図と北壁断面は一致する。東壁と南壁断面は南東隅で一致する。遺物は当センターに、該当はなく、未出土の可能性もある。

B 3 区 (第88図、写真図版37)

既報の一覧に「B-3、E13.5・N16.5、Cスコリア層の下部にピット状の遺構を認む。但し、性格不明、Bスコリア層の下層褐色土層中に水に洗われた砂層がレンズ状に堆積、性格不明。備考—ピット状遺構等」とある。

整理所見—東西に長い凹地の南端を調査したらしく、4世紀頃の浅間山C軽石層を含む層が注4にあり、それより上方も東壁断面では北下りの堆積傾向がある。それは北よりの台地勾配と逆の走行である。遺物は当センターに、該当がなく未出土の可能性もある。

B 4 区 (第89図、写真図版37・38)

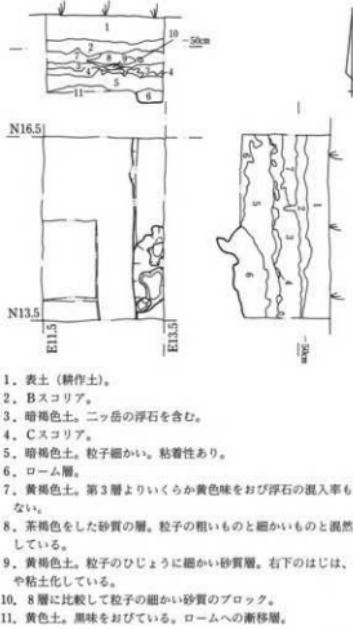
既報の一覧に「B-4、E13.5・N23.5、ピット状遺構を認める。切込み面は褐色土層中とみられる。埋没土中には瓦の破片もみられる。備考—ピット状遺構」とある。

整理所見—土層断面は番号のみで未記である。B3区と比較すると層厚は近似し、共用して使用したのかもしれない。注3層まで遺物らしき小片の記入があり、南西隅の土壤は注3を埋土とする。注6はB3区であればローム層となるが、B4区では未記のため判然とせず、注6を埋土とする凹みが遺構なのか、トレンチなのかはっきりしない。遺物は当センターに8点あり、瓦1、須恵器1、土師器4と少ない。

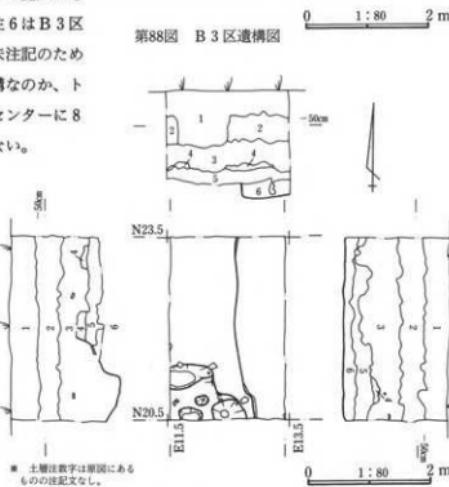
B 5 区 (第90図、写真図版38)

既報の一覧に「B-5、E13.5・N29.5、ピット状遺構を確認、切込み面は褐色土層中とみられる。埋没土中に瓦の破片もみられる。備考—ピット状遺構」とある。

整理所見—住居跡の一角を調査したようである。北東隅の土層断面の状況も、それを思われる。遺物は当センターに22点あり、瓦1、須恵器2、土師器19点があり、生活感が漂う。

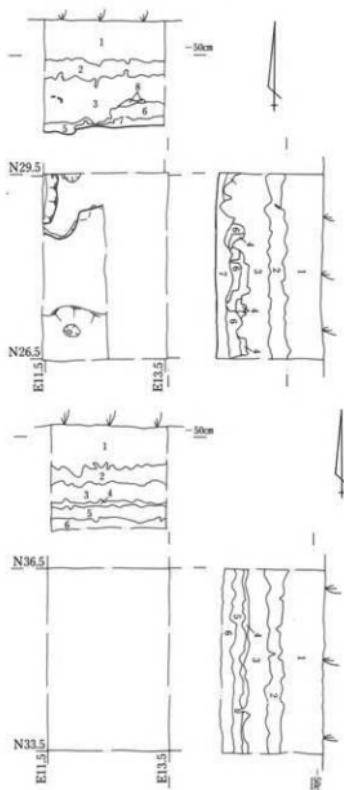


第88図 B 3 区遺構図

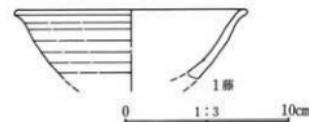


第89図 B 4 区遺構図

第5篇 上野国分寺中間地域

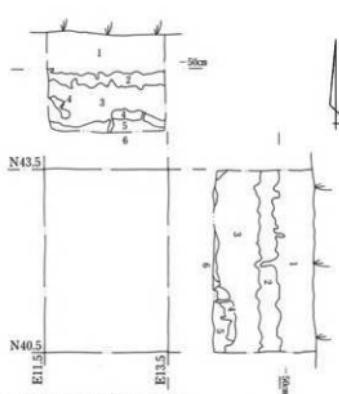


第91図 B 6 区遺構図 0 1:80 2 m



1. 耕作土。
2. 浮石を含む。Bスコリア。
3. 暗褐色土。大粒の浮石を含む。
4. 黒味強い。Cスコリア。
5. 黑褐色土。黒味が強く、3層に比較し浮石が少ない。浮石の粒は細かくしまっている。
6. 茶褐色土。上部は黒味をおびている。浮石を混入する。粒子細かく、よく縮まっている。粘土層。
7. 茶褐色土。よく縮まっている。粒子細かくかたい。浮石の混入なし。6層と良く似ている。粘土層。
8. 色は3層とほぼ同じだが、浮石の混入率が高い。ザラザラした感じ。

第90図 B 5 区遺構図・遺物図 0 1:80 2 m



第92図 B 7 区遺構図 0 1:80 2 m

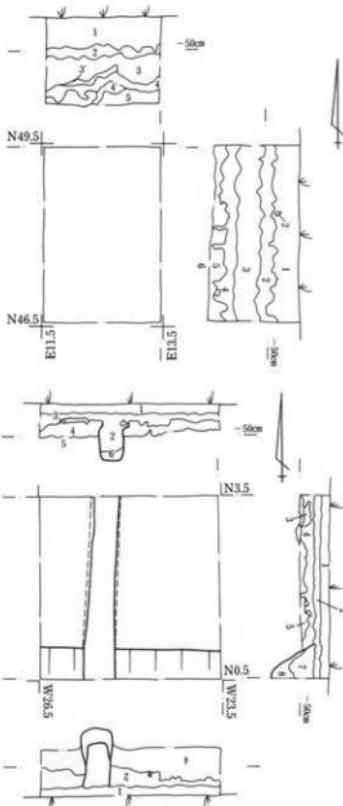
1. 棕色土。耕作土。粒子が荒い。細かい浮石を含む。固い。
2. 暗褐色砂質土。火山灰土を含みサラサラしている。Bスコリア。
3. 棕色砂質土。大きな浮石及び粘土粒子を含む。
4. 黒色土。大きい浮石を含む。粘着性があるが粒子が荒い。Cスコリア。
5. 暗褐色(灰色)。粘着性があり縮まっている。微量の粒子を含む。
6. 灰褐色土。ロームが水に浸食されたものと考える。上層との区別は色の差だけである。縮まっている。

B 6 区 (第91図、写真図版37)

既報の一覧に「B-6、E13.5-N36.5、特に記すことなし。但し地層の堆積が非常にきれいなためこの地層をもって標準地層とした。備考-標準地層」とある。

整理所見-標準地層の模式地点を定めたことは、今日でも習うべき点である。今日では順堆積の火山灰と

第2章 調査された遺構と遺物



1. 耕作土・浮石を含みサラサラする。バサバサ。
2. 黒色土。浮石を含みサラサラする。やわらかい。
3. こまかい浮石。
4. 黒色土。しまっている。
5. Cスコ。
6. ロームブロック。
7. サラサラ。
8. ロームの上位層。

第94図 C 1区遺構図

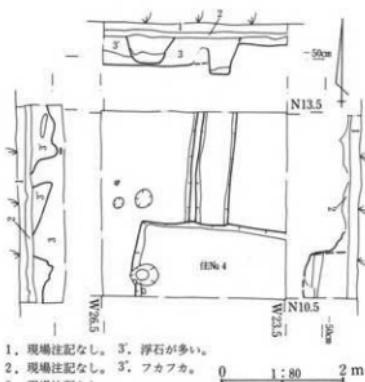
B 7区 (第92図、写真図版38)

既報の一覧に「B-7、E13.5・N43.5、特に記すことなし。」とある。

整理所見 - 3壁土層断面の注3の底面が北上りの台地勾配と異なり、下る様子はB 6区と同様の傾向にあり、不自然さを感じる。しかし遺物類に該当なく、時期などは不明である。

1. 暗褐色土。耕作土層。部分的に浮石を混存するバサバサした褐色土層。
2. 黒色土。Bスコリアを含む。上面は耕作の擾乱を受け、粗粒砂状粒子によって構成される。
3. 塗色土。ニッケルと思われる大粒の浮石を含む、部分的に燒土、ロームブロック、4層黒色土のブロックを混存させる遺物、包含層で古代の生活層となる。
4. 黒色土。木炭、燒土を多量に含む。基本的には3層に属する一つの生活層と思われる。
5. 黒褐色土。粘質。4層と比較し浮石量も大きさも減少する。西側で深く5層に切りこむ。
6. 乳褐色土。粘質。上面は4層による擾乱を受く、部分によってはピット状遺構の如き様相を呈する。遺物は含まれない。
7. 黏灰岩質の砂岩をもって構成される基盤層。様子は恰も水で洗われた様である。

第93図 B 8区遺構図 0 1:80 2m



1. 現場注記なし。3'. 浮石が多い。

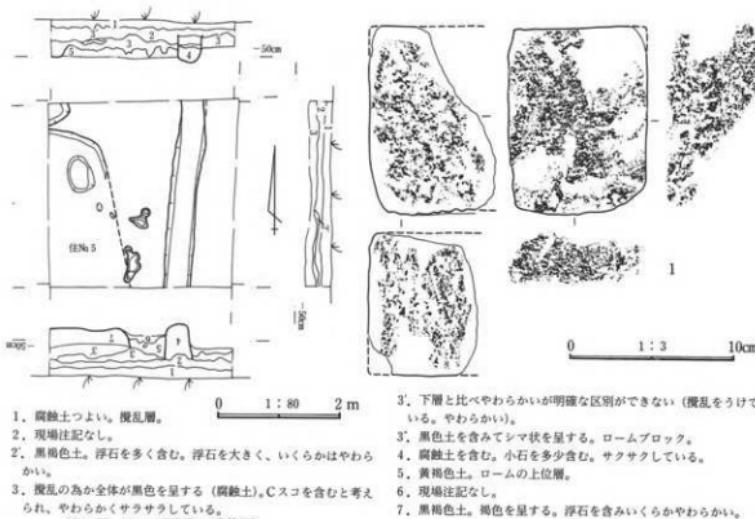
2. 現場注記なし。3'. フカフカ。

3. 現場注記なし。

第95図 C 2区遺構図

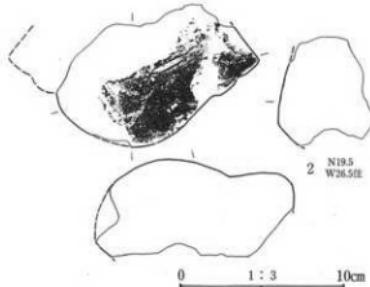
混入状態の火山灰とは分別して扱っているが、この周辺での順堆積は、凹地や溝遺構中の特別な場合に存在が認められるのであり、昭和46年頃に火山灰識別を行なおうとした意識は評価されるべきである。遺物は当センターに該当なく、未出土かもしれない。以北は遺構量が少なく、自然状態を他より保った場所であろう。

そのため出土遺物が無くとも不自然ではない。



- 3'. 下層と比べやわらかいが明確な区別ができる（擾乱をうけている。やわらかい）。
- 3". 黒色土を含みてシマ状を呈する。ロームブロック。
4. 腐鉄土を含む。小石を多少含む。サクサクしている。
5. 黄褐色土。ロームの上位層。
6. 現場注記なし。
7. 黒褐色土。褐色を呈する。浮石を含みいくらかやわらかい。

B 8区 (第93図、写真図版38)



第97図 C 3区遺物図(歴博ほか)

既報の一覧に「B-8、E13.5-M49.5、褐色土層の下部、Cスコリア層の上部に焼土、灰、ロームブロックがみられる。備考-焼土等」とある。
整理所見-北壁土層断面3'に木炭、焼土を含むとあり、東壁は乱れが少ないものの北壁断面3'は竈の底面勾配のように西側に向って下ってゆく。そのためその延長上には住居跡が想起されるが、出土遺物は、該当がなかったので、さらに強調はできない。

C 1区 (第94図、写真図版38)

既報の一覧に「C-1、W26.5・N3.5、東-西方向に大規模な溝出現（A-1、B-1と同じもの）、これを交るように南北方向に小規模の溝状遺構、耕作土中より掘り込まれているのを確認。備考-溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走向-S-11W（南-北）、長さ-26m以上、幅-50cm、深さ-70cm、切面にみる形-U字形、備考-第I層下部から掘込む」とある。

整理所見-大規模な溝についてはA 1・2区で確認され、その延長がここにもあるという意味で、土層断面注4を切る線が明瞭に描かれる。南北走の小規模溝はU字形をなし、以北C 3区まで続き、C 4区には見えない。注意される点はローム層上面がB列、C列とは20cm以上の差をもって浅くなることで、C列側が台地上位に位置し、B列・C列との間に変換部が存在するのであろう。それが急勾配か段差であるのかは明確ではない。遺物は当センターに該当はなかった。

C 2区 (第95図、写真図版38)

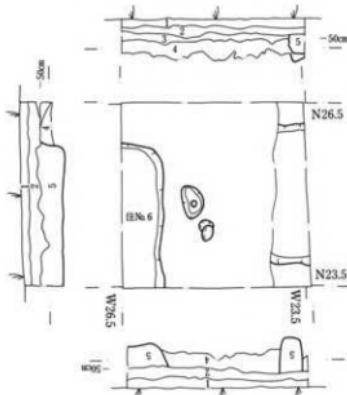
既報の一覧に「C-2、W26.5+N13.5、住居跡の東部分の一部出現切込み面は褐色土層中からと確認される。南-北方向に小規模の溝状遺構出現（C-1と同じもの）。備考-住居跡溝」とある。竪穴住居跡一覧に「No.4、C-2、W26.5+N13.5、形状-方？、規模-不明、方位-N10°E、床面の状況-良好、同穴-1個確認、壁溝-無、竪-未確認、遺物-土器」とある。

整理所見-住居跡前出に東部分とあるのでW25以西の一角を指すのであろう。No.4とは住居跡名称である。それとは別に住居跡隅部様の掘込みが南東側にあり、深い掘込み、鋭く直角気味になる隅部などは地域傾向7世紀以前を思わせるものがある。したがって相互の重複を考えた方が良さそうである。また、小溝は北壁断面中に2条見え、東側の一条がC1区から連続する溝であろう。さらに西側の小溝は平面表現がないので土壤となるのかもしれない。土層断面を見ると注記がないが、写真には注2より上方は黒っぽく写され、注2は黒色土と考えられる。ローム層上面は、南東側の住居跡様の凹みの立上りの中ほどに見える。遺物は該当なし。

C 3区 (第96図、写真図版39)

既報の一覧に「C-3、W26.5+N19.5、住居跡の北東隅出現、柱穴とみられるものも確認される。南北に小規模の溝状遺構出現（C-1、C-2と同じもの）。備考-住居跡溝」とある。竪穴住居跡一覧に「No.5、C-3、W26.5+N19.5、形状-方？(隅丸)、規模-P不明、H45cm?、方位-N10°E、床面の状況-不良、同穴-1個確認、壁溝-無、竪-未確認」とある。

整理所見-住居跡は南西側に位置する掘込を指している。No.5との名称がある。小溝はC2区からの連続である。注意されるのは北壁土層断面中に、浅間山C軽石を含む黒色土の注3があり、その上面に3"のローム層ブロックが認められる。それについて前出A2区などで検出された榛名山ニツ岳FAを埋土の主体とする畠のさく跡が推定される。遺物は当センターに石1があり、第96図1は国分寺二寺いずれかの基壇化粧石材と考られ、歴博の第97図2は中世鬼瓦の鼻部で、隣接の小見廬寺所用瓦であろう。14世紀の製作か。



C 4区 (第98図、写真図版39)

既報の一覧に「C-4、W26.5+N26.5、住居跡の北東隅出現、また南北に小規模の溝状遺構出現。備考-住居跡溝」とある。竪穴住居跡一覧に「No.6、C-4、W26.5+N26.5、形状-方？(隅丸)、規模-

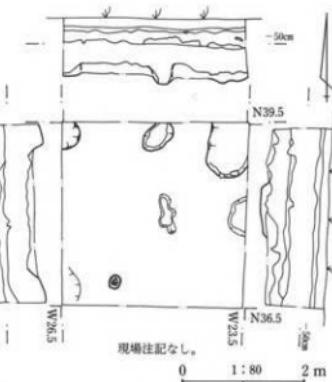
1. 現場注記なし。
2. 現場注記なし。
3. 現場注記なし。
4. 黒色土。やわらかい。しだいにローム上位に移る。
5. ロームブロック(固い)。大きい浮石を含む。全体的にやわらかい。フカフカしている。柔らしい。

第98図 C4区遺構図

第5篇 上野国分二寺中間地域



第99図 C 5 区遺構図



第100図 C 6 区遺構図

P不明・H45cm?、方位-N10°E、床面の状況やや不良、同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走行-S-11W(南-北)、長さ-26m以上、幅-50cm、深さ-70cm、切断面にみる形-U字形、備考-第I層下部から掘込む」とある。

整理所見-住居跡は南西側にあり溝は東壁下にトレントマークで記入したものが溝であるらしい。さらにその下方に、幅約2mの土壤状の凹みがある。遺物は当センター資料中に該当なし。

C 5 区 (第99図、写真図版39)

既報の一覧に「C-5、W26.5・N33.5、住居跡の西南隅出現、床面はかなりかたく良好。備考-住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No.7、C-5、W26.5・N33.5、形状-方? (隅丸)、規模-P不明・H50cm?、方位-N10°E、床面の状況-張床良好、同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認」とある。

整理所見-住居跡は北東側にあり、No.7と番号が付されている。このほかC4区まで以南から連続していた小溝は見えない。遺物は当センターに該当はなかった。

C 6 区 (第100図、写真図版39)

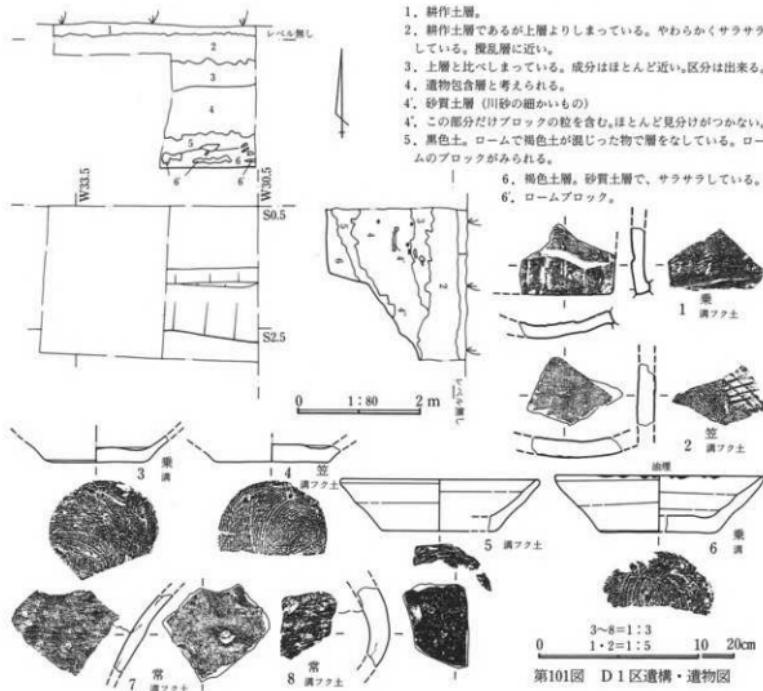
既報の一覧に「C-6、W26.5・N39.5、特に遺構らしきとは認められず、但し蜂巣石(繩文文化)発見」とある。

整理所見-住居跡様の遺構平面は認められないが、土層断面北・東・西壁の上から3層目が層厚であり、この3層目か4層目が厚い場合は全面遺構埋土の可能性あり。遺物は当センターに該当なし。

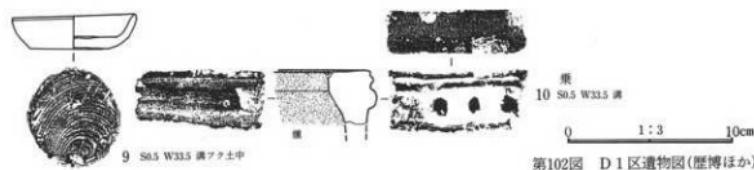
D 1 区 (第101図、写真図版39)

既報の一覧に「D、W31.5・S2.5、東-西方向に走る大規模な溝(A-1、B-1、C-1と同じもの)

第2章 調査された遺構と遺物



第101図 D 1 区遺構・遺物図



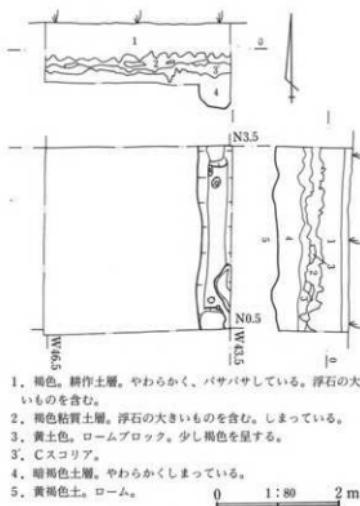
第102図 D 1 区遺物図(歴博ほか)

確認、幅は約5m、深さは地表面より2m30cmである。備考一溝」とある。

整理所見—やっと長大な溝の底面が顔を出した。土層注4'に川砂の細かいものとあり、時おり流水があつたのであろうか。注5・6に含まれる中のブロックの存在は流水が恒常的な状態ではないことを示している。遺物は当センターに32点あり、瓦17、須恵器6、土師器1、石1、中世陶器2、中世軟質器片1、土師質土器4があった。3~6は15世紀、10は14世紀頃と考えられ角形火鉢である。

E 1 区 (第103図、写真図版40)

既報の一覧に「E-1、W46.5・N3.5、Cスコリア層上面の東及び北の切断面にロームブロック確認。備



1. 黄色。耕作土層。やわらかく、バサバサしている。浮石の大きいものも含む。
2. 暗褐色土層。浮石の大きいものを含む。しまっている。
3. 黄土色。ロームブロック。少し褐色を呈する。
4. 暗褐色土層。やわらかくしまっている。
5. 黄褐色土。ローム。

第103図 E1区遺構図

考「ロームブロック」とある。

整理所見-A2区で認められたローム層ブロックはE1区でも検出され、株名ニツ岳FAを畠さくの主体埋土とする遺構は連続し、6世紀頃の土地利用の一端が知れる。また東壁下に一条の溝があるが埋土には注4が入り、古い時期らしい。遺物は当センターに43点があり、瓦21、土師器18、須恵器4であった。

E2区 (第104・105図、写真図版40)

既報の一覧に「E-2、W46.5・N9.5、住居跡の南東隅出現。南壁より竈あり、竈の中その周辺からは多数の土器出土。芋穴とみられるビット出現。備考-住居跡」とある。竈穴住居跡一覧に「No.8、E-2、W46.5・N9.5、形状一方? (隅丸)、規模-P不明・H50cm?、方位-N20°E、床面の状況-良好、同穴-未確認、壁溝-無、竈-瓦使用の粘土竈、遺物-土器多数、備考-竈の保存が良くその中から土器多数出土」とある。

整理所見-竈が取り付く住居跡が検出され、10世紀中頃の土器類が多く出土している。No.8と住居跡名称が付されている。また東壁下に小土壤があり、芋穴との解釈がある。遺物は当センターに58点があり、瓦13、須恵器35、土師器6、灰釉陶器1、縄文1、石2である。

E3区 (第106・107図、写真図版40)

既報の一覧に「E-3、W46.5・N16.5、住居跡2戸出現、うち1戸はその北端部、他は北西隅の部分であり、一部分重複している。備考-住居跡」とある。竈穴住居跡一覧に「No.9、E-3、W46.5・N16.5、形状一方? (隅丸)、規模-P不明・H60cm?、方位-N20°E、床面の状況-良好、同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-瓦」とあり、さらに「No.10、W46.5・N16.5、形状一方?、規模-P不明・H60cm?、方位-N18°E、床面の状況-良好・同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認」とある。

整理所見-住居跡が2個所に確認されたが、新古は不明。東側は9世紀初頭頃の遺物4・5などが出土地でいる。6は11世紀前半頃の皿で、これが南壁下の住居に伴なうかは遺構平面に取上げ番号がない。遺物は当センターに123点があり、瓦29、土師器28、須恵器56、石7、砥石1、縄文1、鉄製品1がある。

E4区 (第108図、写真図版40)

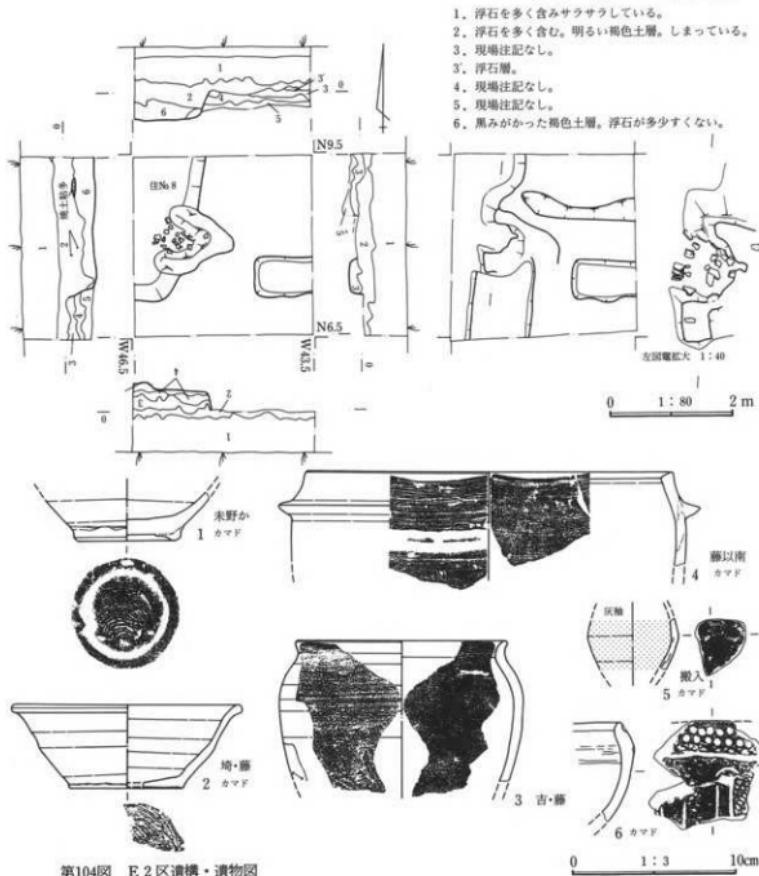
既報の一覧に「E-4、W46.5・N23.5、特に目立つ遺構なし。」とある。

整理所見-南半に不整形な凹み。遺物は当センターに18点、瓦8、須恵器7、陶器1、灰釉2がある。

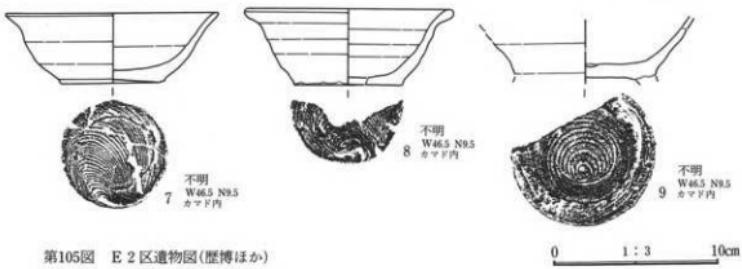
E5区 (第109図、写真図版41)

既報の一覧に「E-5、W46.5・N29.5、住居跡確認、その床面を切って新しい時期の方形ビットが掘ら

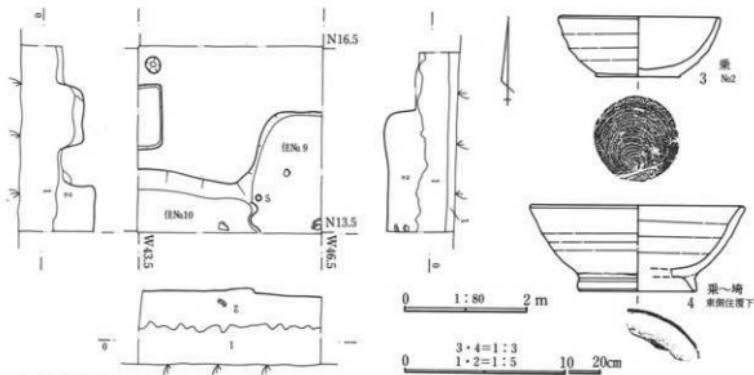
第2章 調査された遺構と遺物



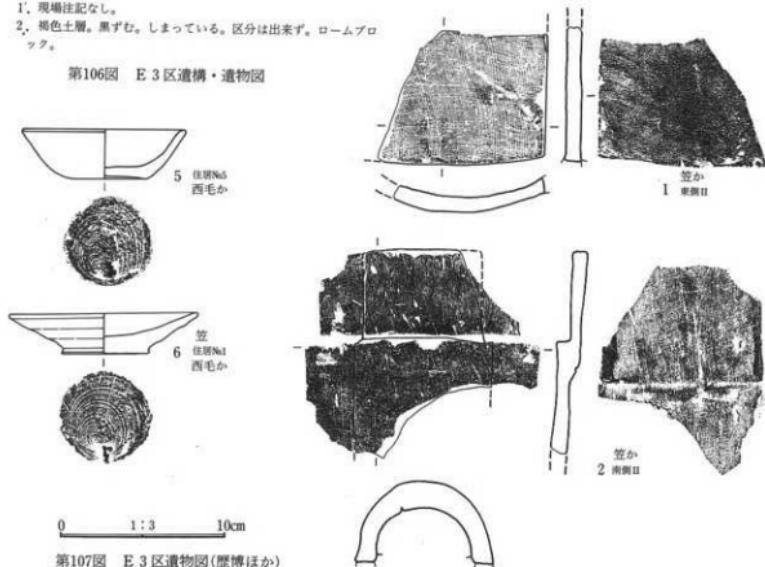
第104図 E-2区遺構・遺物図



第105図 E-2区遺物図(歴史ほか)



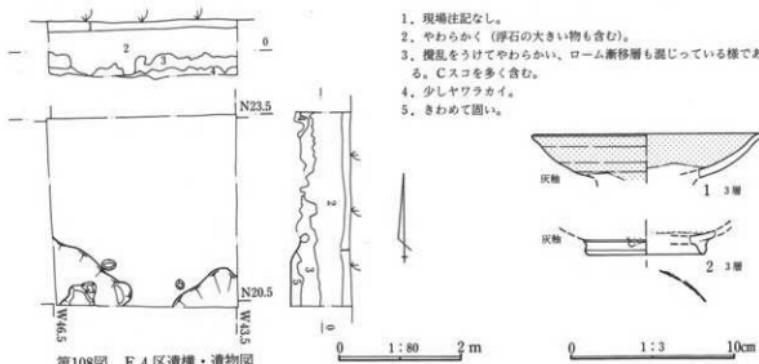
第106図 E 3区遺構・遺物図



第107図 E 3区遺物図(歴博ほか)

れている。備考-住居跡ピット」とある。竪穴住居跡一覧に「No11、E-5、W46.5・N29.5、形状一方?、規模-P不明・H30cm?、方位-N-10°E、床面の状況-良好、同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-瓦片散乱、備考-No12(E-8)の住居と同一のものか」とある。

整理所見-住居跡の年代は、1は10世紀代が考えられ、2の灰釉陶器の高台はそれより古相である。瓦類は4~6が9世紀代と考えられる。南西壁下の土壤は墓壙のような平面形である。遺物は当センターに56点あり、瓦13、須恵器28、土師器14、灰釉陶器1である。



E 6 区 (第110図、写真図版41)

既報の一覧に「E-6、W46.5・N36.5、南-北方向に細い溝状遺構、耕作土より掘り込まれており新しい」とみられる。備考一溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走向-S-13W(南-北)、長さ-14m以上、幅35cm、深さ-50cm、切断面にみる形-U字形、備考-第1層下部から掘込む」とある。

整理所見-溝はE 7区に至る小溝と考えられる。遺物は当センターに13点あり、瓦3、土師器10点で、遺構が少ない割りに生活感がただよう。1は大形壺・鉢片で、7・8世紀の製作か。

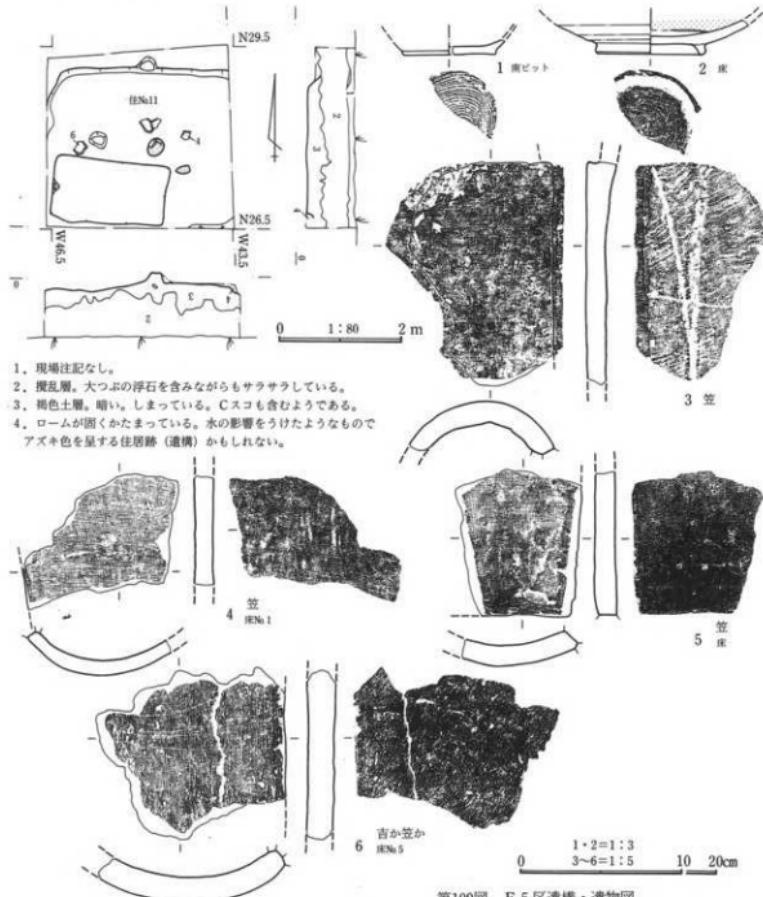
E 7 区 (第111・112図、写真図版41)

既報の一覧に「E-7、W46.5・N43.5、住居跡の北西隅の一部出現、床面は張床となっている。南-北方向に細い溝状遺構(E-6と同じもの)。備考-住居跡溝」とある。竪穴住居跡一覧に「No12、E-7、W46.5・N43.5、形状一方?、規模-P580cm・H30cm?、方位-N15°E、床面の状況-張床良好・同穴-1個確認、壁溝-無、電-未確認、遺物-土器」とある。

整理所見-住居跡にはNo12と付されている。北壁土層断面注3が貼床層であろう。既報の説明中に床面の状況は良好と時おり記入され、調査当時の良好とは、竹籠などを用いて床面を露呈させる際、締って分離し易い状態の時に用いるので、住居跡使用に、ある時間的長さを感じられる。時期は図示した1~3のうち3が後出相であるが、1・2は9世紀終末頃の製作である。地形上の注意としてローム層が地表より約50cm下方にあり、だいぶ浅い位置に存在する。遺物は当センターに16点あり、須恵器10、土師器6点である。

E 8 区 (第113・114図、写真図版41)

既報の一覧に「E-8、W46.5・N49.5、住居跡南西隅の一部出現、床面は張床となっている。E-7の住居跡と同一のものか、別に軒丸瓦を利用した電が発見された。備考-住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No13、E-8、W46.5・N49.5、形状-不明、規模-不明、方位-N 0°、床面の状況-不明・同穴-未確認、壁溝-未確認、電-瓦使用の粘土電、遺物-軒丸瓦(蓮華文)」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走向-S-13W(南-北)、長さ-14m以上、幅-35cm、深さ-50cm、切断面にみる形-U字形、備考-第1層下部から掘込む」とある。

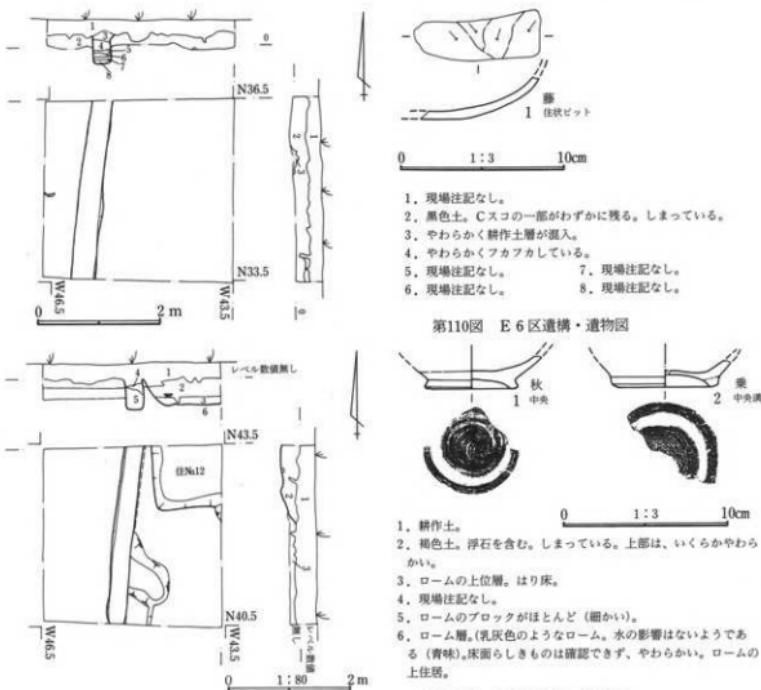


第109図 E 5 区遺構・遺物図

整理所見—記録平面図中に破線が入り、それ以南に住居跡が、さらにその住居と重なって南東隅に別住居らしき掘込み、3棟目として南西隅側に竈が存在し、計3棟の住居跡が推定される。南壁下には小溝が南北走行で2条存在し、掘込位置は表土下である。遺物はカマド中と記入された瓦類が9世紀、1・3が8世紀、2・4・5が9世紀後半頃の遺物である。遺物は当センターに58点があり、瓦12、須恵器37、土師器7、中世陶器2であった。

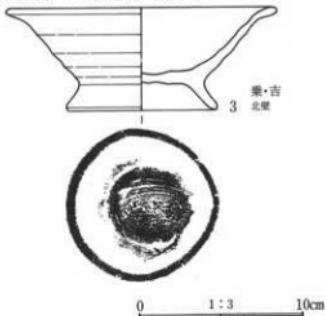
E 9 区 (第115・116図、写真図版41)

既報の一覧に「E-9、W46.5・N56.5、住居跡2戸が重複して出現、古い方はその西側を出現させ、新112



1. 耕作土。
2. 棕色土。浮石を含む。しまっている。上部は、いくらかやわらかい。
3. ロームの上位層。はり床。
4. 現場注記なし。
5. ロームのブロックがほとんど（細かい）。
6. ローム層。（乳灰色のようなローム。水の影響はないようである（青味）。床面らしきものは確認できず、やわらかい。ロームの上住居。）

第111図 E 7 区遺構・遺物図



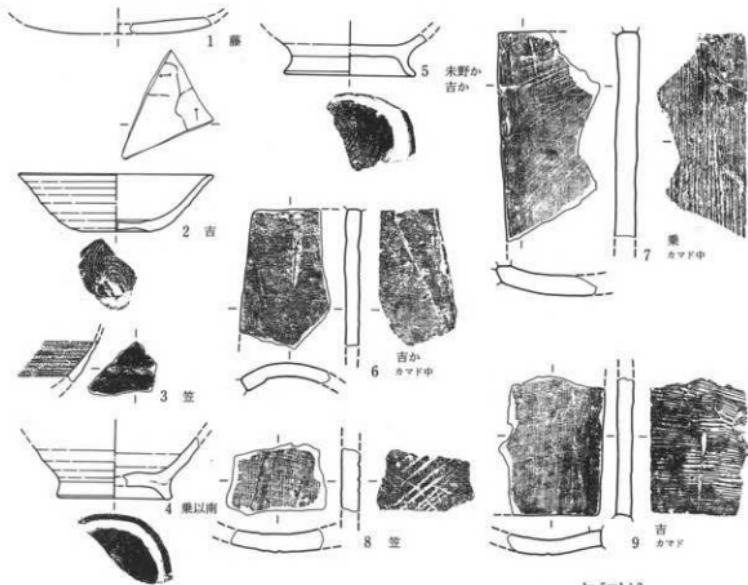
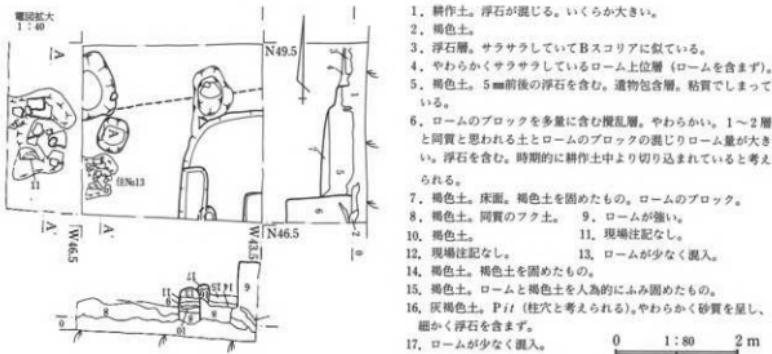
第112図 E 7 区遺物図(歴博ほか)

しい方は東南隅の一部を出現させた。この南東隅には瓦使用の竈が発見された。備考—住居跡」とある。堅穴住居跡一覧に「No14. E - 9. W46.5 • N56.5. 形状一方?、規模-P不明・H40cm?、方位-N-10°E、床面の状況-良好・同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-土器・瓦片・鉄器」とありさらに、「No15. E - 9. W46.5 • N56.5. 形状一方?、規模-不明、方位-N-20°E、床面の状況-良好・同穴-らしきもの1個確認、壁溝-無、竈-瓦使用の粘土竈」とある。

整理所見-平面図中の破線は既報図中に加えられていた破線であり、竈に至る。No14と名称あり。さらに南東側を占める住居跡にNo15と付されている。遺物は9

世紀初頭頃が多く、No14から10瓶、11罐などが出土している。遺物は当センターに117点があり、瓦17、須恵器35、土師器55、灰釉陶器8、石2がある。記録図中の遺物番号と一致の個体は第115図5のみであった。

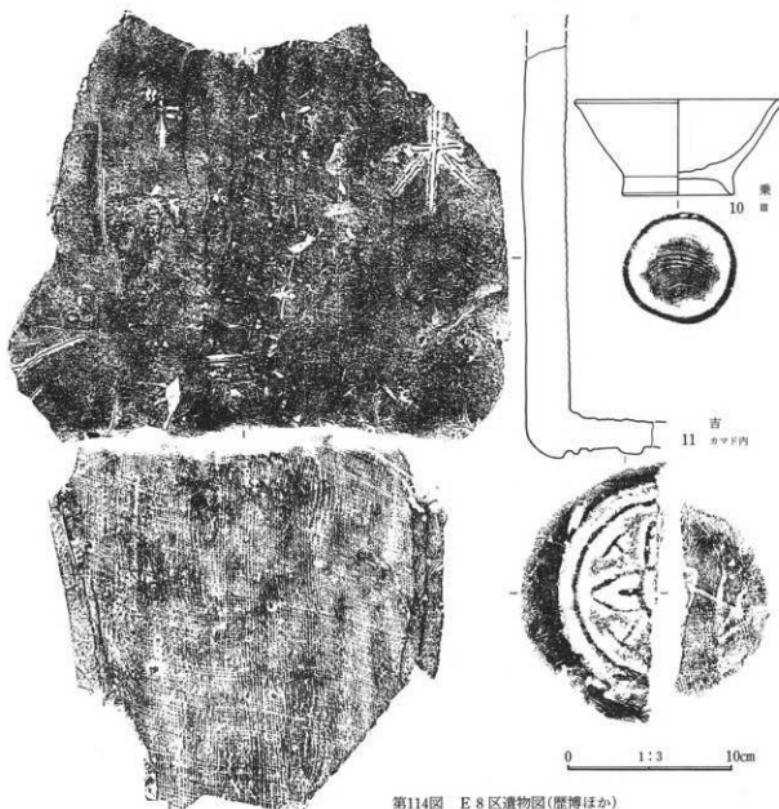
第5篇 上野団分二寺中間地域



第113図 E 8 区構造・遺物図

E 10区 (第117図、写真図版42)

既報の一覧に「E-10、W46.5+N63.5、住居跡らしき部分が認められたが、実態は明らかでない。備考
一住居跡か」とある。竪穴住居跡一覧に「No16、E-10、W46.5+N63.5、形状一不明、規模一不明、H50
cm?、方位一不明、床面の状況一やや不良・同穴一未確認、壁溝一無、竪一未確認、備考一住居跡か」とあ



第114図 E 8 区遺物図(歴博ほか)

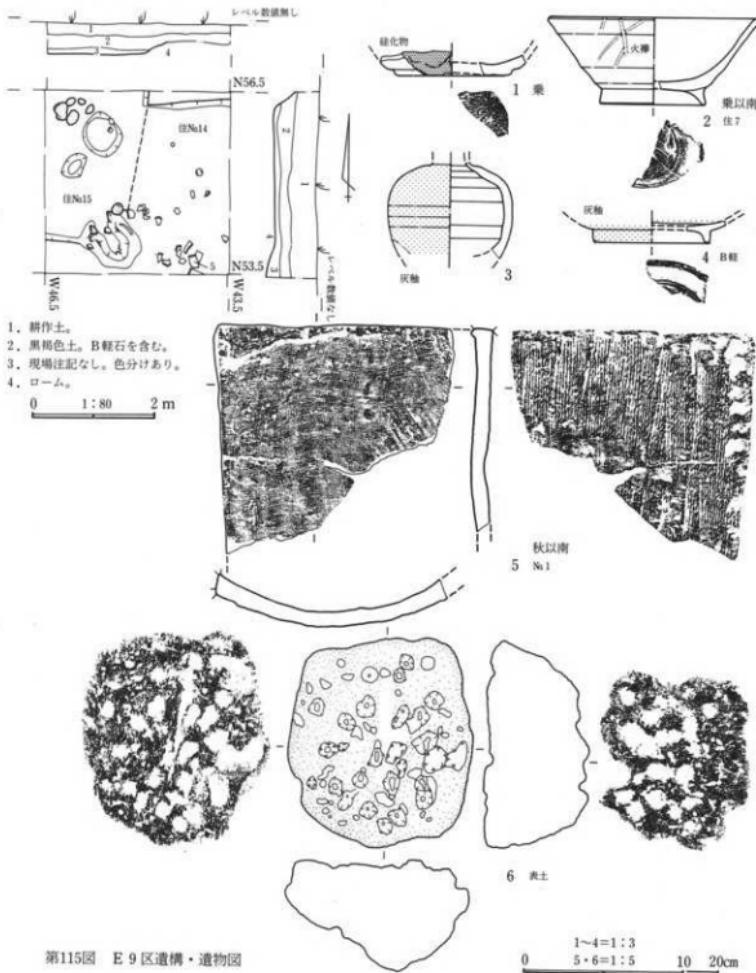
る。

整理所見—どの部分が住居跡か明確にしていないが東壁の凹みがそれか。床面はやや不良とあり、甘い床面で検出困難のようである。遺物は63点とやや多く、瓦19、須恵器25、土師器13、中世軟質陶器1、中世陶器1、石2、鉄製品1、近世軟質陶器1であった。

E 11区 (第118図、写真図版42)

既報の一覧に「E11、W46.5・N69.5、東部分からピットが認められたが性格不明、新しいとみられる。備考—ピット」とある。

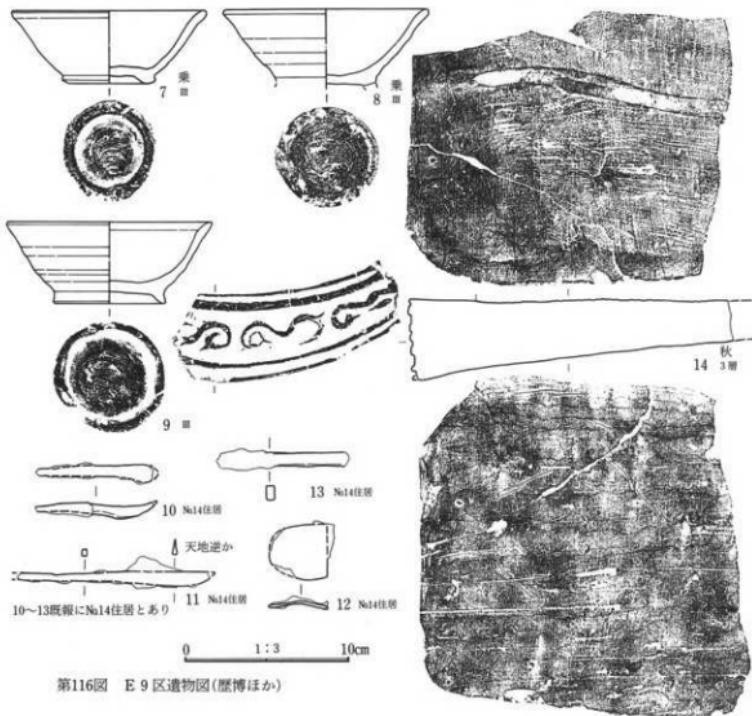
整理所見—平面中の破線は、平面状態が未記入であったのを編者が写真により補描したものである。溝状の遺構が2条、土壤1、住居跡様の凹みが南東隅側に1個所存在している。遺物は33点があり、瓦6、須恵器6、土師器17、鉄製品1、中世軟質陶器1、石2であった。2は中世軟質陶器で15・16世紀である。



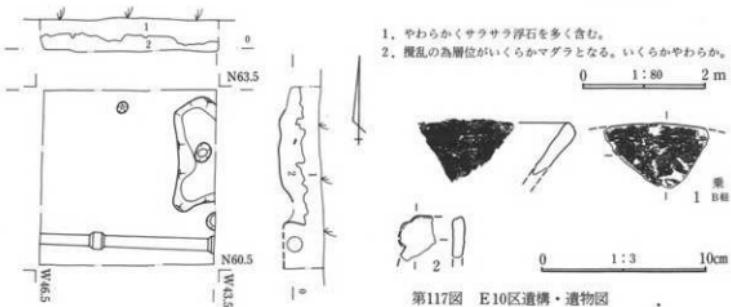
第115図 E 9 区遺構・遺物図

E 12区 (第119図、写真図版42)

既報の一覧に「E-12、W46.5・N76.5、住居跡の北東隅の一部出現、床面はあまり明瞭ではないが竪の痕跡あり。備考-住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No17、E-12、W46.5・N76.5、形状一方、規模-P不明・H30cm?、方位-N-17W、床面の状況-不良・同穴-未確認、壁溝-無、竪-痕跡、遺物-瓦片・鉄片」とある。



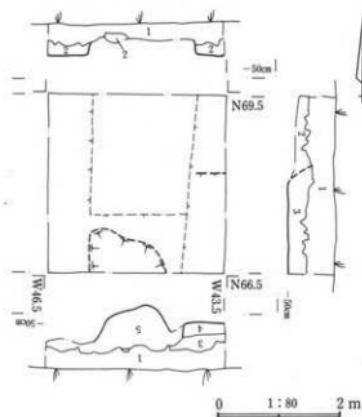
第116図 E9区遺物図(歴博ほか)



第117図 E10区遺構・遺物図

整理所見－東西走行の小溝が1条と、No17とされた西壁下の住居跡のほか北西隅、南壁下に各1、計3棟の住居跡が重複しているように見える。遺物は当センターに64点があり、瓦16、須恵器19、土師器12、灰釉陶器5、中世陶器3、近世軟質陶器5、鐵滓3、石1であった。1は10世紀頃、2は県外からもたらされた胎土に見える鉄鉢形の須恵器で8～9世紀前半頃の製品と考えられる。

第5章 上野国分寺中間地域



F 1 区 (第120・121図、写真図版42)

既報の一覧に「F 1、W66.5・N3.5、Cスコリア層上面にロームのブロック点在、耕作土中から掘り込んだ長方形のピット出現。備考—ロームブロック、ピット」とある。

整理所見—ロームブロックは榛名山二ツ岳FA塊のことであり、先のA 2区で検出された烟造構の延長面が存在し、図中の下層面とした平面図にその状態が示されている。その上方には耕作土中から掘り込んだという土壤が2箇所に、掘込みは不明ながら中央に1箇所存在している。遺物は渡来銭が含まれているので土壤のいれかは墓壙の可能性がある。遺物は当センターに43点あり、瓦8、須恵器12、土師器9、灰釉陶器2、中世軟質陶器1、古銭2、鉄滓1、石8であった。1は15世紀頃の軟質陶器内耳塗片である。

F 2 区 (第122図、写真図版42)

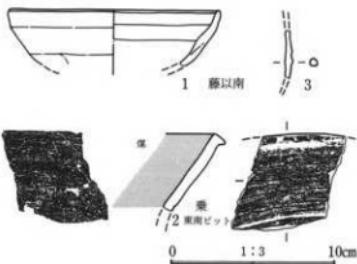
既報の一覧に「F - 2、W66.5・N9.5、住居跡の北東隅出現、細い壁柱穴が認められた。住居跡周囲の原地表面とみられるところからはロームのブロックが認められる。備考—住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No18、F - 2、W66.5・N9.5、形状一方？(隅丸)、規模-P不明・H35cm?、方位-N-12°E、床面の状況良好・同穴-未確認、壁溝-壁柱穴あり、竪-未確認」とある。

整理所見—住居跡はNo18と付されている。旧表土上にロームブロックが認められるとあり、東壁土層断面注5'がそれに相当し、前出A 2区の烟跡はついている。遺物は当センターに124点と多くあり、瓦29、須恵器56、土師器28、砥石1、繩文2、鉄製品1、石7であった。1・2は9世紀前半の須恵器である。砥石は面が丸みを帯びて中世以前か。

F 3 区 (第123・124図、写真図版42)

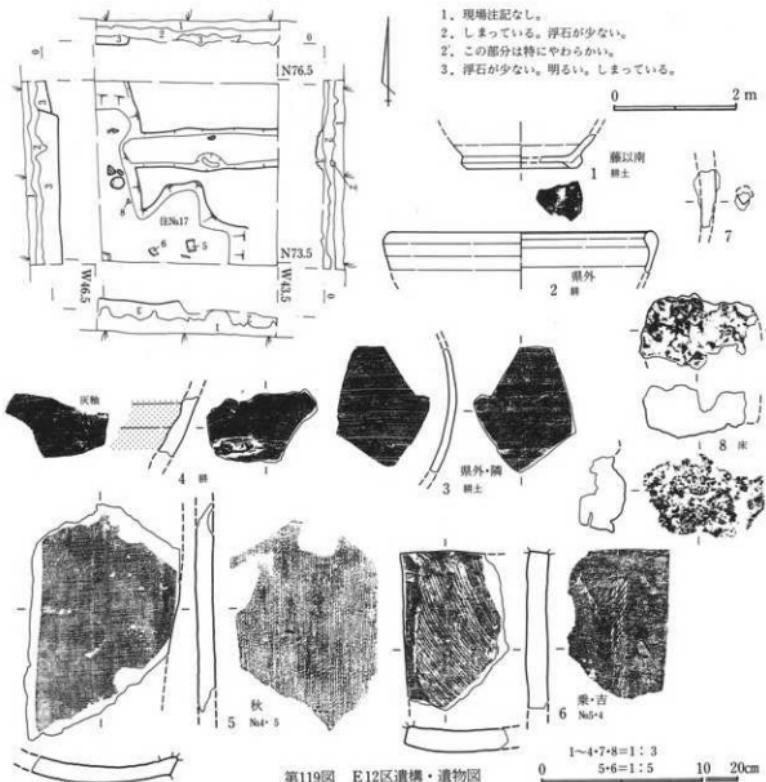
既報の一覧に「F - 3、W66.5・N16.5、Cスコリア層の下層にピット状の遺構が確認されたが、性格不明。備考—ピット」とある。

整理所見—黒色土全体が厚く、調査区全体が遺構中に存在する感がある。ピットとは北壁下にある不整形



1. 耕作土。
2. 褐色土Cスコ。褐色土などが混じりいくらかやわらかい。
3. 褐色土。褐色土層であるが黒ずむ。下の方は強い。立ち上がりがはっきりしない。住居跡でないのかもしれない。
4. 下の方は黒ずむ。
5. 現場注記なし。

第118図 E 11区遺構・遺物図



の土壤を指しているらしい。遺物は当センターに47点があり、瓦14、須恵器16、土師器11、灰釉陶器2、中世土師質器1、石3であった。1は15世紀頃の土師質器皿である。歴博に中世の小形鏡瓦があり、14・15世紀前半頃である。

F 4区 (第125図、写真図版42)

既報の一覧に「F-4、W66.5・N23.5、特になし」とある。

整理所見一調査基底面に浅い土壤が6個所に存在する。土層断面に一部がかかるが注記がなく不明である。

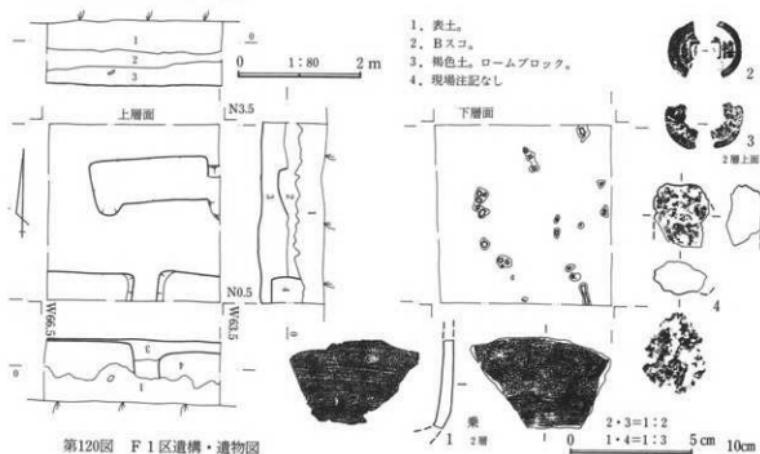
遺物は当センターに63点があり、瓦10、須恵器33、土師器12、中世陶器2、中世軟質陶器1、石5である。

1は舶載黒褐釉壺で外面に被熱あり。

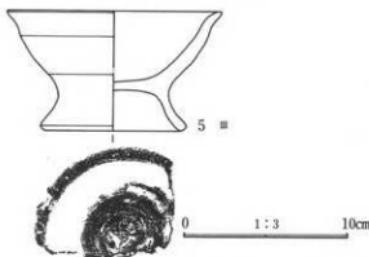
F 5区 (第126図、写真図版43)

既報の一覧に「F-5、W66.5・N29.5、褐色土層の下、Cスコリア層の上面から焼土が認められた。備

第5篇 上野国分寺中間地域



第120図 F1区遺構・遺物図



第121図 F1区遺物図(歴博ほか)

F6区 (第127図、写真図版43)

既報の一覧に「F-6、W66.5・N36.5、特になし」とある。

整理所見—平面図記録がなく、第127図は写真からの補描である。その結果、南西隅の住居跡様の掘込、東壁下の土壤などを加えた。遺物は当センターに63点あり、瓦27、須恵器12、土師器24である。1・2とも8世紀頃と考えられる。遺物量がややあり、土師器が多いので9世紀前半以前の住居跡が周辺にありか。

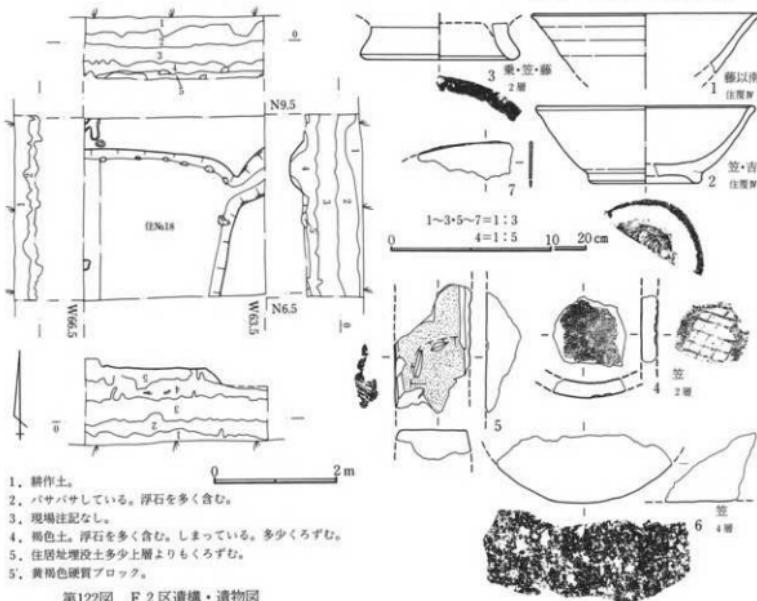
F7区 (第128・129図、写真図版43)

既報の一覧に「F-7、W66.5・N43.5、住居跡の北端部出現、柱穴とみられるピットが3個確認された。備考—住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No19、F-7、W66.5・N43.5、形状一方?、規模-P不明、H45cm?、方位-N-0°N、床面の状況-良好、同穴-3個確認、壁溝-無、竪-未確認、遺物-銅製鉗具」とある。

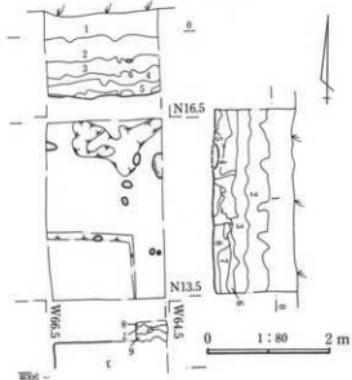
整理所見—No19とされた住居跡が南壁下にあり、さらに中央以南を南に下る掘込がある。注4'のロームブロックは烟跡であるか写真では明瞭でない。遺物は当センターに168点あり、瓦134、須恵器17、土師器9、

「考-焼土」とある。

整理所見—平面図記録がなく、第126図は写真からの補描である。注8に焼土とあり、住居跡が存在するようで、それは南西隅側の破線の掘込中である。遺物は当センターに121点あり、瓦30、須恵器37、土師器47、灰釉陶器2、中世土師質土器4、近世陶磁器1であった。個体量は多く、住居跡は存在しそうである。1は9世紀末から10世紀初頭の須恵器塊、2は15世紀頃の中世土師質土器片である。



第122図 F2区遺構・遺物図



第123図 F3区遺構・遺物図

灰釉陶器1、石7があり、多い。1は8・9世紀、2は9世紀前半、3は8世紀の製品である。.

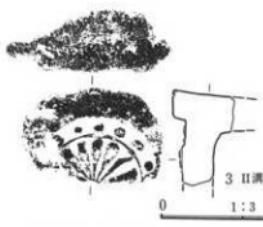
F8区 (第130図、写真図版43)

既報の一覧に「F-8、W66.5+N49.5、南-北方向に走る細い溝状遺構確認、掘込み面は耕作土中とみられ新しいものとみられる。又、これに接して長方形のピット出現、やや古いものか。備考-溝、ピット」

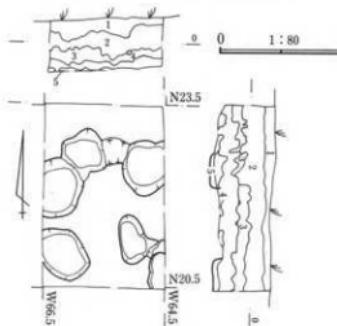
第5篇 上野国分寺中間地域

とある。さらに、溝状構造の一覧に「A種、走行-S-9W(南-北)、長さ-23m以上、幅50cm、深さ-30cm以上、切削面にみる形-U字形、備考-第I層下部から掘り込む」とある。

整理所見-土層断面中注3の文意が不足である。ローム層ブロックを含むということであろう。遺物は当センターに20点があり、瓦7、須恵器8、土師器3、鉄製品1、石7であり、住居跡が以南に存在することを思えばやや少ない感じがする。生活域から少し遠いのいたのかもしれない。



第124図 F3区遺物図(歴ぼか)



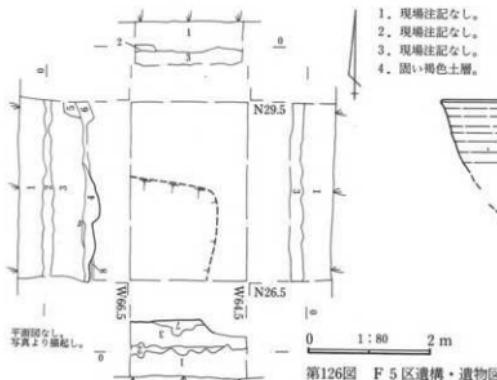
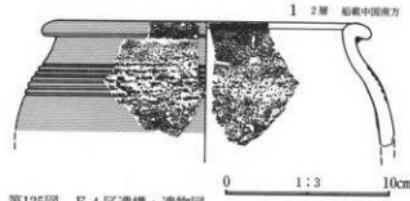
第125図 F4区遺構・遺物図

F9区 (第131図、写真図版43)

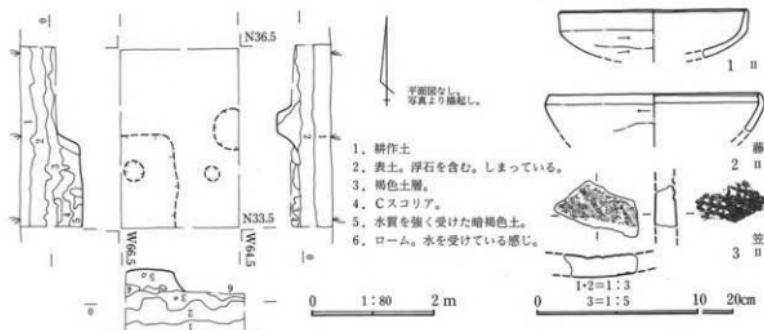
既報の一覧に「F-9、W66.5+N56.5、南-北方に2本の溝状構造確認、内1本はF-8と同じものとみられる。他は細長、芋穴のように見える。備考-住居跡溝」とある。

整理所見-芋穴とは南側の土壤であろう。遺物は当センターに8点あり、瓦1、須恵器1、土師器1、中世陶器1、近代瓦1、近世磁器1、石1である。

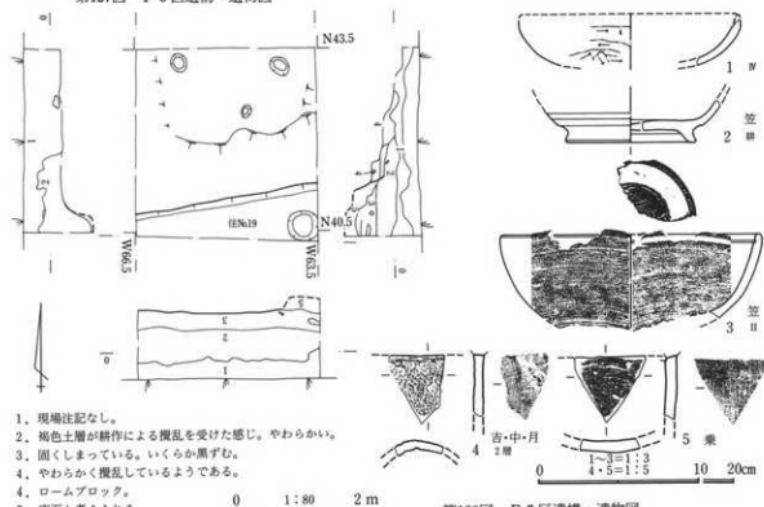
1. 現耕作土。
2. 浮石を非常に多く含む表土層。バサバサしている。
3. Bスコリア。
4. 褐色土層しまっている。浮石しまっている。
5. 現場注記なし。



第126図 F5区遺構・遺物図



第127図 F 6 区遺構・遺物図



第128図 F 7 区遺構・遺物図

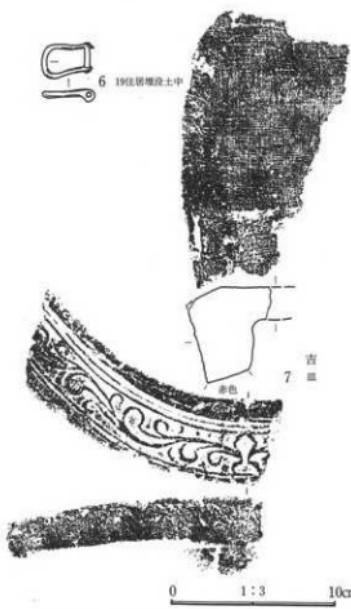
F 10区 (第132図、写真図版43)

既報の一覧に「F-10、W66.5・N63.5、畑地灌漑のヒューム管設置、遺構は不明。」とある。

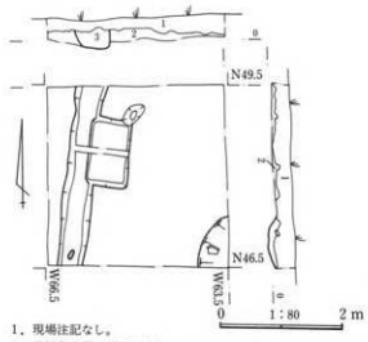
整理所見一ローム層が浅い位置から検出されている。遺物は当センターに遺物の該当ではなく、住居跡の生活圏からは遠ざかっているようである。

F 11区 (第133図、写真図版44)

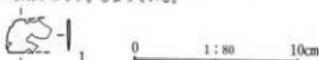
既報の一覧に「F-11、W66.5・N69.5、並行する2本の細い溝状遺構確認何れも新しいものとみられる。緑泥片岩の板碑の破片発見。備考一溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走行-S-9W(南-



第129図 F 7 区遺構・遺物図(歴博ほか)



1. 現場記注なし。
2. 暗褐色土層。浮石が少ない。ロームの上住居がショクの影響をうけている。擾乱をうけていないのかもしれない。
3. ロームのブロック。しまっている。

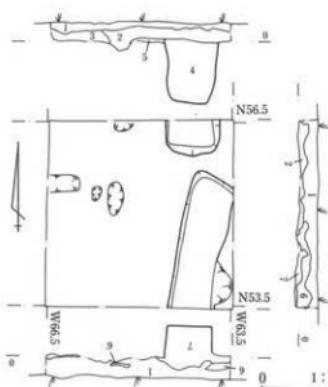


第130図 F 8 区遺構・遺物図

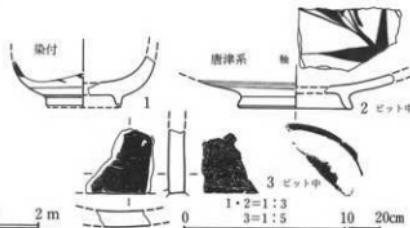
北)、長さ-23m以上、幅-50cm、深さ-30cm、切断面にみる形-U字形、備考-第I層下部から掘込む」とある。

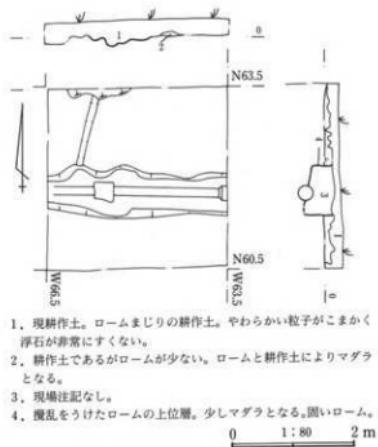
整理所見-2条の溝が走るほか、ローム層が浅い位置で検出される。遺物は当センターに該当がなく、もともと稀薄のよう、F 9区以北は住居跡の生活圏から外れるようである。

1. 規耕土。
2. ロームのブロックがワズカに入る。耕作土が混入であるがワズカニしまっている。
3. ロームの上住居に耕作土がワズカに入る。
4. 耕作土が混入であるがワズカニしまっている。
5. ワズカ土がいくらか固い層をなす。Cスコではない。
6. 耕作土混入。バサバサ。
7. ロームのやわらかい耕作土の混ざったブロック。
7. 黄土色。ローム前位層。耕作土混入。バサバサ。

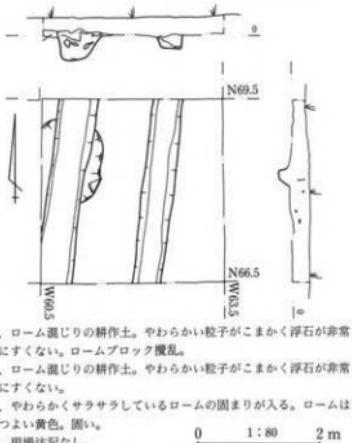


第131図 F 9 区遺構・遺物図

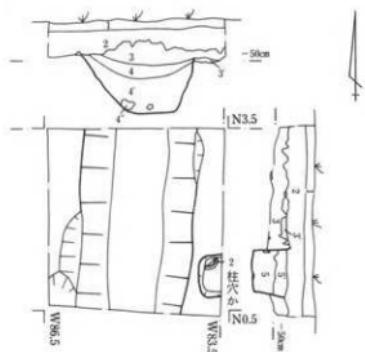




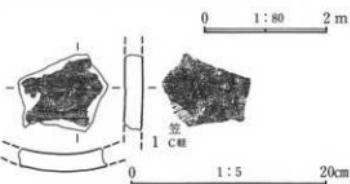
第132図 F 10区遺構図



第133図 F 11区遺構図

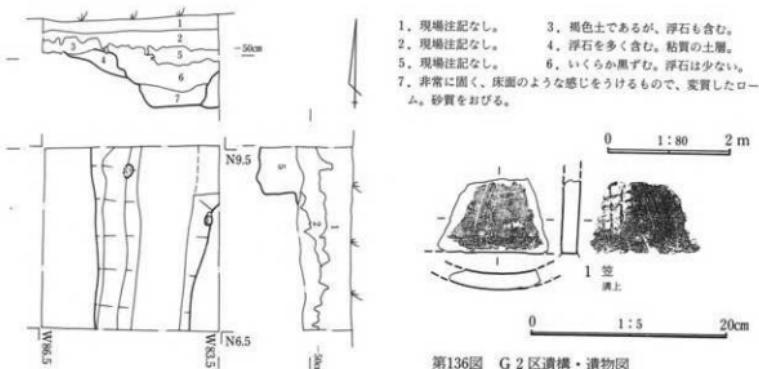


第134図 G 1 区遺構・遺物図



第135図 G 1 区遺物図(歴博ほか)

第5篇 上野国分寺中間地域



第136図 G 2 区遺構・遺物図

G 1 区 (第134・135図、写真図版43)

既報の一覧に「G-1、W86.5・N3.5、比較的大規模な溝が南北方向に走るのを確認、切込み面はCスコリア層において確認したが実際にはそれより上層とみられる。東側切込み面は溝状の遺構出現、中から須恵器発見。備考一溝」とある。

整理所見—中世溝と思われる南北溝を東からの遺構がそれと重複している。深さがあり墓壙か、柱穴であろう。柱穴とすれば、全調査区中唯一である。遺物は当センターに31点があり、瓦26、須恵器1、土師器2、石2があり、古代の生活遺物は少ない。

G 2 区 (第136図、写真図版44)

既報の一覧に「G-2、W86.5・N9.5、G-1の溝と同一のものを確認。備考一溝」とある。

整理所見—南北走のG 1区から続く溝が検出され、東壁北隅に重複の土壤がある。深いので墓壙の可能性もある。遺物は当センターに14点があり、瓦6、須恵器1、土師器5、石2があり、古代生活遺物は少。

G 3 区 (第137・138図、写真図版44)

既報の一覧に「G-3、W86.5・N16.5、G-1、2の溝と同一のものを確認、その掘込みは砥色土層の上面で耕作土中になっているらしい。溝の側面には張壁状の部分あり。備考一溝」とある。

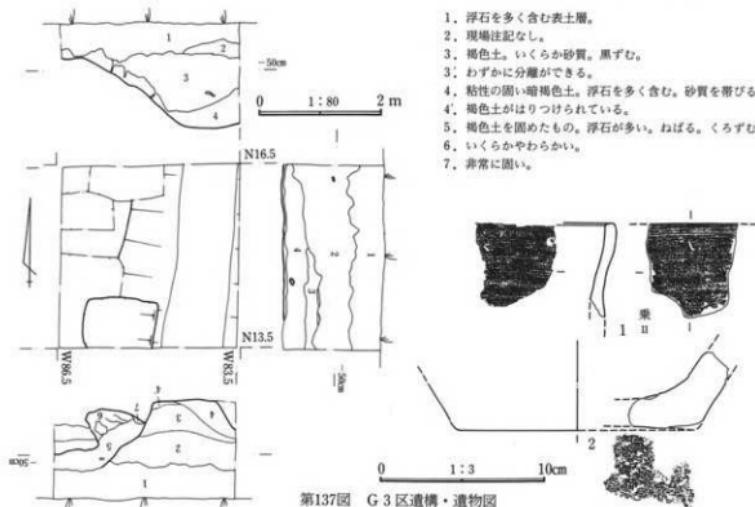
整理所見—G 1区から続く南北溝はG 3区にも達する。西半に截割断面が入るが記録がない。溝の南西端に土壤がかかる。遺物は当センターに瓦5、中世軟質陶器3がある。1は15世紀頃の内耳鳴、2は14・15世紀の鉢片である。3・4は小見廃寺所用瓦と考えられる14・15世紀頃の中世瓦である。

G 4 区 (第139図、写真図版44)

既報の一覧に「G-4、W86.5・N23.5、G-1・2・3と同じ溝確認。備考一溝」とある。

整理所見—溝は東に偏じ東半の立上は見えない。遺物はセンターに該当なく、古代の生活については稀薄とすることができます。

第2章 調査された遺構と遺物

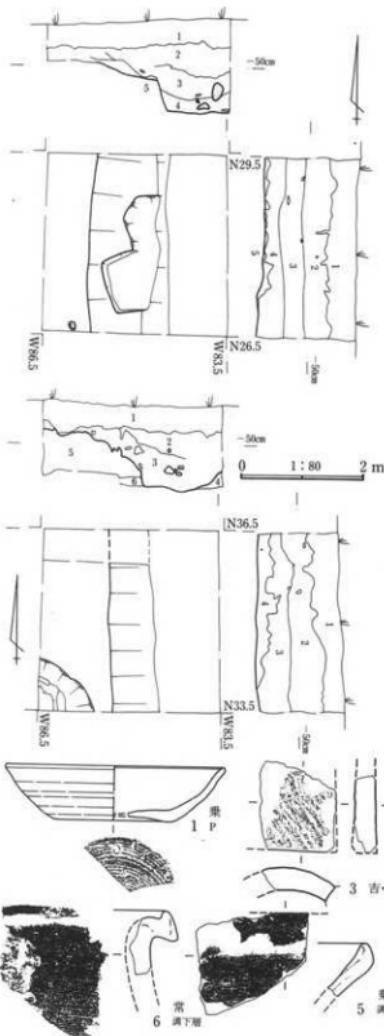


G 5 区 (第140図、写真図版44)
 既報の一覧に「G-5、W86.5・N29.5、G-1・2・3・4の溝と同じ溝確認、溝に寄せて方形の墓壙あり人骨が発見された。備考-溝墓壙」とある。

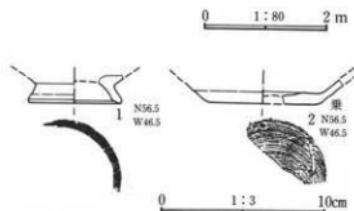
整理所見-写真には人骨が表現されているが記録画面はない。東向に横屈臥の状態にあり、墓壙と骨との間には隙間が見えるが、本来のかどうかは疑問である。遺物は当センターに15点があり、瓦3、須恵器9、土師器3がある。遺物量少ない。

G 6 区 (第141図、写真図版44)
 既報の一覧に「G-6、W86.5・N36.5、G-1・2・3・4・5と同一の溝確認。備考-溝」とある。

第5篇 上野国分寺中間地域

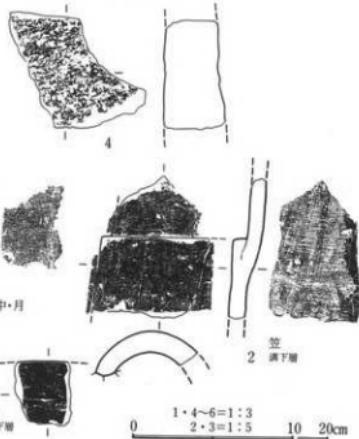


1. 現場注記なし。
2. 現場注記なし。
3. 黒ずむ。
4. 砂質を多く含む。浮石は少ない。
5. 暗褐色土。浮石が多い。しまっている。人為的。



第140図 G 5 区遺構・遺物図

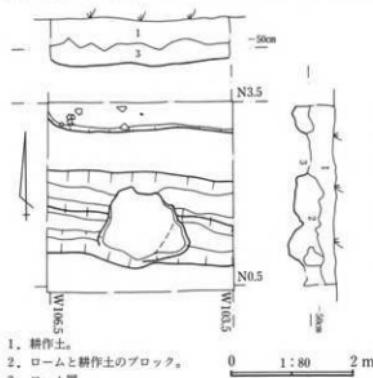
1. 浮石は少ない。やわらかくバサバサしている。
- 1'. 浮石が多い。
2. 楽色土。多少砂質が混じる。
3. その部分は、上層よりも黒ずむ。下の方では多少砂質。上層区分できない。
- 3'. いくらか砂質をおびる。
- 3''. 楽色土。粘質の固いもの。
4. 暗褐色土(アズキ色)。浮石の多い粘質。
5. Cスコリア。ロームがマダラ状を呈する。
6. 砂質の固いブロック。



第141図 G 6 区遺構・遺物図

整理所見—G 1 区から続く溝のほかに、調査区南西隅部に掘込みがあり、その下端に周溝らしき溝が入るため住居跡かもしれない。また溝中の埋土には小礫が入り、周辺に中世の施設か生活を感じさせ、前出の G 5

区の埋土中にも同様の傾向があった。埋土の走行は西が高く、東が低い傾向にあるが土塁が取付いていたかは、明瞭な土層断面を欠くとの、調査面積が不足する。遺物は当センターに43点があり、瓦25、須恵器7、土師器6、灰釉陶器1、中世陶器1、同款質陶器1、石2があり、古代の生活感はある。1は8世紀末頃の須恵器壺、4は安山岩の加工材、5は14世紀頃の在地製質陶器鉢、6は13世紀後半~14世紀前半の常滑焼中形の甕である。溝の年代としては、G3区第137図1が伴なうのであれば15世紀代である。

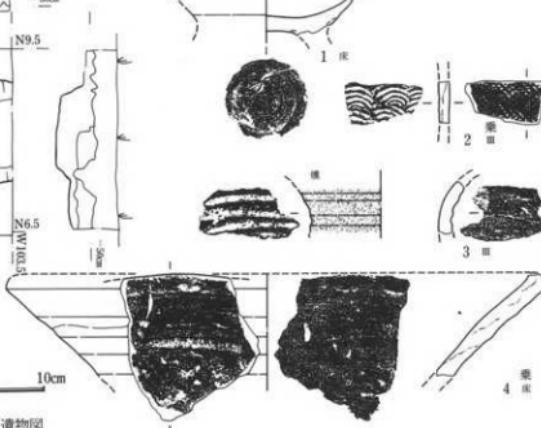
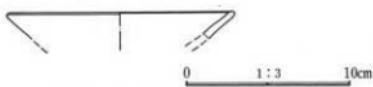


第142図 H1区遺構・遺物図

H1区 (第142図、写真図版45)

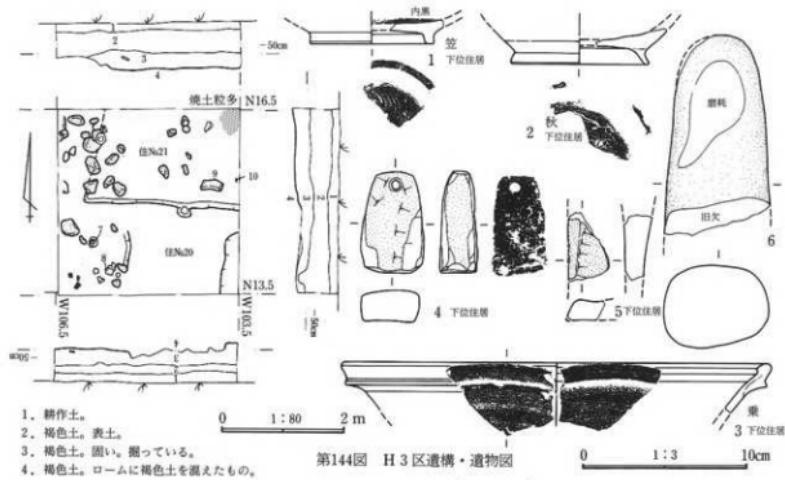
既報の一覧に「H-1、W106.5・N3.5、東-西方に相接して2本の溝が認められ、埋没土からやや古いものとみられる。2本の溝に重なって基壇らしきものも確認された。備考-溝、基壇?」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「B種、走行-E-13S(東-西)、長さ-3m以上、幅-1m40cm?、深さ-50cm前後、底部幅-不明、切面にみる形-ほぼW字形、備考-切込面不明U字形の溝2本の並列か」とある。

整理所見-基壇は中央の土壤を指し、2条の溝は東西に走る。北半に住居跡状の掘込があるが、住居跡であるのかはっきりしない。全体的にローム層は浅い位置から検出され、H2区にも同様に続く。遺物は当センターに11点があり、瓦8、須恵器2、中世土師質土器1点があり、第142図1は15世紀頃の土師質土器皿である。土器から見た古代の生活感は稀薄である。

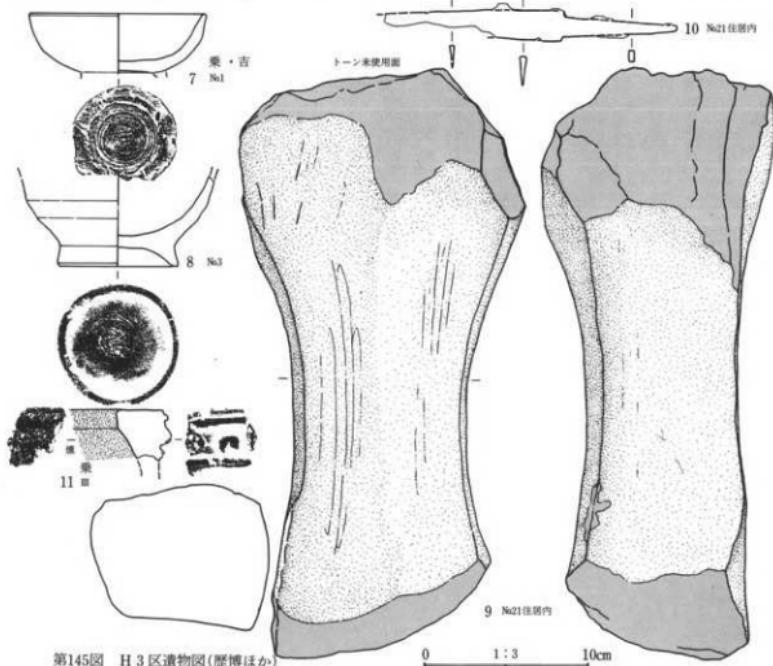


第143図 H2区遺構・遺物図

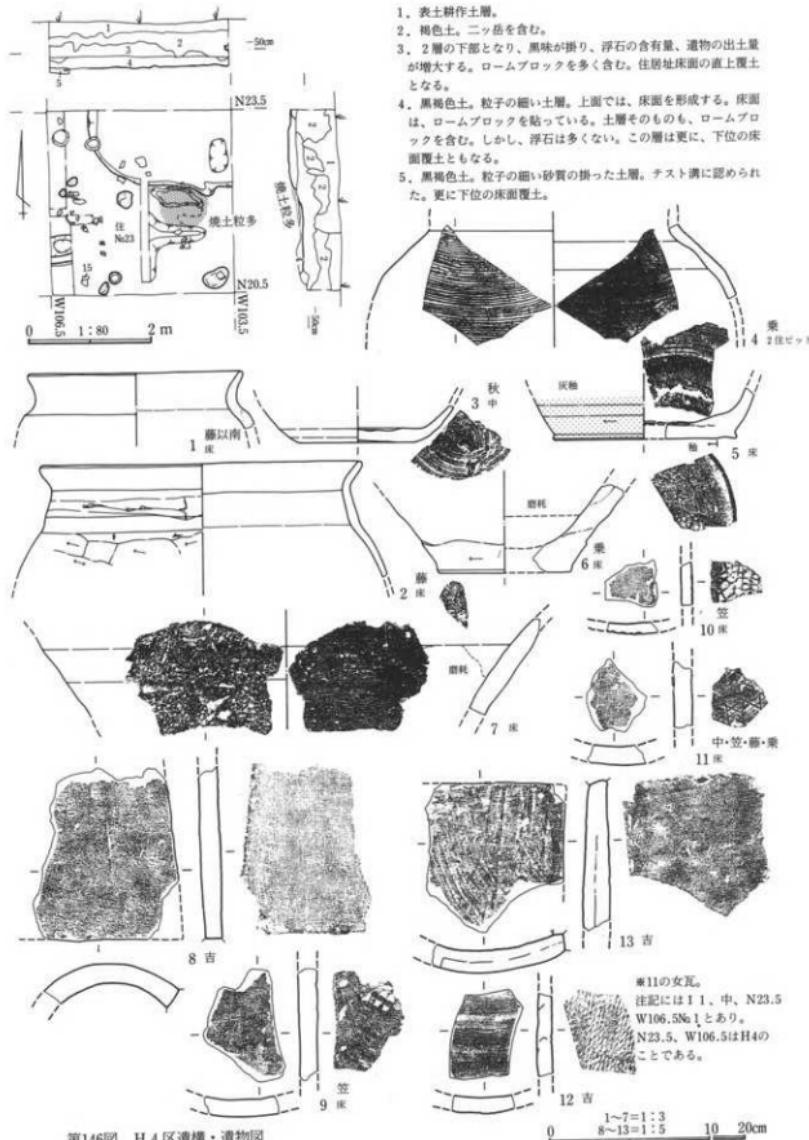
第5篇 上野園分二寺中間地域



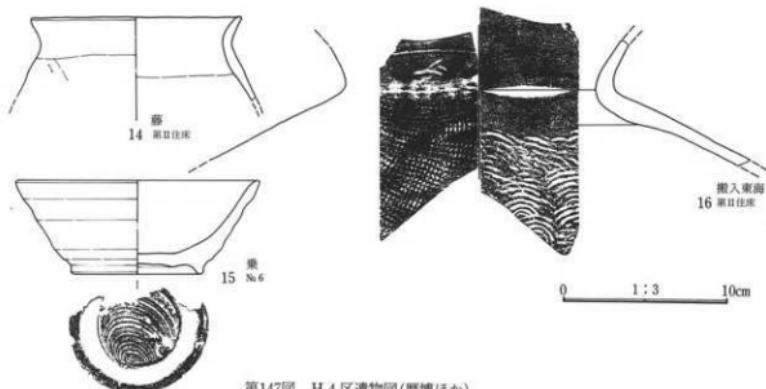
第144図 H 3 区遺構・遺物図



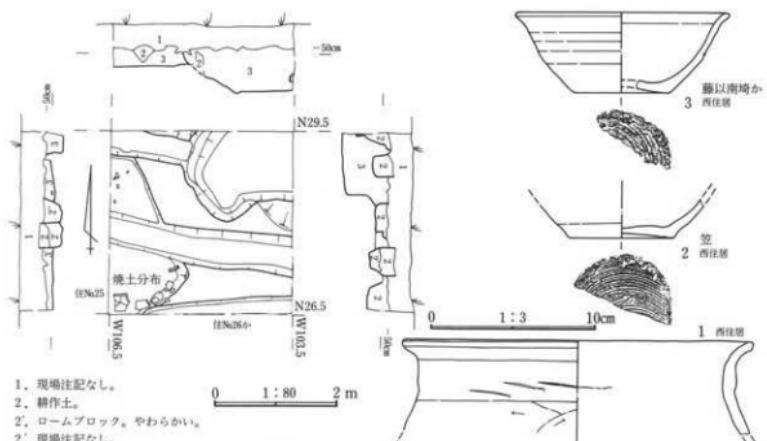
第145図 H 3 区遺物図(歴博ほか)



第146図 H4区遺構・遺物図



第147図 H4区遺物図(歴博ほか)



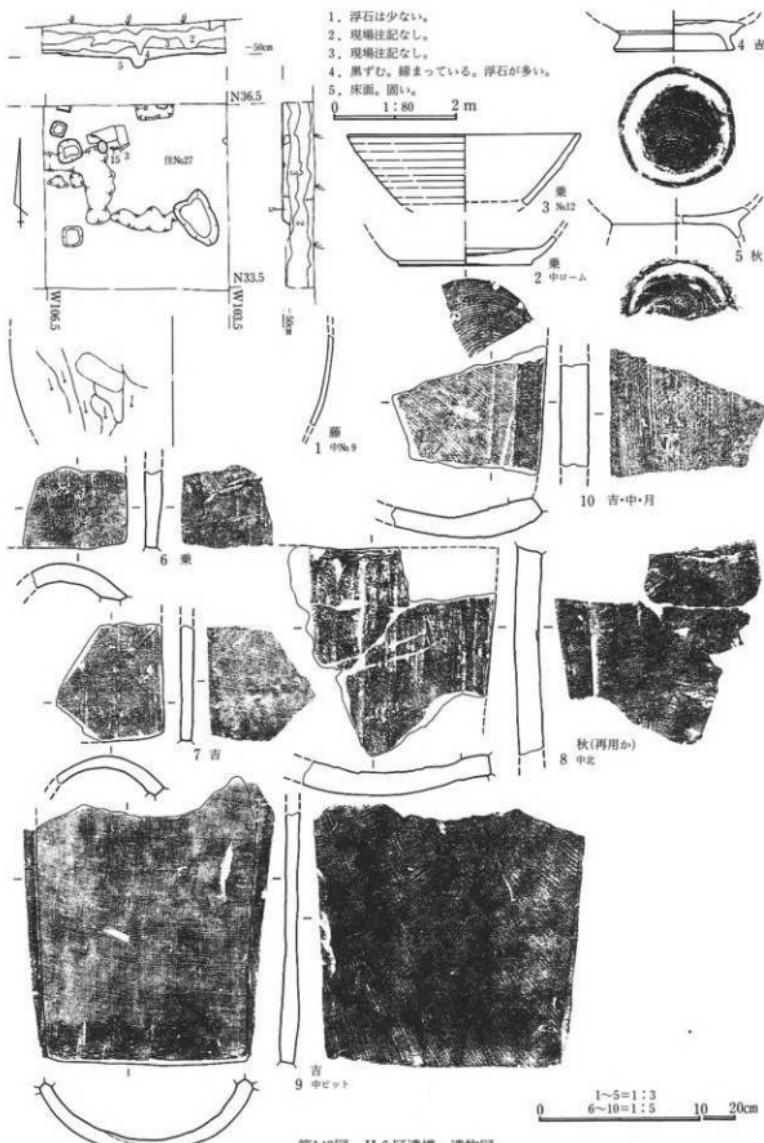
第148図 H5区遺構・遺物図

H2区 (第143図、写真図版45)

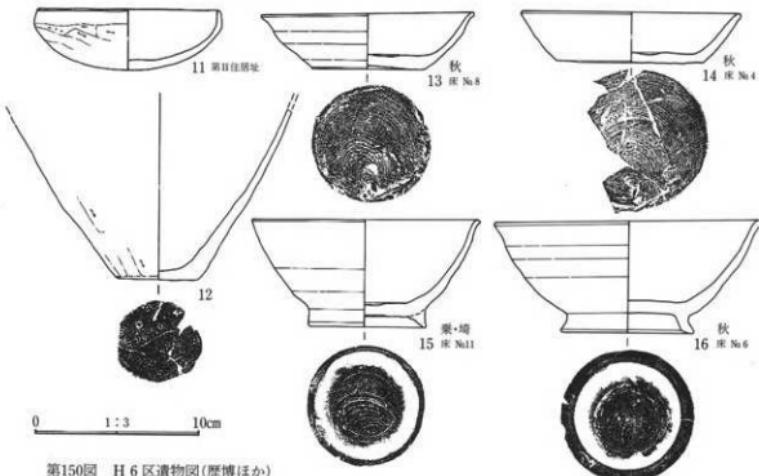
既報の一覧に「H-1、W106.5・N9.5、スリ鉢状のピットが認められたが新しいものとみられる。備考—ピット」とある。

整理所見—土層注記がなく、大形土壤の内容が不明瞭である。さらにその土壤と別の遺構が東南隅で重なりあう。遺物は当センターに52点あり、瓦5、須恵器24、土師器18、土師質土器2、灰釉陶器2、中世軟質陶器1がある。第143図1は10世紀末～11世紀前半頃の土師質土器脚付塊、2は7世紀代と思われる須恵器の中形甕、3は土師質土器の大形脚付塊かその脚部で10世紀末～11世紀前半頃。4は在地製軟質陶器鉢で14世紀頃の製品である。

第2章 調査された遺構と遺物



第149図 H6区遺構・遺物図



第150図 H 6 区遺物図(歴博ほか)

H 3 図 (第144・145図、写真図版45)

既報の一覧に「H-3、W106.5・N16.5、住居跡2戸が重複して確認された。古い方はその東端部で土器が出土した。新しい方は、その南東隅で鉄製切削工具、砥石が出土した。備考—住居跡、切削工具」とある。竪穴住居跡一覧に「No20、H-3、W106.5・N16.5、形状一方?、規模-P不明、H15cm以上、方位-N-10°E、床面の状況-良好・同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-土器多数」とあり、さらに「No21、H-3、W106.5・N16.5、形状一方?、規模-P不明、H25cm以上、方位-N-10°E、床面の状況-良好・同穴-らしきもの1個確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-切削工具(製鉄製)、砥石」とある。

整理所見-住居跡が2棟確認され、No20は南半で、北半が後出のNo21に相当する。両住居跡の埋没上面と思われる位置に礫が散在している。遺物は当センターに86点あり、瓦6、須恵器22、土師器54、石4であった。歴博資料の9は特大形で置砥石と考えられるためNo21は工作工房であり、出土の在り方も良い。

H 4 図 (第146・147図、写真図版45)

既報の一覧に「H-4、W106.5・N23.5、床面の状況から住居跡が少なくとも3戸重複しているものとみられる。但しその規模、形状は重複のため不明。焼土の跡もあり竈跡とみられる。備考-住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No22、H-4、W106.5・N23.5、形状-不明、規模-不明、方位-不明、床面の状況-一部張床不良・同穴-不明、壁溝-不明、竈-不明」とあり、さらに「No23、H-4、W106.5・N23.5、形状-不明、規模-不明、方位-不明、床面の状況-やや良好・同穴-らしきもの1個確認、壁溝-不明、竈-痕跡、遺物-土器」と続き「No24、H-4、W106.5・N23.5、形状-不明、規模-不明、方位-不明、床面の状況-一部良好・同穴-不明、壁溝-不明、竈-不明、遺物-土器片」とある。

整理所見-平面図にはすこぶる判読に苦しい状態にある。前出の中で竈の記載があるのはNo23であるから平面図中の土層観察用の截割がかかっているのがNo23のようにも思える。他の2棟については一棟は北東隅

に寄り、平面形状も住居跡として見えるが、別一棟は不明瞭である。遺物は当センターに203点があり瓦40、土師器116、須恵器46、灰釉陶器1と多量である。第146図では6は14世紀頃の中世軟質陶器でありながら床との注記があり、明らかに混入している。時期は1・3・4・5が8世紀頃、2・14が9世紀頃である。なおH3・4区に住居跡重複が多いことは、集密度が高いことであり、土地利用するうえで規制の係りを示唆している。

H 5 区 (第148図、写真図版45)

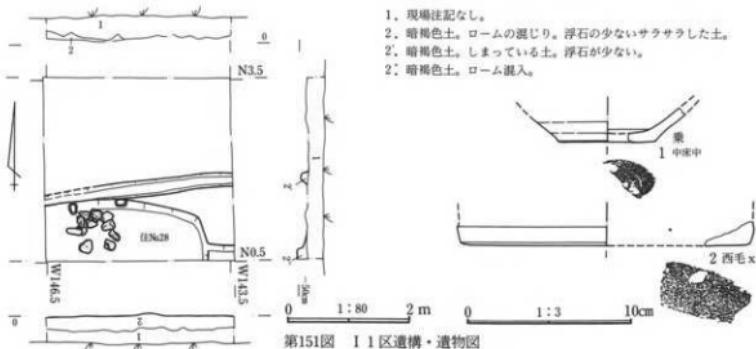
既報の一覧に「H-5、W106.5・N29.5、住居跡2戸あり、内1戸は住居の東南隅で、柱穴とみられるピットも認められる。又鬼瓦片も出土、付近には焼土も認められた。他は住居の北西部の一部とみられる。備考—住居跡、鬼瓦」とある。竪穴住居跡一覧に「No25、H-5、W106.5・N29.5、形状一方、規模—P250cm・H15cm以上、方位—N-150°W、床面の状況—良好・同穴—らしきもの2個確認、壁溝—無、竈—痕跡、遺物—鬼瓦片、土器片」とありさらに「No25、W106.5・N29.5、形状一方、規模—P不明・H20cm以上、方位—N-0°、床面の状況—良好・同穴—無、壁溝—無、竈—未確認」とある。

整理所見—住居跡にNo25と名称が付され、2棟分の記述があるが、北東隅にかかる凹地は北壁土層断面を見ると住居跡の立上形状より緩い勾配があり、東壁では急となり、住居跡としては疑問視される。遺物は当センターに34点があり、瓦2、須恵器22、土師器8、石2点であった。鬼瓦は未見であった。

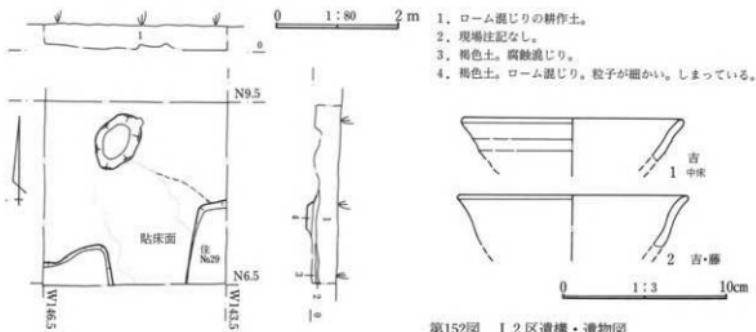
H 6 区 (第149・150図、写真図版45)

既報の一覧に「H-6、W106.5・N36.5、住居跡あり、床面上に平瓦2枚を組合せた遺構あり、うち1枚の瓦には「庭」の字が認められた。又平瓦を使ったピットも認められた。他に土器多数出土した。備考—住居跡、文字瓦」とある。竪穴住居跡一覧に「No27、H-6、W106.5・N36.5、形状一方?、規模—P不明、H-15cm以上、方位—N-8°E、床面の状況—良好・同穴—らしきもの1個確認、壁溝—無、竈—未確認、遺物—文字瓦、土器多数」とある。

整理所見—瓦組の遺構は今日の上野国分寺近接地の調査では竈材に用いられた例が多く、写真でも瓦1枚が架材のように見える。また北壁でも直立させた瓦材があり、住居跡は重複しているらしい。遺物は当センターに53点があり、瓦22、須恵器13、土師器16、石2である。瓦組に接して出土した3は9世紀頃、2・



第5章 上野国分寺中間地域



第152図 I 2区遺構・遺物図

13・14が8世紀末頃、15・16は9世紀代である。遺物類にはNoの付された個体が多い割りに注記された図面が少なく、排土の中間過程の図もなく、図の散逸も想される。

I 1区 (第151図、写真図版46)

既報の一覧に「I-1、W146.5・N3.5、住居跡の床面らしき部分が確認された。又その部分に石組ピット状遺構が認められたが性格は不明、東-西方向に走る溝状遺構も確認された。備考-住居跡、溝？」とある。竪穴住居跡一覧に「No28、I-1、W146.5・N3.5、形状一方？、規模-P不明・H20cm以上、N-15°E、床面の状況-不明・同穴-未確認、壁溝-無、窓-未確認、備考-住居跡か」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「A種、走行-E O E (東-西)、長さ-3m以上、幅26cm、深さ-15cm、切断面にみる形-U字形、備考-第I層下部から掘込む」とある。

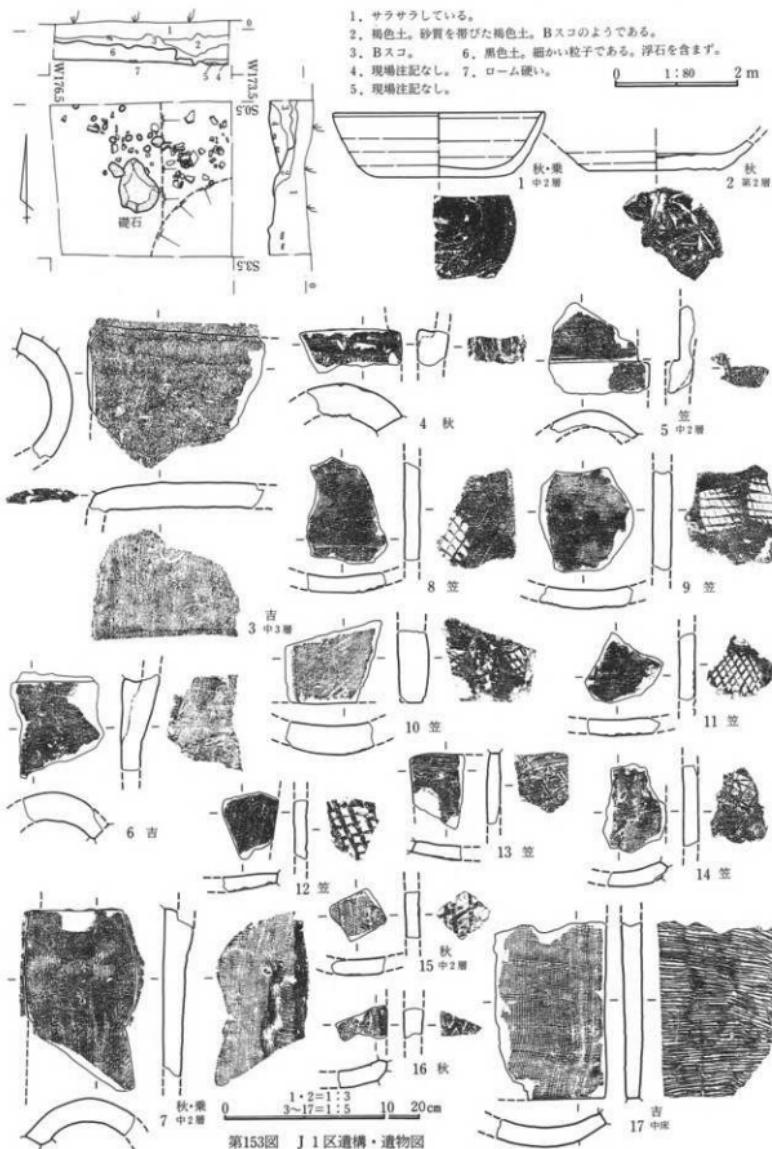
整理所見-編者が加った最中に調査が行なわれたので私見をまじえる。既報では南半に位置する住居跡にNo28と付されているが、ローム層上面は耕作などによって削平されており、立上は極めて浅い状態にあった。石組は床面との間に間隔を置き直接的ではないように見えた。遺物は当センターに15点があり、瓦5、土師器4、中世軟質陶器2、中世土師器1、繩文1、近世軟質陶器1、木炭1であった。

I 2区 (第152図、写真図版46)

既報の一覧に「G-2、W146.5・N3.5、住居跡の北西隅とみられる部分を確認、他に方形のピットも認められたが性格は不明。備考-住居跡、ピット」とある。竪穴住居跡一覧に「No29、I-2、W146.5・N3.5、形状一方、規模-P不明・H10cm以上、方位-N-15°E、床面の状況-良好・同穴-未確認、壁溝-無、窓-未確認」とある。

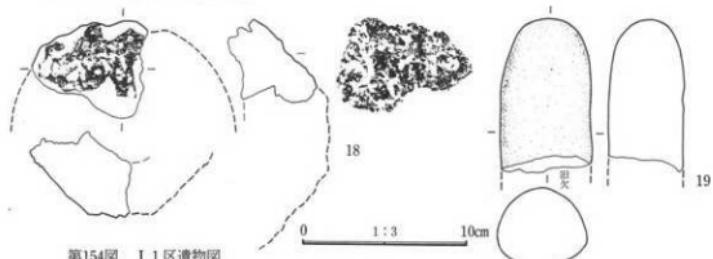
整理所見-平面図中の点線は貼床部分、破線は立上の推定位置を示す。住居跡のNo29とは方位からみて南東隅の掘込みであろう。このほか南東隅と中央の貼床部分に都合3棟が考えられる。この一角では耕作土の直下は、ローム層となり、各種火山軽石を含む旧黑色土、ローム層との漸移層、ローム層上面など、層厚にして40~50cmは削平されていると考えられる。遺物は当センターに57点があり、瓦10、須恵器16、土師器31があり、1・2は9世紀終末期頃の須恵器壊・塊である。

第2章 調査された遺構と遺物

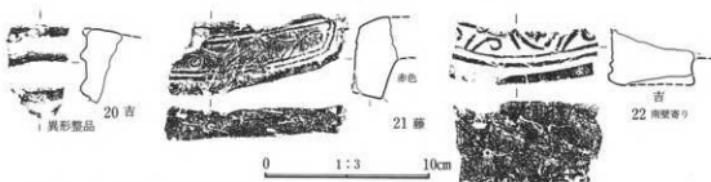


第153図 J1区遺構・遺物図

第5篇 上野国分二寺中間地域



第154図 L1区遺物図

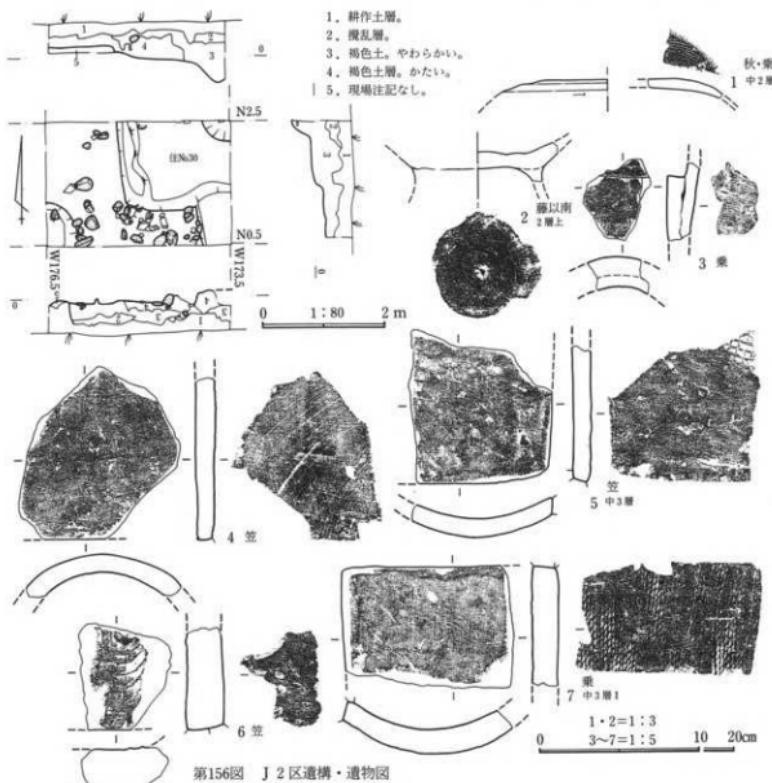


第155図 J-1区遺物図(歴博ほか)

図 1 (第153~155図、写真図版46)

既報の一覧に「J-1、W176.5・S2.5. 磐石とみられる石が発見されたが、周囲の状態から既に移動したものとみられる。特に遺構は確認されなかつたが、土木工事の痕跡あり 備考一 磐石」とある。

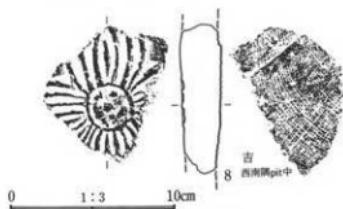
整理所見一編者の参加中の調査で私見をまじえる。前出のS2.5は3.5の誤りである。礎石については担当の松島氏より上野国分寺の東門跡礎石との直接的な関連の説明があり、既報中に単に礎石とあっても注意はされていた。調査着手後、耕作土上に一部が露出していたか否かは気憶にないが、間もなく、大石として現われた。写真から過程を追うと、土層断面図注3のBスコと注記の上面で整査された。Bスコとは浅間山B軽石混りの黒色土のことであるが、省略表現されている。続いて注3層の除去が行なわれ、礎石中央東西軸直下の截割がローム層上面まで行なわれた。そして最終的にはローム層上面まで耕作土された。土層断面図注4には注記漏があるが、写真(写真図版46右3段)ではB軽石の順推積、もしくは近い状態または砂の堆積層である。注5も漏れているがカラー写真には黒色土を主とするような質感あり。平面図には東側に急斜をなす上端線の記入がなかったので補描を加えた。その上端線の南半は新しい時代の土壤によって削られている。遺物量が多いのは注3の上面ではなく下面であり、図中の大半がその面であった。注6の黒色土は浮石(軽石のこと)を含まずとあるが途中に瓦片か、石片が水平の状態で夾まって断面に見えるので地域特性として入らないはずはない。ローム層上面と注6黒色土との境目に漸移層は見えず、ローム層上面も凹凸がいぢるしく、図化された北壁断面のように平らではない。そのため注7の上面は、おしなべて平らという線表現であろう。遺物は当センターに238点があり、瓦208、須恵器23、土師器2、鉄鋤1、石4と多量であった。特に瓦数は各調査区中最多量で8世紀代の笠懸窓製群製品が多く、上野国分寺の上野国分式鐵瓦が用いられた段階に相当する瓦片が多く、9世紀以降の瓦数は薄弱である。須恵器にも8世紀中頃の1があり、2は少し後出的ではあるが8世紀代であり、この地が瓦葺当初段階の東門跡であることは充分に考えられる。



第156図 J 2 区遺構・遺物図

J 2 区 (第156・157図、写真図版46)

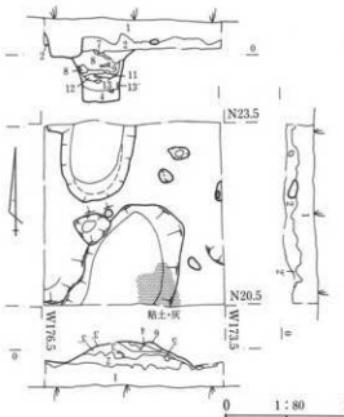
既報の一覧に「J-2、W176.5・N2.5、住居跡らしき落込みあり、柱穴らしきピットも認められたが不明。備考—住居跡？」竪穴住居跡一覧に「No.30、J-2、W176.5・N2.5、形状一方?、規模—P不明・H10cm以上、方位—N 5°E、床面の状況—不明・同穴—未確認、壁溝—無、竪—未確認、備考—住居跡か」とある。



第157図 J 2 区遺物図(歴博ほか)

整理所見—J 2 区に至っても礫や瓦片の多い状態は続くが、No.30と付された住居跡様の遺構によって削られる。南面隅の土壌は写真でも新しく、南東隅の落差は、注 4 にかたいとあり。J 1 から続く東方へ急斜とを考えられるが浅間山B軽石もしくは疑似の層が見えない。北東隅の掘込は新しくもないが住居跡様を切って存在している。遺物は当センターに117点があり、瓦91、須恵器12、土師器10、中世軟質陶器2、石1、近代

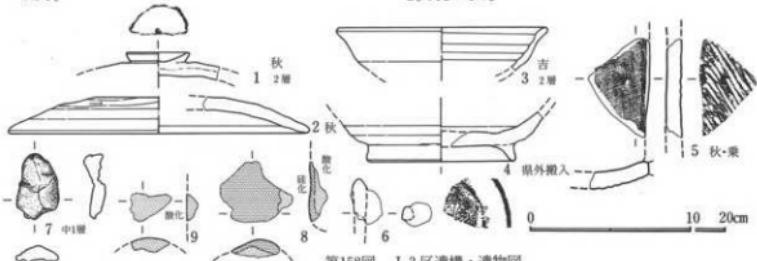
第5篇 上野国分寺中間地域

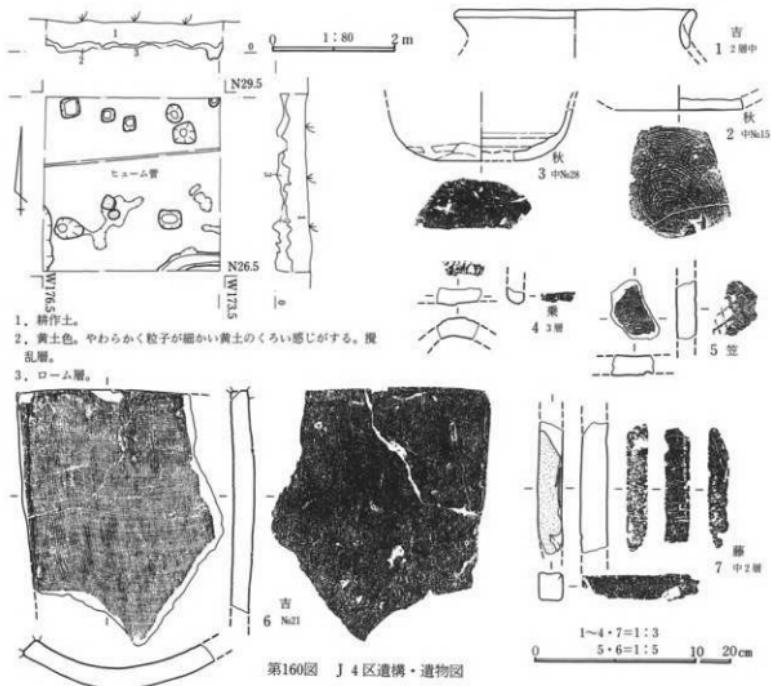


1. 表土。耕作土層。擾乱層。
2. 暗褐色土層。ローム粒子を霜降状に含む。(国分寺造當當時から灰陶器くらいまでの遺物を包含する。ローム上面に直接堆積した土層と思われる)。
3. ブロック。
4. 褐色土層。浮石が少ない。いくらかやわらかい。褐色土層が暗である。

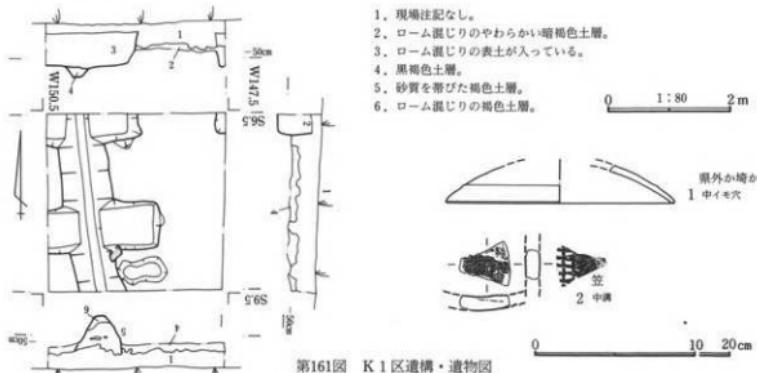
3. 暗褐色土層。霜降状のロームの粒子と浮石を含み、ピットと中央部凹地部分の第2層に次ぐ時期の覆土となる。遺物は第2層と同じ。

4. 黒褐色土層。粘質。ピットにおいては覆土最下層を形成し中央部の凹地においては、下から第2番目の覆土となる。部分的に焼土、ロームのブロック又、ピットでは多量のロームブロックを含む有する。
5. 粘土と灰により構成された人工的な堆積層である。平面実測図のように北に向い目的にはり出している。
6. 茶褐色土層。ローム質。ローム層の堅地面の最上層であったかもしない。
7. 茶褐色土層。ロームの粒子と浮石を含むやや黒みがかった層。基本的には8層があるが第3層の影響を受けた部分であろう。
8. 茶褐色土層。ローム粒子、浮石、焼土を含む。ピットに水が含まれてから比較的早い時期に堆積した層であろう。
9. 黑褐色。8層の堆積途上に部分的にまぎれこんだ層。
10. 茶褐色土層。8層よりも砂質がかった層。ピットに水が堆積してから最も早い時期に形成された土層である。
11. 茶褐色。砂層。こまかい砂の粒子で構成される。ピットに水が堆積したことの時期を明確にもののがたる層である。
12. 茶褐色。粒子の多い砂質土層。茶褐色でその上面を水がたまつたかのような様相を呈する。
13. 暗褐色土層。大きなロームブロックを含む。水がたまる直前の覆土層で全体に凸状曲面を呈する。一時期のピットの形成を示して居る。
14. 褐色土。褐色土層がやわらかいようなもの。浮石をわずかに含む。大きいもの。





第160図 J4区遺構・遺物図

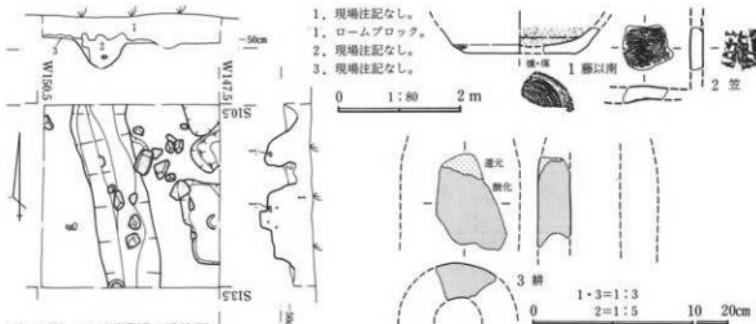


第161図 K1区遺構・遺物図

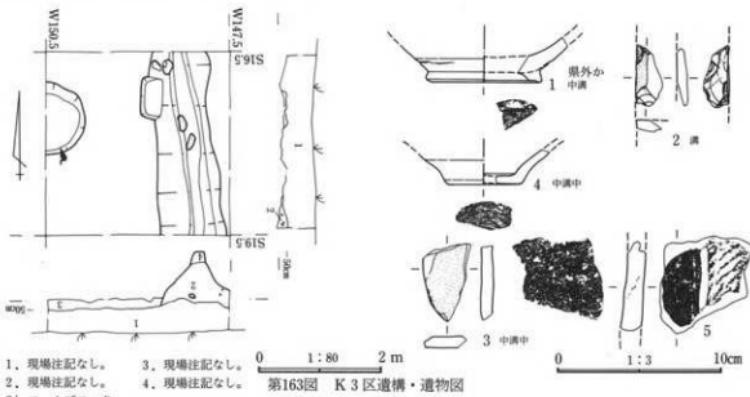
によって掘り窪められた部分があり、土器片が多数発見された。備考一溝？」とある。

整理所見—各々、性格が異なると考えられる溝状の掘込みが2個所に存在する。北側の溝状遺構は埋土中

第5篇 上野国分寺中間地域



第162図 K2区遺構・遺物図



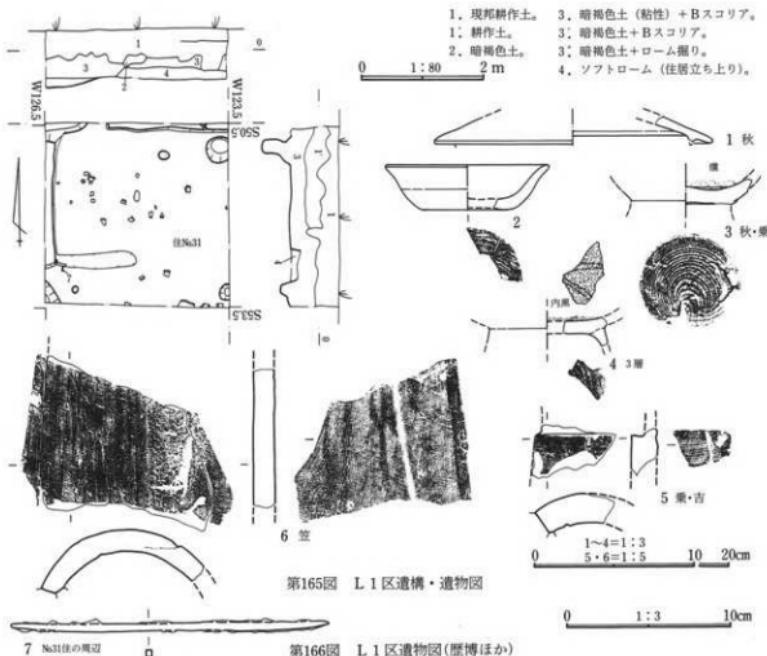
第163図 K3区遺構・遺物図



第164図 K3区遺物図(歴博ほか)の溝状構造は土層断面注5に「粘土と灰により構成され」とあり、全体的にもブロックを含むため、人為埋没のように思える。遺物は104点あり、瓦50、須恵器46、羽口2、銅塊1、鉄製品1、中世焼締陶器1、石1、近代以降陶器1、近代瓦1であった。遺物のうち、瓦は上野国分寺東縁築地跡が西側に近接推定されるから、量的に多い瓦の存在は理解できる。さらに羽口と原料銅塊と思われる錫解金属が第159図1にあり、先の粘土と灰の記述との関連が気にかかる。

J 4区 (第160図、写真図版47)

既報の一覧に「J-4、W176.5+N29.5、地ならしされ、やや窪んだ部分あり、柱穴状のピットも5個確認された。内3個は方形で一定の方向性を持つ。土器多数出土」とある。



第165図 L1区遺構・遺物図

第166図 L1区遺物図(歴博ほか)

整理所見一図中鎖線はヒューム管である。地ならしとされた面はJ2より続いている。地ならしとは、耕作土下の面が直下のローム層の面を擾乱していることの意味らしい。そのため整地面を意図しているとすれば、そうした点も含むであろう。この周辺以北より、中世の柱穴群は上野国分寺北縁に続き、方形の小柱穴はその一端と考えられる。また以北の古代の遺構の多くは、中世までに削平化もしくは自然の流れによって消失している可能性も強い。遺物は当センターに133点があり、瓦44、須恵器31、土師器50、中世軟質陶器1、石7がある。7は焼物で中世・近世軟質陶器製のように見え、部材片か。3は8世紀前半までである。

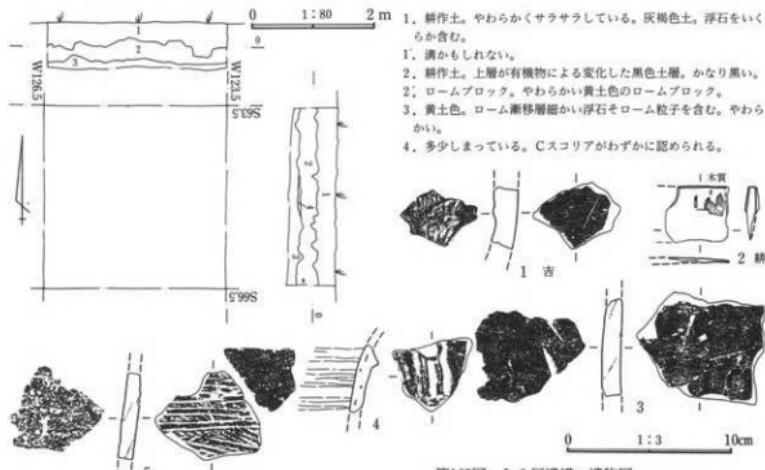
K1区 (第161図、写真図版47)

既報の一覧に「K-1、W150.5・S9.5、南-北方向に走るV字状の溝出現これを切って、方形ピット、溝状遺構も確認されたがこれらは新しいらしい。備考-溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「B種、走向-S-4 W(南-北)、長さ-13m以上、幅-90cm、深さ-70cm、底部幅-18cm、切断面にみる形-ほぼV字形、備考-一切込面不明」とある。

整理所見一溝と土壙との重複関係が北壁土層断面に示されている。溝遺構が古い。耕作土直下にはローム層がある。遺物は当センターに30があり、瓦16、須恵器5、土師器5、中世土師質土器1、石3であった。

1は8世紀前半頃の県外から埼玉県側から搬入された須恵器壺蓋で、県内製品より器高がある。

第5章 上野国分二寺中間地域



第167図 L2区遺構・遺物図

K2区 (第162図、写真図版47)

既報の一覧に「K-2、W150.5・S13.5、K-1で発見されたV字状の同一溝確認の溝の周囲には自然石が散乱。備考一溝」とある。

整理所見—調査過程を写真で見ると中央溝の掘り下げは東側の土壤の後に行なわれ、北壁土層断面もそのことを示していて、この溝跡は中世を含めた以前の可能性があろう。全体の注記傾向からすれば注2の2は近世以降の場合が多い。礫片は溝の発見面かそれより高い位置にある。遺物は当センターに68点があり、瓦42、須恵器8、土師器15、羽口1、縄文1、石1であった。

K3区 (第163・164図、写真図版47)

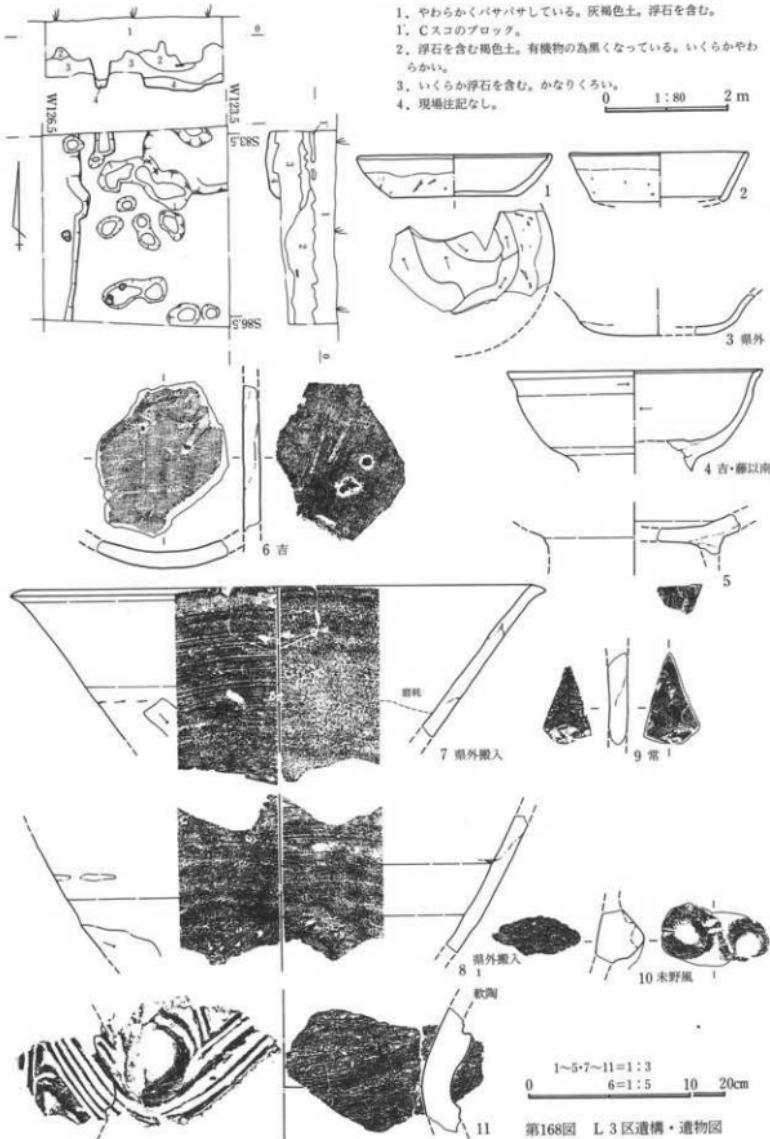
既報の一覧に「K-3、W150.5・S19.5、K-1、2と同じ溝を確認、備考一溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「B種、走向-S-4W(南-北)、長さ-13m以上、幅-90cm、深さ-70cm、底部幅-18cm、切削面にみる形-ほぼV字形、備考一切込面不明」とある。

整理所見—溝遺構はK1からまだ続き、深くなる。また、少しづつ中世遺物の量は増加傾向にある。このほか両側に円形の土壤があるが土層断面がない。注3はローム層であるらしい。なお、使用の第163図平面は記録保存図がなく、既報からの再掲載である。遺物は当センターに90点があり、瓦27、須恵器35、土師器20、灰釉陶器1、中世軟質陶器3、中世土師器2、石2であった。1は9世紀、4は15世紀前半、2、3は砥石片で両例ともに珪質頁岩で精整形用の砥石片で極めて稀な砥石石材種である。

L1区 (第165・166図、写真図版47)

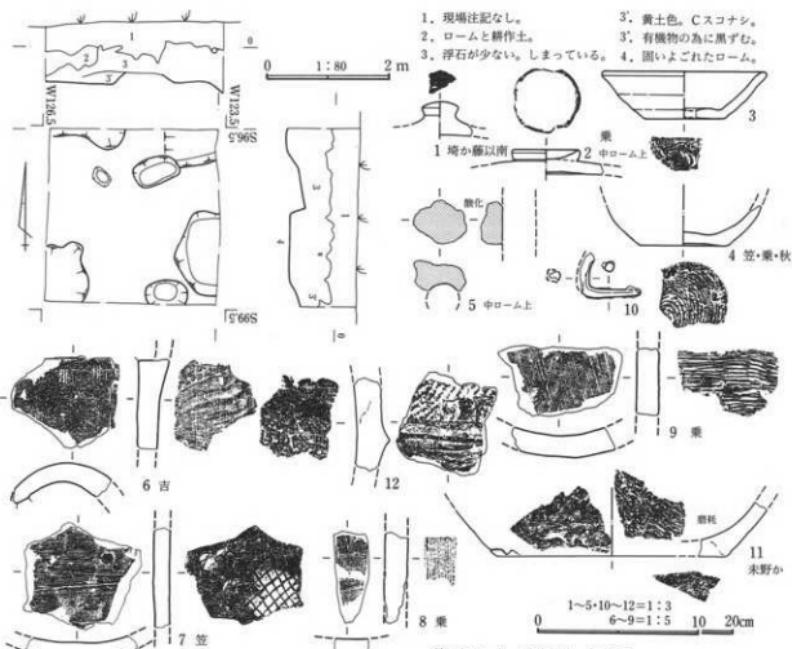
既報の一覧に「L-1、W126.5・S53.5、住居跡の北西部分出現、床面は堅い部分と柔い部分に区分される。柱穴とみられる2個のピットも確認された。備考—住居跡」とある。竪穴柱居跡一覧に「No31、L-1、

第2章 調査された遺構と遺物

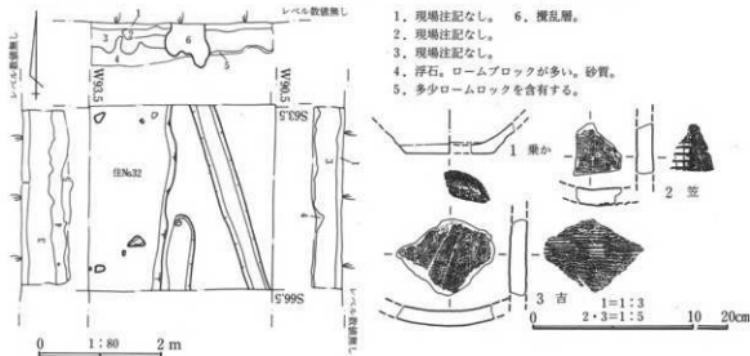


第168図 L3区遺構・遺物図

第5篇 上野国分寺中間地域

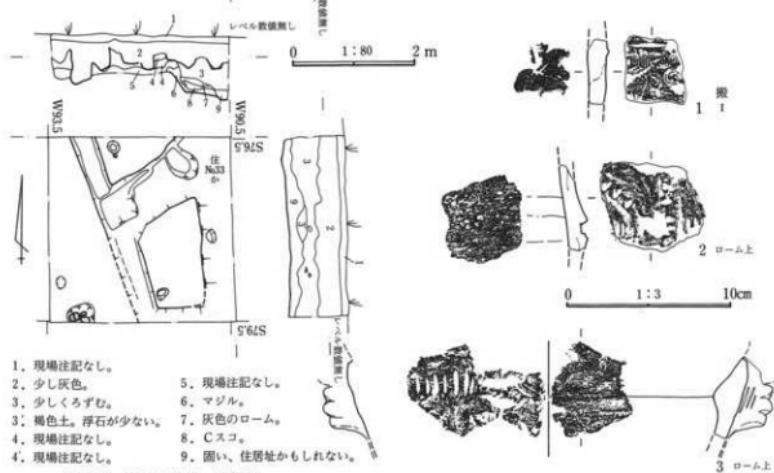
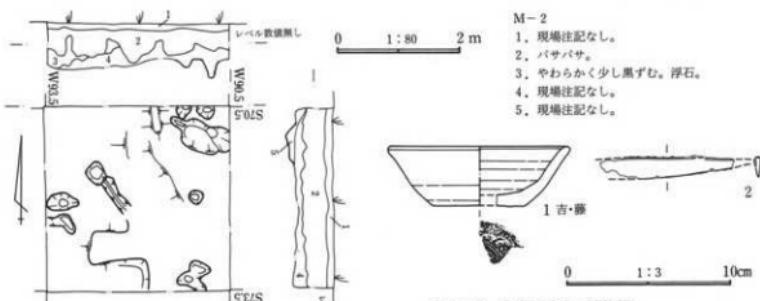


第169図 L1区遺構・遺物図



第170図 M1区遺構・遺物図

W126.5・S53.5、形状一方、規模不明、方位-N 5°E、床面の状況良好、同穴-2個確認、壁溝無、電-未確認、遺物-土器片、瓦片、鉄器多数、備考-床面に堅い部分と柔い部分があり、明瞭に区別される」とある。



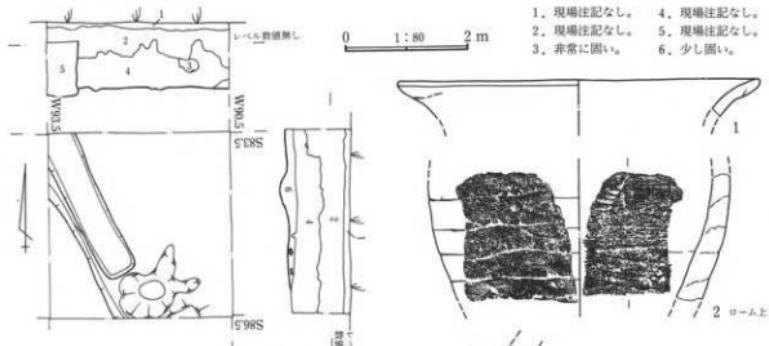
整理所見—住居跡No31と付されたのは中央部であろう。このほかこの住居跡立上と重複して北西隅、南西隅部にも遺構重複らしき平面記入があるので単純な状態ではないと考えられる。土層断面によく旧表土の一つである注3が見えはじめ、注4にローム層漸移も存在する。遺物は当センターに113点があり、瓦36、須恵器61、土師器・土師質土器15、石1であった。

L2区 (第167図、写真図版48)

既報の一覧に「L-2、W126.5・S66.5、耕作のためローム層まで擾乱、遺構検出されず」とある。

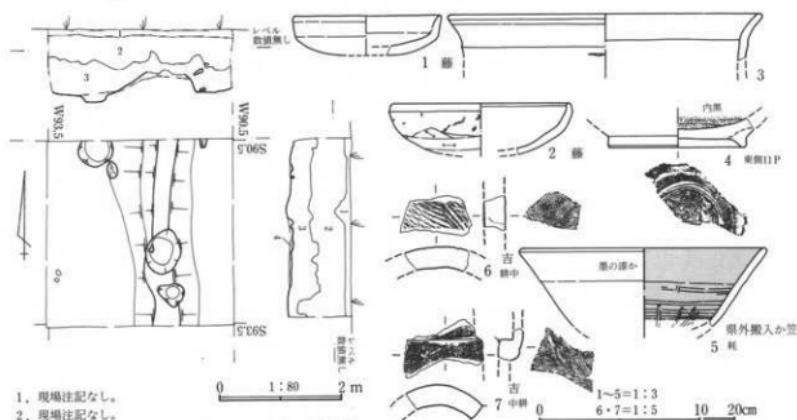
整理所見—ローム層まで擾乱とは少し言い過ぎのようである。土層断面3、2の間では古墳時代前期の浅間山C軽石層を含む黒色土層が存在している。なお平面図は記入されておらず、第167図は平成整理で作成したものである。遺物は当センターに33点があり、瓦3、須恵器21、土師器1、中世軟質陶器1、鉄製品1、繩文2、木炭4であった。遺物量は遺構近しを示唆している。

第5篇 上野国分寺中間地域



1. 現場注記なし。
2. 現場注記なし。
3. 非常に固い。
4. 現場注記なし。
5. 現場注記なし。
6. 少し固い。

第173図 M4区遺構・遺物図



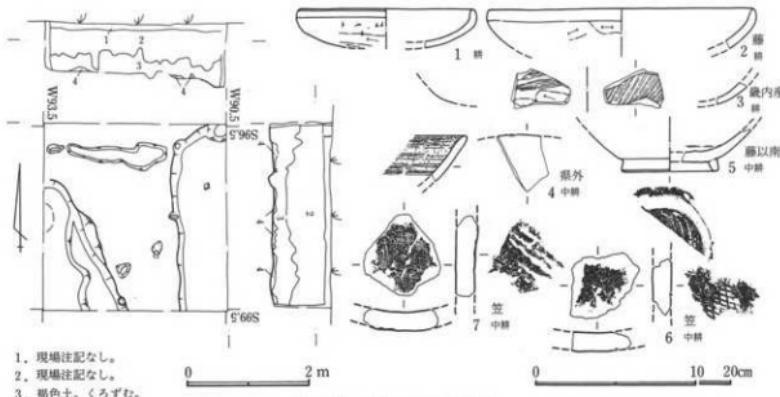
1. 現場注記なし。
2. 現場注記なし。
3. 棕褐色土。黒ずむ。Cスコ・わずかにロームブロックが入る。
4. 挿過ぎ。ロームブロックの覆土。

第174図 M5区遺構・遺物図

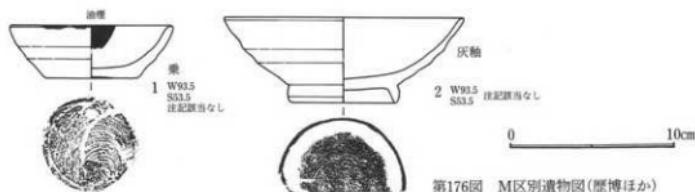
L3区 (第168図、写真図版48)

既報の一覧に「L-3、W126.5・S86.5、耕作のためローム層まで擾乱、遺構検出されず」とある。

整理所見—既報内容はL2、3区とが混同があるらしく、L3区は多くの遺構があり、注1'のCスコブロックとの記述も洩過ぎる位置であり、付会であろう。注2は中世の掘込みか。西壁下は住居跡か。遺物は当センターに61点があり、瓦16、須恵器22、土師器11、中世陶器1、同軟質陶器3、縄文8であった。1、2は9世紀前半、3は7世紀頃、4・5は10世紀後半頃、7は15世紀頃である。



第175図 M6区遺構・遺物図



L4区 (第169図、写真図版48)

既報の一覧に「L-4、W126.5・S99.5、耕作のためローム層まで攢乱、遺構検出されず。繩文の小形土器を発見」とある。

整理所見—ローム層まで攢乱されているとは、云い過ぎである。少なくとも耕作土下から、排土下面まで50~60cmはある。土壤が3基以上が存在している。攢乱とするのはどうも注3に12世紀初頭頃と推定される浅間山B軽石を含むためらしい。写真も、砂質の多い粗質感あり。遺物は当センターに63点があり、瓦16、須恵器22、土師器・土師質土器10、中世陶器1、同軟質陶器3、同土師質土器1、鉄製品1、羽口1、繩文8であった。1は県外搬入と考えられ稀少種で、3は11世紀頃の土師質土器である。11は中世軟質陶器鉢で14世紀頃である。

M1区 (第170図、写真図版48)

既報の一覧に「M-1、W93.5・S66.5、住居跡らしき痕跡あり、溝状の遺構もあって南北方向に走る」とみられる。備考—住居跡?溝?とある。竪穴住居跡一覧に「No.32、M-1、W93.5、形状不明、規模不明、方位N10°E、床面の状況—傾斜ありや不良・同穴—不明、壁溝—不明、竪—未確認、備考—住居跡か」とある。

整理所見—住居跡らしきとは西半の掘込であろう。No.32と付される。溝状遺構は耕作土をさらに切って設け

第5章 上野国分寺中間地域

られている。注4、5中にローム層ブロックのことが添記されているが、畠遺構の延長かは不明である。遺物は当センターに76点があり、瓦19、須恵器26、土師器27、繩文1、近世軟質陶器1、石2であった。

M 2 区 (第171図、写真図版48)

既報の一覧に「M-2、W93.5・S73.5、地層擾乱甚だしく、特に遺構検出されず」とある。

整理所見—遺構なし、擾乱とは、浅間山B軽石を含む黒色土が深くまでありそうである。土壤や小穴が堆土基面に見える。遺物は当センターに24点があり、瓦7、須恵器5、土師器4、中世軟質陶器1、鉄製品1、繩文5、石1であり、繩文土器が目立つ。

M 3 区 (第172図、写真図版48)

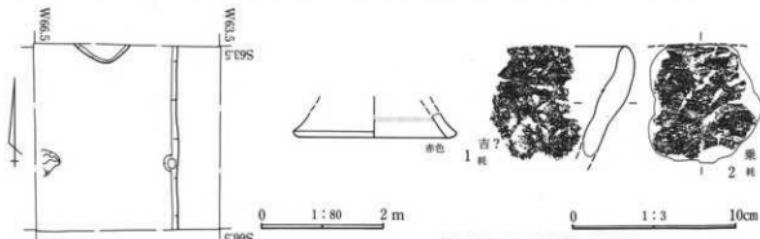
既報の一覧に「M-3、W93.5・S79.5、住居らしき部分が認められるが、地層擾乱され不明。東—西方向と南—北方向の2つの溝が認められたが、東—西方向のものは新しいとみられる。備考—住居跡？溝」とある。竪穴住居一覧に「No33. M-3、W93.5・S79.5、形状—不明、規模—P不明・H50cm?、方位—不明、床面の状況—不良・同穴一らしきもの1個確認、壁溝—無、竪—不明、備考—住居跡か」とある。

整理所見—溝のうち新しい溝は南北走行で、古様は西—東壁に至る溝跡で、前出と所見は異なる。また東・西の溝が切る東壁下の凹地面は住居跡らしくNo33に相当か。遺物は当センターに63点があり、瓦11、須恵器11、土師器31、中世軟質陶器1、鉄製品2、繩文6、石1であった。M 2 区と同様に多い。1は14世紀頃の火鉢片である。

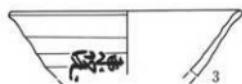
M 4 区 (第173図、写真図版48)

既報の一覧に「M-4、W93.5・S86.5、やや南北方向に溝状の遺構が認められたが、耕作土より切り込まれ新しいとみられる。備考—溝」とある。

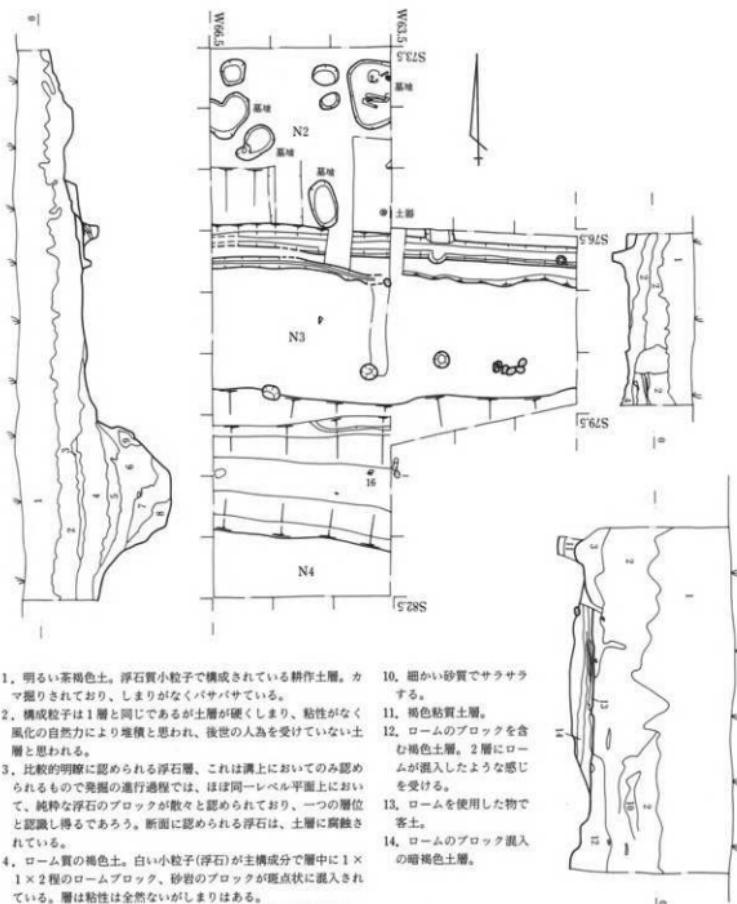
整理所見—平面図を見ると堆土基底面の東方側は住居跡ではないのだろうか。西壁側に溝が1条認められる。遺物は当センターに149点があり、瓦36、須恵器37、土師器・土師質土器60（藤岡製品3）、中世軟質陶器2、鉄製品1、近世軟質陶器1、繩文10、石2である。繩文土器、土師器・土師質土器が多い。



第177図 N 1区遺構・遺物図



第178図 N 1区遺物図



* N 4 区内東壁にかかる遺物群はオーバーハンジングしている東壁間にあり。

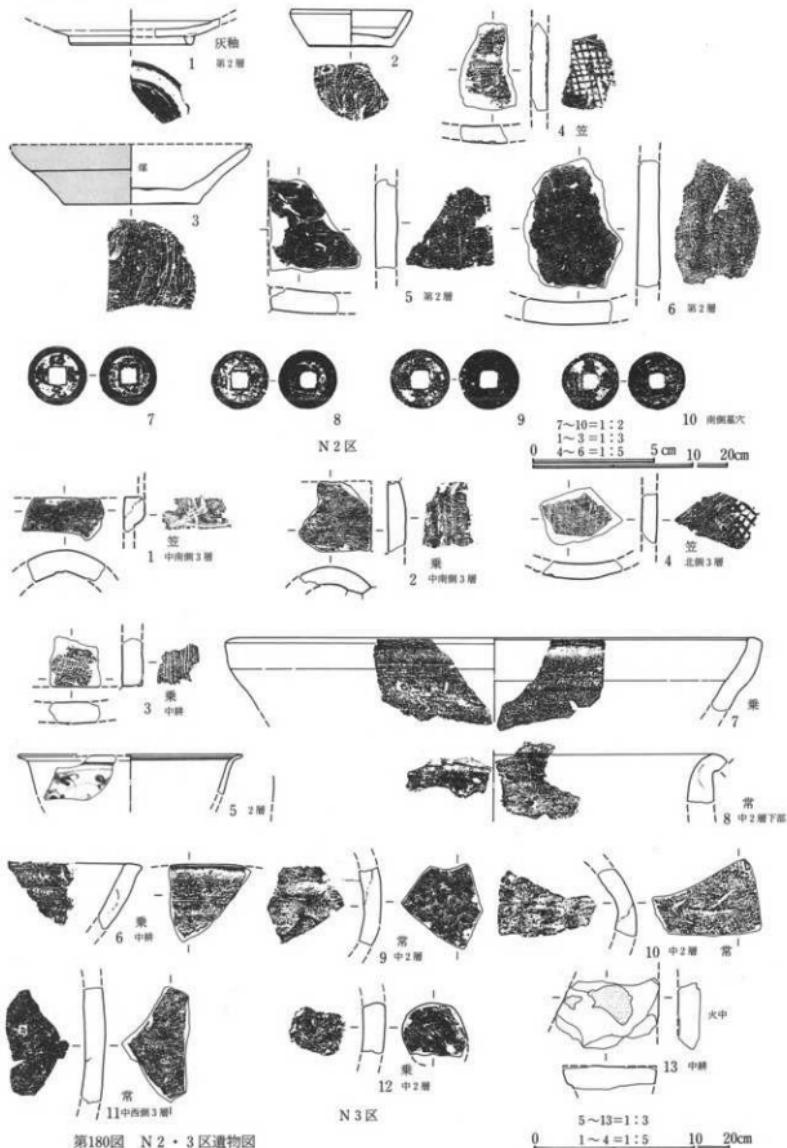
* N 3 東壁のみ 1:40。

* 注4の砂岩とは火山泥流の砂質層が固結化した層が地山層中にあり。

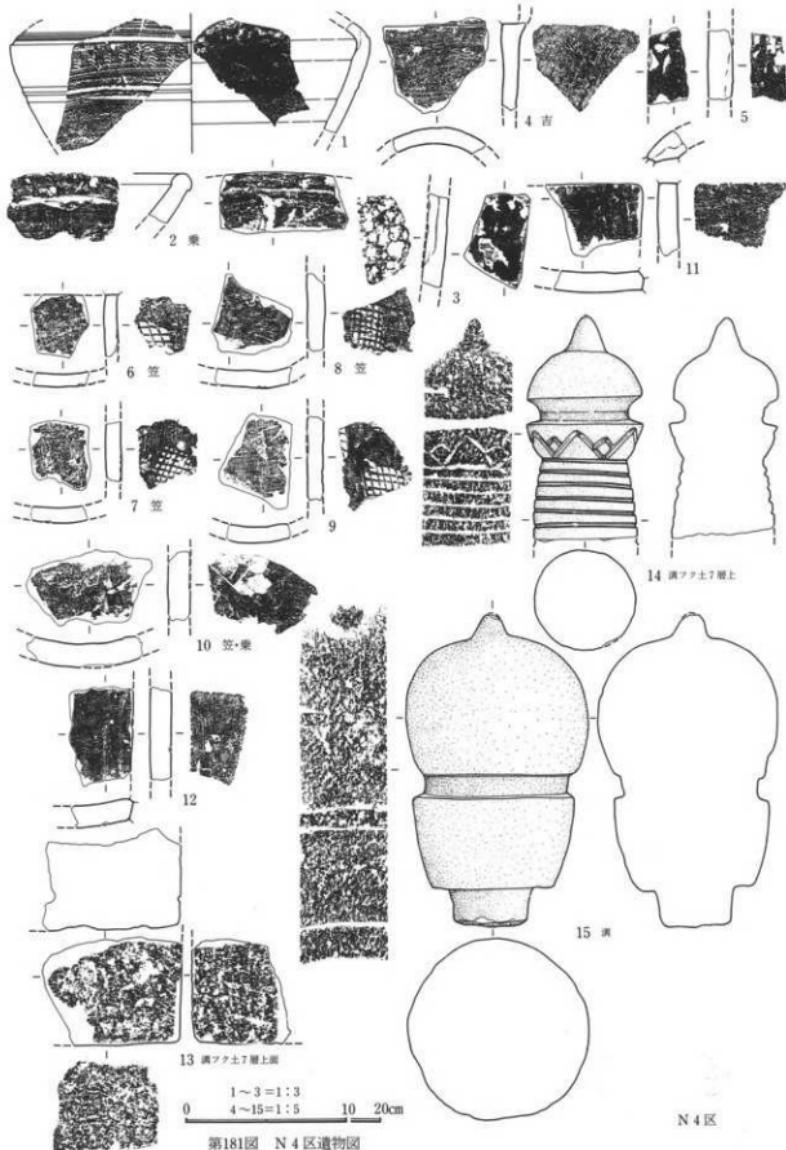
0 1:80 2 m

第179図 N 2～N 4 区遺構図

第5篇 上野国分寺中間地域

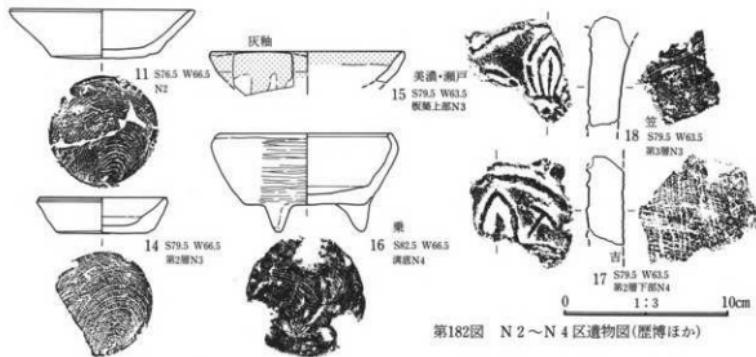


第180図 N2・3区遺物図

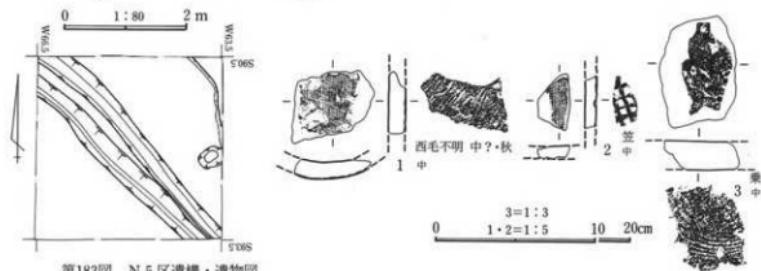


第181図 N 4 区遺物図

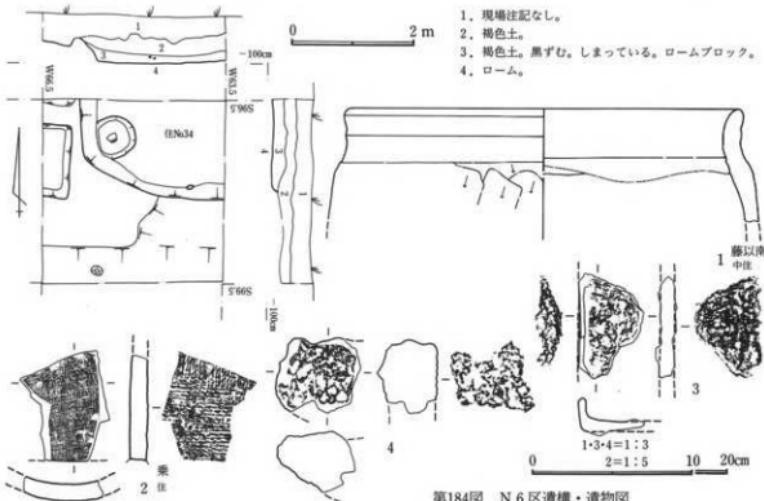
第5章 上野国分寺中間地域



第182図 N2～N4区遺物図(歴博ほか)



第183図 N5区遺構・遺物図



第184図 N6区遺構・遺物図

M 5 区 (第174図、写真図版48・49)

既報の一覧に「M-5、W93.5・S93.5、ロームのブロック混りの土が盛上り、土手状の遺構が南-北方に向に認められる。ピットも3個認められ、内1つは土手状の部分にある。備考-土手状の盛上り」とある。

整理所見-写真を見ると注2までが浅間山B軽石を含む粗質層に見える。既報の土手状の盛上りとは、2遺構が両側を掘込み、間に土手状に残ったように見える。中央の土壤は径約70cmで、深さは-116cmと記入があり、北西の土壤も-115cmとあるが基準高がわからない。写真では中央の土壤で約50cmの深さに見える。掘立柱建物跡かは不明である。遺物は当センターに131点があり、瓦26、須恵器45、土師器52(うち2点藤岡製品)、縄文4、近世陶器1、石3であった。須恵・土師器が多いのは住居跡が存在するのであろう。

M 6 区 (第175図、写真図版49)

既報の一覧に「M-6、W93.5・S99.5、耕作のためのローム層まで擾乱、遺構検出されず」とある。

整理所見-写真を見ると土層注記2までが浅間山B軽石を含む粗質層に見える。平面図中には東・西に2個所、住居跡様の掘込みあり。また北壁下の東西に走る小溝も住居跡の周溝に見える。遺物は当センターに112点があり、瓦22、須恵器26、土師器63(うち7点が藤岡製品、1点西国より搬入の製品)、近世軟質陶器1であった。2・3は8世紀、1は8世紀後半から9世紀初頭、4・5は9世紀前半。特に西国製品の高盤か盤と思われる土師器は注目される。

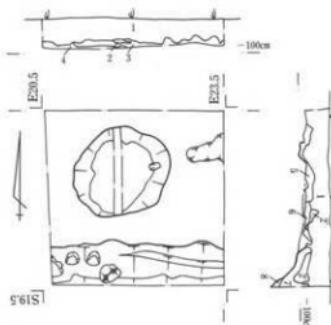
N 1 区 (第178図、写真図版49)

既報の一覧に「N-1、W66.5・S66.5、特に遺構らしきものなし。耕作土中より「東院」の墨書銘のある土器片出土」とある。



第185図 O 1 区遺構・遺物図

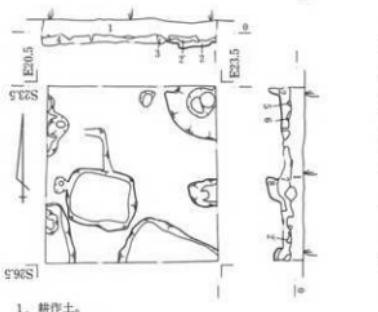
第5篇 上野国分寺中間地域



1. 耕作土。
2. 浮石層。
- 2'. 浮石層。Cスコリア？。
- 2". 黒褐色土。浮石。
3. 砂質黒褐色土。やわらかい。
4. 現場記なし。
5. 黄土色。やわらかい。ロームが混じり耕作土による擾乱を受けている。
6. 砂質暗褐色土。
7. 暗褐色土。浮石が混じらずサラサラする。
8. 砂質暗褐色土。ローム塊。やわらかい。

0 1:80 2 m

第186図 O 2 区遺構図



1. 耕作土。
2. 黄土色含ブライマー。
- 2'. 砂質黒褐色層。Cスコ。
3. Cスコが混じる黒褐色土。砂質黒褐色層。
4. 黑褐色土。固い。砂質ソフトローム。ゼンイ層。黒色ローム。擾乱を受けている。
5. 黑色の擾乱層。
6. 砂質ソフトローム。
7. 摻乱。黒色土。ヤワラカイ。砂質黒褐色層。
8. ローム。黄土色。ブショク土が混じる。

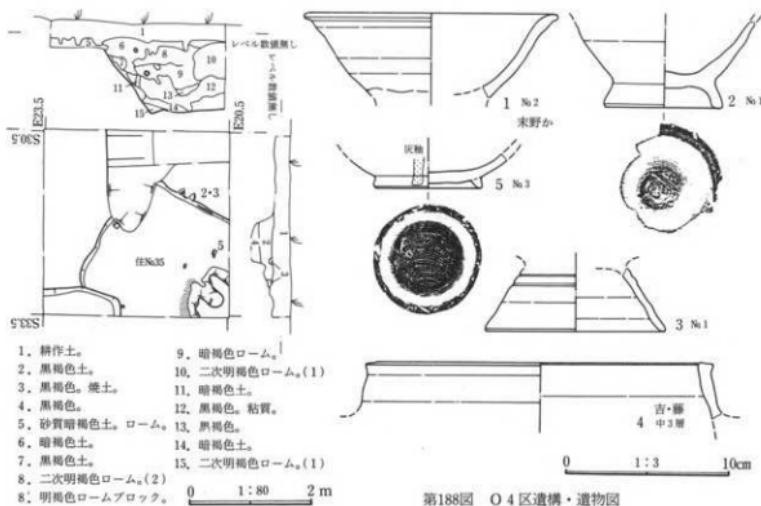
第187図 O 3 区遺構図

N 2 ~ 4 区 (第179~182図、写真図版49・50)

既報の一覧に「N-2、W66.5・S76.5、N-3、W66.5・S79.5、W66.5・S79.5、N-4、W66.5・S82.5、版築手法のみられる道路上の部分が東-西方向に走る。その北縁に接しては墓壙が5個ほどあり、墓地とみられる部分がある。南側にはすこぶる大規模な溝があり、道路上の部分と並行して走る。道路状部分溝とは、同一の遺構で、建物を囲む濠及び築垣の基礎とみられ、奈良時代のものとみられる。墓は中世のものとみられるが溝中にも人骨、墓石、香炉等が認められた。備考-濠及び築垣の基礎とみられる遺構・墓」とある。

整理所見-土層断面の状況を写真で見ると西壁では注3、東壁では注2まで、北壁では耕土基底まで粗質に写され、浅間山B軽石が多く含まれていると考えられ、以下は締っているように見える。またN 4 区東壁

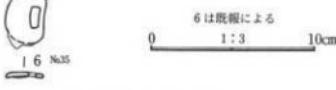
整理所見-土層断面がないので、写真で補うと、排水の深さは約80cmで、浅間山B軽石を含むと思われる他区では注2に相当する層が東側の高所まであり、西側の住居跡様の遺構の肩部までおよぶ、その遺構は平面図中央右より以西を占め、深さ約30cmである。さらに、それを切って北壁下中央の土壤が設けられている土壤の埋土も住居跡様の埋土に近い。遺物は当センターに17点があり、瓦5、須恵器4、中世軟質陶器3、繩文3、石1、近世軟質陶器1である。東院と目される遺構は不明瞭であったが、酸化気味の須恵器の脚付塊第177の脚部内面に赤色顔料が付着しており、10世紀後半頃の製品である。第178図3の須恵器塊には「東院」とあり、9世紀末頃の製品である。東院の存続時期がどのくらいの巾であったのかが問題となるところであるが、K~N列は遺物量が少ない割りに稀少器種が含まれ、さらに中世遺物量が多出傾向にあることは注意される。



第188図 O 4 区遺構・遺物図

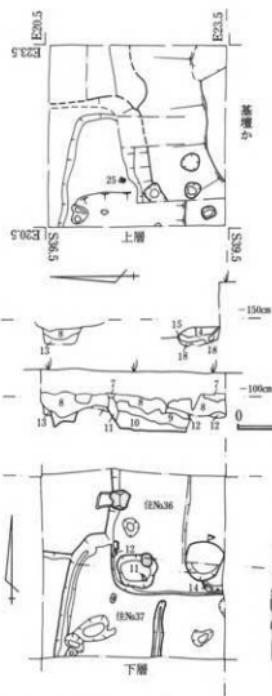
には注6最下層に相当する位置から第181図14の宝篋印塔の相輪部が写され、底面に接して香炉16の出土がある。また第180~182図に掲げた遺存の良い土器個体の大半は15世紀代であるので、道路状の遺構は14世紀後半~15世紀前半頃の遺構と考えたい。なおN 2南端

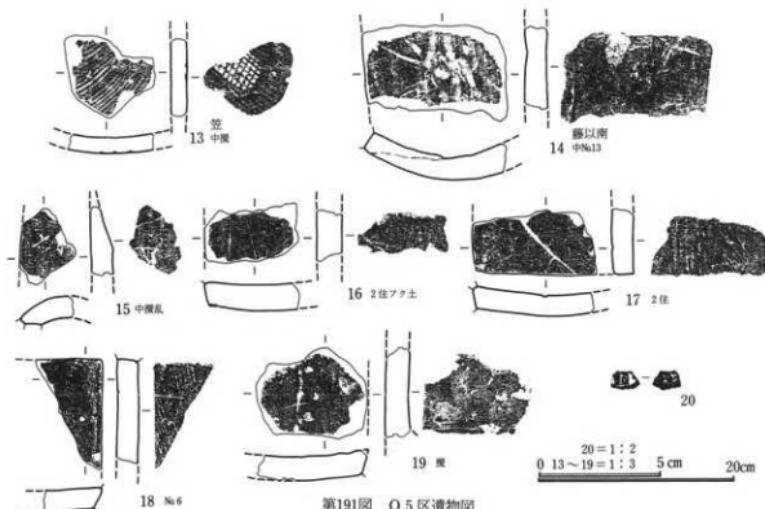
の墓壙の上面にかかり、東壁断面直下には15世紀の土師質土器(第182図11か)が写されて見えて、墓壙が群であれば道路遺構より後出する。付設されている溝は埋土の最下位に14世紀末~15世紀頃に見える香炉があり、14世紀代に見える宝篋印塔などの墓石類を投棄した層がその中位にあり、香炉の時代が溝の使用年代に近い。15世紀代に14世紀代まで近接地にあった墓地を整理したようで、その投棄上面には、道に用いた築土であるかは分からぬが版築の大形ブロックが2層にわたり存在し、西壁の注5・6層上面に相当し、道として用いられた個所はもっと広かったように思える。注5以下は圧縮沈下していると考えるべきである。道として用いられた築土層は、本来的に版築したのかという点は、道としての単一機能に大規模な施設を築くかということが問題で、まずは考え難く、前代の遺構を再利用したものと考えるのが妥当である。既報の説く奈良時代の築垣という説は急には賛成しかねるが、上野地域の中世遺構の土壌は粗な築成が多い傾向からすれば、無視はできない。遺物は当センターに、N 2は総計78点あり、瓦18、須恵器41、灰釉4、中世土師質土器4、同瓦5、木炭1、繩文1、石4があり、N 3は総計127点があり、瓦42、須恵器27、土師器・中世土師器24、中世陶器4、同軟質陶器6、同中國磁器1、円形加工品1、砥石1、近世軟質陶器1、石20があり、N 4は総計137点があり、瓦82、須恵器15、灰釉陶器2、土師器・中世土師質土器19、中世陶器1、同軟質陶器5、同瓦6、繩文2、石5であった。遺物類からすると、中世は第180図6・8、第181図2・14などが14世紀代でそのほか中世瓦・焼締陶器片を除くと、大半が15世紀代にあり、第180図5の明代青花のように少數ながら16世紀代も存在する。



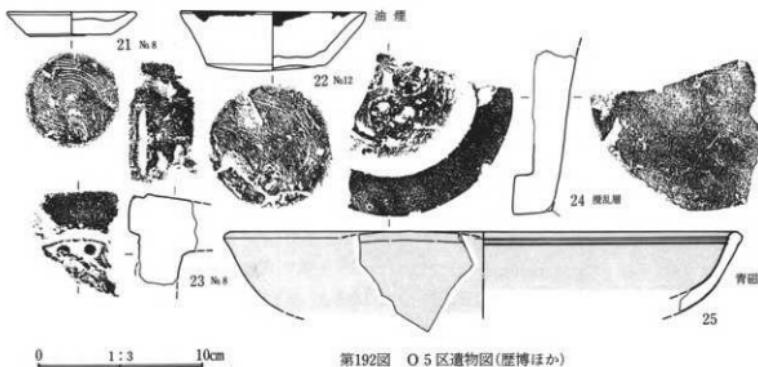
第189図 O 4 区遺物図(歴博ほか)

第5篇 上野国分寺中間地域





第191図 O5区遺物図



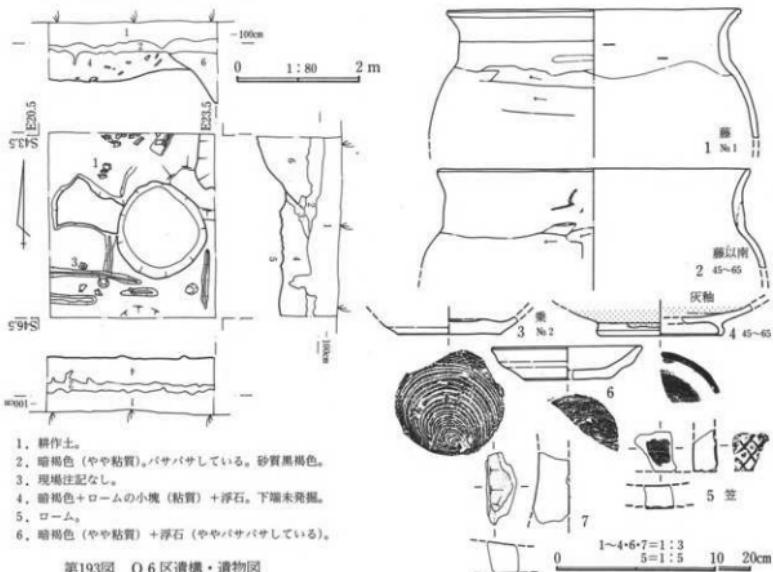
第192図 O5区遺物図(歴博ほか)

N5区 (第183図、写真図版50)

既報の一覧に「N-5、W66.5・S93.5、北西-東南にかけて並行する、2本の溝の痕跡がある。ローム層上面まで堆積土がぬかれ、硬い砂質の面が認められる。備考一溝？」とある。

整理所見—土層断面がなく、写真では排土基面まで約80cmあり、浅間山B軽石を含むと考えられる粗質土が続く、北東の掘込みは約20cm、斜方向に抜ける溝は各々10cmの深さに見える。また全体が整理されたかのように粗質土に覆われる。遺物は当センターに48点があり、瓦30、須恵器9、土師器、土師質土器2、灰釉陶器2、中世軟質陶器2、縄文2、近世軟質陶器1であった。

第5篇 上野国分寺中間地域



第193図 O-6区遺構・遺物図

N-6区 (第184図、写真図版50)

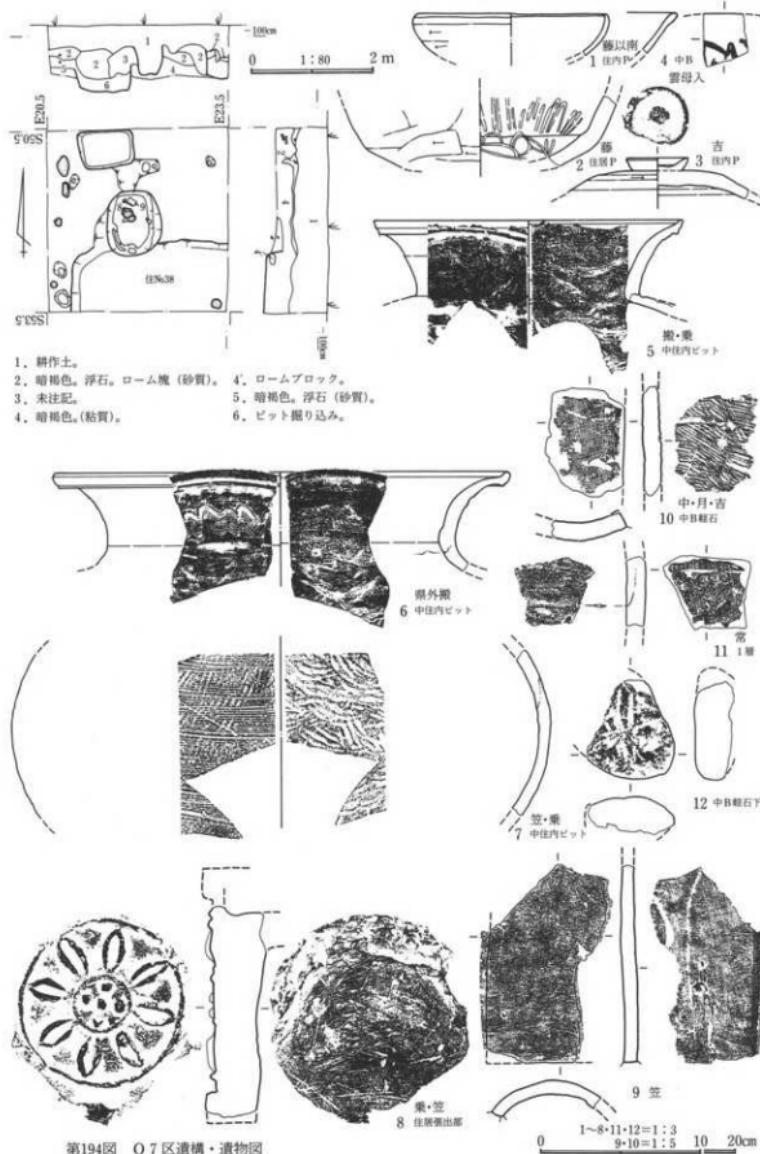
既報の一覧に「N-6、W66.5・S99.5、住居跡南西隅の一部が出現。柱穴とみられるビットあり、瓦片の出土もみられる。備考一住居跡」とある。竪穴住居跡一覧に「No34、N-6、W66.5・S99.5、形状一方? (隅丸)、規模-P不明・H40cm?、方位-N 7°E、床面の状況-やや良好・同穴-1個確認、壁溝-無、竪-未確認」とある。

整理所見-写真を見ると注2までが粗質である。既報にNo34と付された住居跡が北東半を占める。南半は微傾斜となる。西壁下の土壤は約10cmの深さで写される。住居跡内の小土壤の深さは約20~30cmである。内部に土器片があり、1らしい。遺物は当センターに94点があり、瓦1、須恵器48、土師器・土師質土器15(うち52点藤岡製品)、灰釉陶器2、中世瓦2、同陶器1、同軟質陶器5、鉄製品1、鐵滓2、繩文10、近世陶器2、石5である。1は10世紀末から11世紀初頭頃の製品と考えられ、4は椀形鉄滓、3は鎌鉄片である。

O-1区 (第185図、写真図版50)

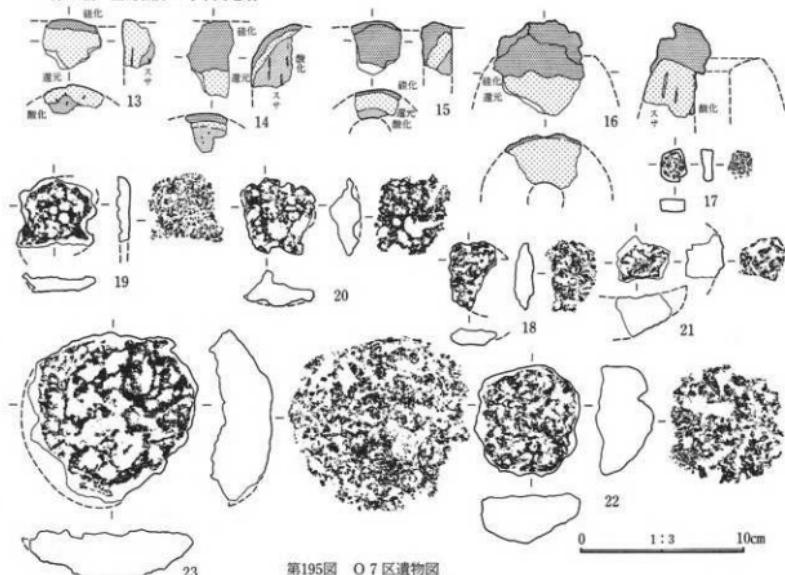
既報の一覧に「O-1、W23.5・S13.5、Bスコリア以前と以後の少なくとも2度にわたって改修された。断面V字状の溝が確認された。備考-溝」とある。さらに、溝状遺構の一覧に「B種、走向-E 3 S(東-西)、長さ3m以上、幅-2m、深さ-80cm(底部幅-40cm、切断面にみる形-傾斜の緩いV字状、備考-第二II層上、下に掘込み面あり」とある。

整理所見-順堆積の浅間山B軽石が土層断面に見えないが、西壁断面を写真で見ると、埋土中位に砂質層があり、それがB軽石の順堆積層なのかもしれない。平面図中の標は底面に近い位置に写されてある。遺物

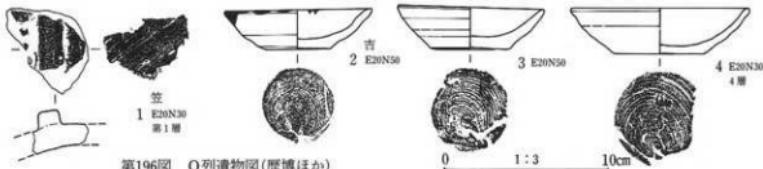


第194図 O7区遺構・遺物図

第5篇 上野国分寺中間地域



第195図 O 7 区遺物図



第196図 O列遺物図(歴ぼほか)

は当センターに95点があり、瓦75、須恵器18、石2がある。瓦は二寺から離れているのに多い。

O 2 区 (第186図、写真図版50)

既報の一覧に「O-2、W23.5・S19.5、東-西方向に走る溝あり。埋没土からかなり時期の古いものとみられる。別にピットあり時期、性格不明、備考-溝・ピット?」とある。

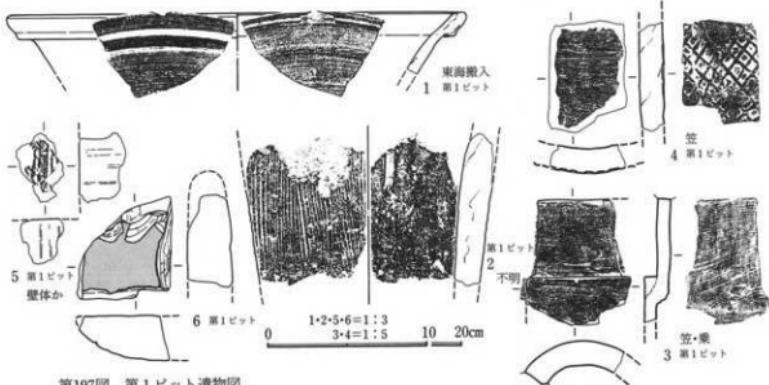
整理所見-中央に円形の土壤があり、写真では約50cmで擂鉢状を呈す。遺物は該当なしであった。

O 3 区 (第187図、写真図版50)

既報の一覧に「O-3、W23.5・S26.5、ピットが4個発見された。内・方形のもの3個は円形である。埋没土は擾乱され、時期、性格不明。備考-ピット」とある。

整理所見-一方形土壤のうち、平面図中央左下は深さ約30~40cmに写され、南東隅の土壤も近似の深さである。この2土壤のほかは小規模で浅い。北東隅は柱穴状を呈し、水準値からは42cmの深さがあり、東壁下は土層断面にかかる。遺物は該当なしであった。

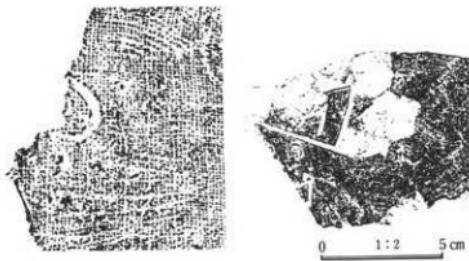
第2章 調査された遺構と遺物



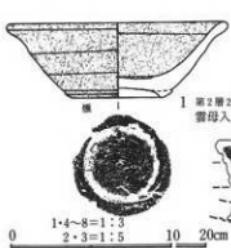
第197図 第1ピット遺物図



第198図 Cピット遺物図



第200図 文字瓦類遺物図

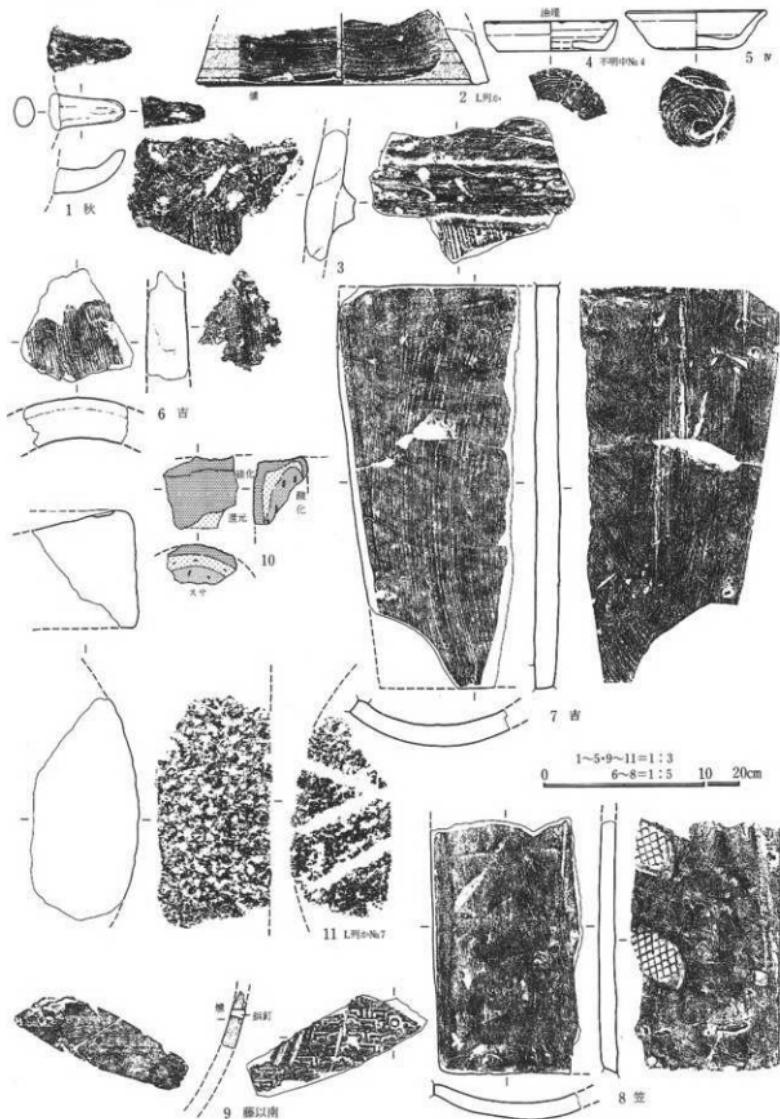


第199図 Kピット遺物図



O 4 区 (第188・189図、写真図版50)

既報の一覧に「O-4、W23.5・S33.5、住居跡を確認、電の跡も認められた。備考-住居跡」とある。豊穴住居跡一覧に「No35、O-4、W23.5・S33.5、形状一方、規模-P不明・H50cm?、方位-N45°E床



第201図 出土地不明遺物図

面の状況－良好・同穴一無、壁溝一無、竈一瓦使用、粘土竈、遺物一鉄器」とある。

整理所見－住居跡に対しNo35と名称があたえられ、南西隅には別住居跡らしい個所が平面図中にある。また北壁下の落込みは、現状の図、写真のみでは自然か人為かはっきりしない。遺物は当センターに30点があり、瓦6、須恵器14、土師器9、石1であった。第188図はおよそ10世紀後半頃の一群である。

O 5 区 (第190～192図、写真図版51)

既報の一覧に「O-5、W23.5・S39.5、住居跡2戸が重複して確認され、柱穴も2個認められた。他に青磁片、瓦巴破片も出土し、中世の遺構とみられるピットも発見された。備考－住居跡青磁片巴瓦」とある。竪穴住居跡一覧に「No36、O-5、W23.5・S39.5、形状一方、規模不明、方位-N 2°E、床面の状況－良好・同穴一個確認、壁溝一有、竈一未確認、遺物一土器片。」とある。さらに「No37、O-5、W23.5・S39.5、形状一方、規模-P不明・H40cm、方位-N 7°E、床面の状況－良好・同穴1個確認、壁溝一無、竈一痕跡、遺物一土器片・瓦片」とある。

整理所見－上層は編者が調査したので私見をまじえる。表土をスコップで除去をはじめたところ、その下部の黒色土は締っていて硬かった。そのため移植コテで硬化している面を追いながら全面露呈させた。その状態が写真図版51左上1段目の小間であるが、右下端が急斜となっているので少し進行した状態である。硬化した状態は南に高く、北に低い状態となった。その上面の注4や、東壁断面注8右側にもローム層小ブロックが入り、人為による力が加っていることが明らかであった。土層断面は後日作成されたようだ。調査面との関連では、東壁断面注8は一樣ではなく、左側の注8、中央の注8は歓らかく除去した部分に相当し、右側の注8は追い求めた硬質の個所である。その際、第192図24・25の中世遺物の発見があったことを憶えている。その日の夕方のミーティングで、中世の遺構面を考えられることを報告し、帰京した。数日後帰省した時点では既に下層まで排水されていた。土層断面注2に「当初問題となった中世の生活面」とはそうした過程での反映のようである。既報には中世の遺構とみられるピットとは、上層とした平面図の下方右側にある3穴のこと、今日思うと、黒色土中の硬さのみで掘り出したピットであり、本来的であったのかは明言できない。現在、この地帯の中に関越道新潟線が通過し、事前に発掘調査がなされ、8ヶ年に恒る整理作業は終了しているが、8分冊の報告のうち、『上野国分寺・尼寺中間地域 4』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1989に中世の集約がなされている。その中に瓦葺堂宇を持つ小見廬寺と仮称された中世寺院の報告があるが、主体堂宇は表土を重機除去した際に大半を失ってしまった。小見廬寺の主体建物跡について検討された結果、その痕跡および中世瓦の分布の範囲などから、今回報告のO 5区を含む一角に存在していたことが推定されるようになった。そのことを踏まるとO 5区の中世の硬化面は小見廬寺主体建物基壇の北縁に相当している。しかしながら、当時は基壇などという意識は欠いていたため、築土層の下面がどこかは判然としない。下方の住居跡の埋土上面位置からすると、木炭、粘土を含む注12のあたりかと思うが明言はできない。

既報中の住居跡はNo36・37と称され、方位からNo36、南東隅側に、No37は西半の住居跡であろう。Eのほか北壁下西半にも存在しており、重複顕著である。遺物は当センターに335点があり、古代・中世瓦60、須恵器123、土師器103(内黒2)、灰釉陶器3、中世陶器1、同軟質陶器3、同土師質土器29、古銭1、木炭1、石11であった。外に歴博資料中に第192図のとおり、土師質土器皿、中世瓦、中国青磁盤などがある。中国青磁片は中世の硬化した面を整査中に出土したもので、群馬県で発掘された中国陶磁器のうち初出の報告例で、記念すべき遺物である。23・24は小見廬寺中世瓦の分類では最末期の巴文で、15世紀代が推定され、古例は

14世紀代に通はる。

O 6 区 (第193図、写真図版51)

既報の一覧に「O-6、W23.5・S46.5、浅い円形のビットを確認。性格、時期不明、備考一ビット」とある。

整理所見一平面図は写真と似ていない状況にあり、円形の土壙などは、記録写真4小間のうち、1小間に痕跡が写される。他の3小間はさらに掘下がた状況である。したがって推すると平面図は上。下から発見された遺構を一枚の図中に記録したと考えられる。小見廬寺の基壇が存在しても良いのであるが、注意せず掘下がれば、黒色土中に、黒色土をもって築成された基壇であるから多くの場合に見過されてしまうと思う。注2が南下りにあるのが、気にかかる。中央には浅い土壙があり、写真には深さ20~30cmに見える。排水底面にある小溝は住居跡の周溝のように見え、北壁の遺物群は注4にもロームの小塊を加えるとあり、住居跡の竈が近接して存在している可能性がある。平面図北東隅には大きな土壙か、比較的上方から掘込まれている。遺物は当センターに261点があり、瓦32、須恵器108、土師器・土師質土器111、灰釉陶器1、中世陶器2、同瓦3、石4であった。異様に土師器、須恵器の量が多く、かつ土器の年代幅があり、住居跡重複は顕著と読み取れる。第193図1・2は9世紀中頃。3は9世紀初頭頃。4は9世紀~10世紀前半。6は11世紀前半頃である。

O 7 区 (第194・195図、写真図版51)

既報の一覧に「O-7、W23.5・S54.5、住居跡の北壁に接続して、方形のビットあり。鉄屑、焼土等出土小銀冶の跡か、備考-住居跡及び小銀冶跡か」とある。堅穴住居一覧に「Na38、O-7、W23.5・S54.5、形状一方、規模-P不明・H30cm以上、方位-N10°E、床面の状況-良好・同穴-未確認、壁溝-無、竈-未確認、遺物-鉄屑・土器・瓦、備考-製鉄跡か」とある。

整理所見一平面図中に銀冶遺構と住居跡が見える。6小間の密着焼が残されているが、それを見ると、中央の炉跡は深さ30cmほどで、南側に径20cmほどの小穴があるか、深さ20cm以上あるらしく底は見えない。炉中の埋土中位に割れた川原石、鎌瓦片などが寄せられた形で(写真図版51左下)見え、北壁下で変形の小土壙が写され、掘込は注2、3の右、左からとも見えるが、もう一層下から掘られたようにも見える。西壁下に自然石が見えるが、相当に高い位置にあり、注5の上面のあたりに相当している。炉跡と北壁下の土壙との間に凹みが存在しているが、それほど深くなく、浅く凹む程度である。炉跡内は、編者の見た気憶では壁面が焼土化していたが、関越道の僧寺・尼寺中間地域の調査では焼土化していないかったという。炉跡内の埋土は粗質である。炉跡の西側は小土壙まで、土手状にいく分高く写されている。住居跡はNo38と付され、写者に見える床面は、ローム層状に見える個所が東半に、黒づんで見える個所が西半にあり、いく分貼床されているらしい。遺物は当センターに366点がある。瓦42、須恵器87、土師器135、中世軟質陶器2、近世磁器1、鉄滓66、羽口7、石26であった。鉄滓の内訳は、楕形滓12~1590g、重い鉄滓(大多數が楕形滓)25~170g、鉄鉱石状5~105g、海綿状24~150gであった。出土遺物中で気にかかるのは壁体の存在が見られなかったこと、さらに検出遺構中に楕形滓を卸すための小形炉がどこにあるのか不明である点が気にかかる。小形炉があるとすれば、第195回23が直径約12cmであるからおよそ、そのくらいである。中央炉跡が地下構造であった場合でも、規模からして上方には大形炉があったと推定されるが、壁体片が見られないのはどうも変である。大形炉であれば県内稀有な例である。

拾遺ほか (第196~201図)

1遺跡の整理作業を行なうと帰属不明の遺物や図面が出てしまう。特に調査年代が遅まるほどその要因も増し、内容もより複雑となる。調査年代が古ければ、図面類も単純で、遺物注記も簡単であろうと一般的には考えがちであるが、それは短慮である。上野国分寺中間では調査名称が2種類、注記も2種、写真類は未整理で、撮影場所に小ポートが写しこまれている場合のほかすべて不明。このような状況の中で総てを、正確な調査区へ証明づけながら結びつけることは至難であり、苦難と述たのはそのような意味からである。

調査区名称の二種の複雑さは遺物取上げの際の心理的錯覚や、隣接調査区と名称の誤りをより多く起させ、ことにE20.0、N50.0という座標名称の呼称法は、机上論では正確無比の呼称のように思えるが、作業性としては10文字表現で、遺物注記量は多くなり、判読不明要因は増加し、またE20N50と云う場所ではE20 S50のように1文字で帰属不明遺物となり、個人的には関心できない。注記がありながら帰属不明となつた遺物と未注記の遺物類について以下に触れたい。これは群馬県埋蔵文化財調査センターに保管された資料についてである。

図面類は、既報で扱われた各調査区は統べて帰属させることができたほか、写真類は密着焼と少量のスライドしか見当らなかったが、それらについても帰属させることができた。なお、ネガ類は、写真ネガ収納、アルバム保管場所を数度に亘り統ざらいに近い作業を行なつたが探し出すことができず、図面類も、そのようにして探し出しての整理である。

未注記遺物

その1、鉄滓が多く詰められていた箱中に86点があり、羽口1~40g(以下g略)、椀形鉄滓13~1520g、重い鉄滓58~220、海綿状鉄滓10~70、鉄鉱石状4~350がある。これらは鍛冶遺構とされたO7区から鉄滓が多く出土しているので、O7区からの出土かもしれない。椀形鉄滓の接合関係は試していない。

その2、未注記の袋中に3点があり、瓦1、須恵器2、詰められていた。

その3、未注記の箱中に101点があり、瓦14、須恵器34、土師器44、円筒埴輪1、中世軟質陶器1、石7がある。瓦類が含まれていることは二寺中間地域の遺物類である可能性が高いが円筒埴輪片が含まれているのは、この資料と第197図2のみであった。上野国分寺西方に小古墳があり、円筒埴輪が採集できるので周辺から、この地に埴輪の及ぶ背景はある。

その4、未注記の袋中に16点があり、瓦5、須恵器3、土師器8である。瓦が含まれ二寺中間地域の資料らしい。

A・B列か

注記にE方向らしき注記が荷札中にありながら判読できなかつた資料がある。それはS方向を示すSの字でないことから、A列8区、B列8区中のいずれかの区に属する可能性があり、さらに遺物の出土のない区がA列ではA2区に、B列ではB2・3・6・7・8区があり、より可能性が高い。総量として56点あり、瓦34、須恵器13、土師器3、灰釉陶器2、中世陶器1、同土師質土器3、石2であった。このうち土師質土器は皿で、中世遺構が調査区にあるのはB2区で溝が発見されている。

C列6区か

注記にN39.5とのみある。N39付近を調査したのはC6区のみであるため、同区に可能性が持たれる。総量で5点あり、瓦3、須恵器2点である。これがN36.5の誤記であれば、該当か近接がA~G列の6区に相当する個所が生じ、可能性が悪い方に増大する。

E列か

注記にW4□.5とあり、不明字が6のように見え、以下北方向の判読のできない個体が一群として33点あり、瓦5、須恵器4、土師器7、中世陶器1、同軟質陶器1、同土師質土器2、近代瓦1、石2である。E列で遺物なしの調査区は1つもない。第201図4は中世土師質土器皿である。

I・K列か

注記にN13.5W153.5とある。W153.5に調査区はなく、至近はIとK列である。N13.5に該当があるのはK2区である。K列は遺物なしの区は見られない。総量は14点あり、瓦8、須恵器2、土師器3、石1である。

L列か

注記にW126.5以下判読できない一群が25点あり、瓦8、須恵器10、土師器5、灰釉1、臼(小形)1の内訳である。L列に遺物なしの調査区はない。臼は茶臼様に小形である。

O列か (第196図)

注記にE20N50とある、量は48点あり、瓦12、須恵器12、土師器18、中世土師質土器4、石2である。国分二寺中間であれば、E20ラインであるが、Nライン側に調査区はなくS50の誤記ではないかと考えられる。S50はO7付近である。県立歴史博物館にも同様の個体があり第196図に掲げたが、須恵器壊3は、完器に近く、瓦塔片も含まれていた。既報に瓦塔出土の記載はなく、国分尼寺かとも思ったがE20N50付近に調査区はない。

第1ピット (第197図)

遺物注記なく第1ピットと記入された一群があり、遺構図や全体中に該当なく不明であるが、有段男瓦片が含まれているので上野国分二寺中間のようである。総数114点あり、瓦29、須恵器49、土師器25、灰釉陶器2、埴輪1、繩文1、壁体1、近世陶器2、石4であった。石類中に石英があり、火打石様に、尖部は打痕消耗がある。埴輪片は円筒埴輪片で、先の未注記その3にも埴輪片が含まれている。壁体は壁材か電材かは不明ながら、長いスサが混入されている。

C区 (第198図)

注記に遺跡名なく、C区とある。総量は3点あり、中世土師質土器1、石2である。中世土師質土器は皿で、第198図に掲げたが、15世紀頃の形態、輥轆左回転であることは、当遺跡の中世土師質土器の出土時期が15世紀代に一盛期があること、さらに製作技法の一部も共通している。したがって当遺跡の遺物としての可能性は高い。

Kピット (第199図)

注記に遺跡名なく、Kピットとある。総量は142点あり、瓦16、須恵器121、鉄製遺物4、鉄滓1-185gである。これらのうち瓦片が含まれていることは、当遺跡に可能性があり、鉄滓は鍛冶関連とすればO7区に例がある。注記にはさらに、2層との記入があり、O7区の注記はやや複雑で単純に2層という表現は使用できないのではないかと思う。K列という意味であっても、K列に鉄滓の出土例はない。

Lピット

注記に、Lピットとある。総量は15点あり、瓦8、須恵器4、石3であった。瓦片が含まれていることは当遺跡に可能性が高い。L列という考え方には、KピットをK列と考えた前例でも考え難かった。